

八葉形説の消滅

(七)平家物語とアヲビヤ夜話との神鏡記事

りしものにして頭なるや明かなり。次に蓋とは舊解釋の如く、臍を意味せざるに非ずと雖、専ら「根ざし」しべ等長き直立せるものを意味せる語にして鏡の裡面中央部の紐付け等なりと解するは牽強附會たるのみ。此くて頭なり、帯ある神鏡は決して平面に非ずして、前記吾人の想像に理由を與ふるものと謂ふべく、又其圓形に坐しますことは、さうに引用せる所の「圓短なる語に由つて之を知るべく、本居の八咫八葉形説は自然消滅に歸すべきものとす。而して頭あり、帯ある御形狀は、或は第十二章六節の挿畫に由りて想像し奉るべきか否か。神鏡の卷は奇異附會のものなりと

### 七 平家物語とアヲビヤ夜話との神鏡記事

神鏡の容器黄金鐘の形狀と寸尺との智識は、又他の材料を吾人に活用せしむるなり。平家物語は歴史小説なり、其鏡の卷は奇異附會のものなりと

神鏡と神璽

鏡の卷の記事

雲の出入

して一概に棄て去らんとするは從來の懶惰學者の研究法なりき。然りと雖亦根柢深き傳説を載せ居るものなることは世界的研究之を吾人に教ふるなり。鏡の卷三種の神器を謂ひ、神璽に就て記する所ありと雖、神鏡に就ては説ける所なし。意ふに神璽と神鏡とを同一視せるもの、如く、又た其記事と同一なるものをアラビヤ夜話中に發見するは、吾人愉快の感なきに非るなり。何となれば吾神鏡の名聲の世界的なるを示めずものたればなり。鏡の卷、神璽(即神鏡)に就て記るして曰く「凡そ神璽と申すは神代より傳はりて代々の御帝の御守りにて、驗の箱に納めけり。此の箱開くことな見る人も無し。之に依りて後冷泉院の御時、いかか思しけん、此箱を開かんとて蓋を取り給ひしに、忽ちに箱より白雲上り給ひけり。良ありて雲は元の如く返へり入らせ給ひぬ。紀伊の内侍、蓋覆ふて絨げ納め奉る。日本は小國なりと雖、大國にまさる事は是なりとぞ。神璽とは我朝の起より出でたり」と。

アラビヤ夜話の  
記事

雲の出入

兩者同一の記事

伊勢關係の地名  
神名

アラビヤ夜話漁夫の話中之と同様なる事あり。其大略を記さんには、  
 漁夫あり。一日、四回海に網を投ずるを例と爲す。三回とも得る所なく、四回  
 に至りて黄銅製の鐘を得たり。鉛を以つて密閉し、其上に封印あり。漁夫  
 之れを振り動かすも音響なし。異しみて小刀を以つて之を開くや、内より  
 雲立ち上り、海一面を蔽ひ、遂に巨大なる妖怪となる。然りと雖、漁夫の説諭  
 に由りて再び雲となりて鐘中に入りしは、漁夫直に蓋し再び之を密閉し  
 たりと。若く此兩記事を比較するに、兩者共に、蓋し再び之を密閉し  
 た。自ら元の如く返り入る。云ふが如きは、全然同一事の別傳と見做す  
 べきなり。

特に後者が、黄銅製の鐘を閉じ、鉛もて密閉して、封印あるを謂へるは、神鏡  
 容器の黄金製にも、鉛もて密閉し、之に星形の圖を鑄りありと謂へるに、  
 殆ど同じきを感ずるものなり。

又此アラビヤ夜話中の此の一段の記事中に出づる所の「サカ」(Saka)な  
 る神名は、是れ酒神關係(酒の悪靈)の名稱たり。又たアナフ(Araf)及びハラキ

八日  
前日  
國懸の鏡  
名

ア(Barakis)等の人名は、倭姫世紀即天照大御神(八咫鏡)のチネオネア伊勢鎮  
 坐記事中に出づる所の神名及び地名にして、後に天照大御神伊勢鎮坐地理  
 の章に論ず。アラビヤ夜話中の漁夫の話の海中に獲たる所の黄銅鐘は、神器  
 容器の異傳たるを示めし、又其煙關係より、鐘の巻中の神靈と同一なるもの  
 なるを暗示し、又た其形状の、神鏡容器に相似たるより、遂に鐘の巻の神靈も  
 アラビヤ夜話中の黄銅鐘の記事も、別々に同一神話を傳へ居るものを見る  
 べきなり。

前傳は詳細に就ては、讀者各自アラビヤ夜話を讀まんことを勸む。又之れ  
 戯曲に傳はる所の阿漕の平治傳とも爲り、神話史傳複雑なる混交を爲せり。  
 若し尙ほ進みて比較研究を行はんとせば、東西材料甚だ多く、此一問題のみ  
 を以てするも、優に三冊を成さざる可からざるべし。

八日  
前日  
國懸の鏡  
名

八咫の鏡の他に三種の鏡の名稱あり、(一)日承(二)日前(三)國懸是れなり。是

「日矛」は天馬泉  
の意味す

日神は又た水神  
たり

れ皆前記八咫の鏡と同一性質の名稱にして余の非平面説を證明するもの  
なり。而して是等は盡く發音の假字なりと知ることを要す。  
日矛とは其矛字あるより、或は槍類と思へるものありと雖、何等其如き  
ものに非らずして、單に「ヒボキ」の發音の假字たるのみ。余は前既に日高の  
*hidu* たり、源泉たるを謂ひ、又た八咫の鏡の源泉無盡の壺の如きものなる  
を想像し奉りたると同じく、此日矛も亦源泉を意味せる所の *iron-koyas* の  
簡略に發音せられて「ヒボキ」となりしものなりと爲す。是れ希臘神話の天  
馬の蹄撃より湧出する所の源泉の名稱と爲す所にして要するに源泉の記  
號なるが如し。何となれば「ヒボキ」の「ヒ」は「ヒ」の假字なりと爲す。  
日本書紀一書の言ふ所は之を説明すればなり、曰く「日神の田に三處あり、  
皆良田なり。須佐之男の田に三處あり、皆磽地にして雨ふれば流る。故に  
八十萬神を會へて之れを問ふ。思兼の神曰く、宜しく彼神(日神)の象を圖じ  
て招勝ぎ奉る可し」と。即ち石凝姥を以つて治工と爲し、天香山の金を採り  
て日矛を作らしむ」と。此に見よ、日神は水の神として表はれ給へること

「日前」は源泉湧  
出の意味す

「國懸」は凹形を  
意味す

を。須佐之男命の田は磽地にして雨ふれば流れ去り。凸地にして水を保  
留すべき設備なきを示すものなり。されば此地に天馬泉たる日矛を作る  
は當然の事にして、槍或は矛等何の用をか爲さん。  
日前—此日矛一名を、日前の神と謂ふ。舊説の或者は、日前を「ヒボキ」と  
訓せり、雖「ヒボキ」と訓するを以つて寧ろ正音に近すと爲す。是れ前説日  
高(*hidu*)と同語の「ヒボキ」(*hidu*)「ヒボキ」と爲りしものにして、源泉湧出  
を意味すればなり。其日前の文字に就て之を見らるも、前を「クマ」と訓すべき  
やうなく、「サキ」と訓するは正當にして、日前は「ヒボキ」なるや正説たるなり。  
此くて日矛、日前は同一物の別名たるなり。又た知る日神は日の神たる  
と同時に水の神に坐しませることを。  
國懸—鏡の名に又た「クニカス」(國懸)神あり。是れ亦前諸名稱と同一義  
にして、平面鏡に非る、他の物を示めすものゝ如し。日矛は源泉なり、日前は  
湧出なり、國懸の神は如何ん。聊かなりとも博く言語を知れる者は、或は想  
ひ出だす一語なるべし。かの須佐之男命の田は磽地、凸地にして、水出です

日神の像は凹形なり

天の日矛なる人物とは無關係

(九)眞賢木の三枝裝飾の神秘

水溜りす。されば其救済策は凹形を作るにあり。『凹』の羅典語を *Concavus* と言ふ。『クニカ』には其轉訛と見て當然なるべく、凹形を招請して、こゝに水は溜り、或は泉は湧出するを得べきなり。此にて八咫の御鏡を始め、其他の諸名稱及び御形狀は、大要之を告知所得たるもの、如く、『日神の像』は平面に非ずして凹鏡たり、日高たり、日前たり、國懸の御形狀なりと知るなり。世間日矛の此意味を知らず、垂仁天皇の時に來朝したる天日矛は何等關係あるが如く思へる者あり、雖實は全然關係有るに非ず、此れは鏡名にして *Hippo-omori* の語原に出で、彼れ天の日矛は人名にして、語原は *Hippo-omori* なる太古の太天文学者たるなり。是に就ては後に論ずべし。此にて前章以來『天津日高彥種』の御名あり、八咫の御鏡、日矛其他に至るまで、整然たる條理を以つて、系統的に之を説明し得たりと信す。

九 眞賢木の三枝裝飾の神秘

眞理と統一的説明

三枝裝飾の意義

「ニキテ」(和幣)の意味

眞理は統一的説明力を有するものたるべし。岩屋前にて諸神が天の香山の眞賢木を掘り取り、上つ枝に玉を懸け、中つ枝に鏡を懸け、下つ枝に青和幣及び白和幣を懸けて、讚美の辭を奉り給ひし事の神秘は、又た吾人の所説を證明するものなり。岩戸前の儀式及び遊戯は、是れ「オギシ」にして、酒神教のものなるは、前既に之を論せり。請ふ試みに上つ枝に懸けし玉は、葡萄を代表するものと見做せ、中つ枝の八咫の鏡は、前に考證せし如く、酒壺酒杯なるべく、下つ枝は青白の和幣是れ流出を代表せるものにあらずや。『和幣』之を「ニキテ」と謂ふ、希臘語「ニキテ」( *Nixite* ) 即ち、溢れ流るるを意味せる語にして、此三枝裝飾の神秘は、葡萄(玉)を甌に入れ、以つて酒泉鏡をして、溢れ流れ(和幣)しむるを意味するものと謂ふべく、水神の威徳たり、酒神の記號たり、又た天つ御國の眞清水たる日繼の隆えまさん、御號と謂ふべきなり。是れ亦八咫の神鏡の極意なり。釋迦教之に由りて教を作り、梵鐘を必要物となし。耶蘇教之に基づきて『酒杯』を忘れざるなり。國典の神秘愈々出でて、愈々神秘、合意の深遠、大智に非ずんば誰か能く之



(一)極東九州に何等遺蹟も明らな

からざる史實なり。何となれば尙ほ此事に關しては大に疑ふべき三個の理由ありて、(一)は現日本の傳説上の古蹟の疑はしきこと、(二)は此史傳前後の光景は依然神話的にして、且つ希臘的の趣あるを以つてなり。  
(一)從來日本史家の以つて、天孫降臨の高千穂なりと爲す所の、現日本の九州の霧島山説たるや、甚だ不明瞭なるものにして、此地何等神代帝都の古跡らしきものあるなく、神代記中の地名は多々之れ有り、と雖、全體の衝突矛盾なきこと能はず、是等は徒に後人の偽作的、或は移寫的命名たるを思はしむるのみにして、三代の皇陵の如き、其事實的片跡だになし。若し此地附近に三代の皇居及び御陵ありしとせば、祖先を尊敬する日本皇室も臣民も、必ずや、相當に三帝の御陵を修築すべく、假令時の推移に由つて自然の破壊作用行はるゝと雖、尙何等か其遺蹟あるべきは自然にして、又た其他の記事と地名とは符合せざる可からざるなり。然るに全く其事なく、且つ三代の間「一百七十九萬二千四百七十餘歳」日本書記神武紀の年所を歴て、而も何等の事變なく、遺物なく、遺蹟なく、治蹟なく、帝王皇子の陵墓らしきもの一もあるな

(二)希臘的光景なり

(三)二個所の高千穂—余の昏惑  
史材の混亂

く、此狹小なる日本諸島に於て、遼遠の地猶王澤に霑はず」と云ふの有様なり。是れ豊盛徳厚大なる我皇室にある可きの事ならんや。此に於て吾人は現九州の霧島山天降説を信すること能はざるなり。是れ余が天孫降臨の九州の地に非ざるを感ずる第二の理由なり。  
(二)次に、余は天孫高千穂降臨以後の古事記、日本紀等の記事を見るに、光景尙ほ希臘的にして、又た尙ほ未だ神話の域を脱せずとの感を起し、従つて天孫の降臨地は、決して極東日本の地に非ずして、希臘方面ならざる可からざるを思ふ者なり。  
是等二個の理由は、余の研究範圍をして、尙ほ極東現日本の地に來らしめず、依然希臘方面に留まらしめしものたるなり。

### 二 二個所の高千穂—余の昏惑

史書の研究には先づ十分の批評眼を有し、先づ其記事の純雜眞僞を明かにせざる可からざるなり。神話時代の歴史は非常に混線多きものにして

二個の高千穂

材料亦種々に交叉紛雜し、或は二事實に於て二種に傳へられ、或は二個の事實にして、一に混合することあるを記憶せざる可からず。余は高千穂地理を考證して、全く希臘なりと信じ居たるが、彦火々出見の地理を研究して、前に高千穂なりと信せし所の、或は誤れるに非ざるやを感じ、特に日向の「襲」の國なるもの、他に之れあるを知りて、自己の前説たる高千穂希臘説に動搖を生ずるを感じたり。

其理由

然りと雖尙ほ々々此二種の着眼地點に就て十分の思考を費やし、再び前説を熟考するに、前説必しも誤れるに非ずして、尙其數多の地名は系統的に集團を保ち、高千穂希臘説は依然として存立せざるを得ざるを知るに共に、新に出でたる別所の高千穂も亦之を否定すること能はず、爲めに二個の高千穂を認めざるを得ざるに至れり。是れ余の考證の誤れるか、或は研究の足らざるか、余は一時昏惑の状態に陥らざるを得ざりしなり。然りと雖昏惑は之を光明の路に導かざる可からず、疑問は成し得る限り解かんことを要す。此に於て吾人は高千穂の二個所にあることの理由を考

(一)地名移寫

へて(一)は人種の植民より神話地名の移植(二)は史傳及び史料の記事混交なりと爲す。何となれば

(二)歴史傳記の混交

(一)神話なるものは諸方に傳はるものにして、特に同人種の植民は同一神話を持ち傳へ、同一本源地名を植民地に寫すものなるが故に、此點より考ふる時は、二個の高千穂全く之れ無しと謂ふ可からざるなり。

饒速日命と速々葺命との混交

(二)然りと雖、吾人の尙ほ疑念とする所は、速々葺命の天降記事と、其兄饒速日命の天降記事との混線あらざるや否やにあり。

素より、國典の瞥見に據れば、饒速日命と速々葺命とは兄弟たり、別人たりと雖、又た之を熟考する時は、同一人間が二人格として傳へられしものゝ如き、感なきに非るなり。こゝには其詳細を論ずることを爲さざる可しと雖、只だ其兩人の名稱中の重要な語源を研究する時は、饒速日なる語は希臘語、勝利の光榮を意味する所の *Niké-pháin* にして、速々葺命の御名は同じく又た「新勝利」を意味する所の *Neu-sig* なるべく、其勝利を意味せるや兩者全然同一たり。特に舊事記の傳ふる所に據る時は、饒速日命の正當の君主とし

余の所見

ての天降と、邇々藝命の天降とは、殆ど其趣を同うせるは、吾人をして兩人の同一人物の二様の傳と見せしむるものなり。此くて此兩人は一人の如く、又た二人の如く、其記事亦混交の觀なきに非るなり。人物史傳既に混交せば其地理亦素より混交すべきなり。而して此種の混交は書物上には可能なりと、雖實地々理を研究するに於ては、こゝに明瞭なる判別を要することゝなるなり。

されば余は今暫く、此思想を以つて、高千穂に二個あるは同一人種の植民關係に因づくものとなし、次に史傳史料の混交は別に二個所を一個所の如く爲せりと爲し、其混交を判別し、其種々の地名は成らん限り正當なる實地々理に集團せしめて考究することゝ爲さん。其二個の高千穂とは

(一)希臘高千穂、(二)饒速日命の白庭山天降記事を主とせるもの、

(三)阿弗利加高千穂、(四)専ら彦火々出見命關係の方面及び希臘羅馬神話所傳より傍證せるもの

是れなり。余はこゝに専ら地理を主と爲し、歴史の判別に就ては之を略す

(三)豊葦原の瑞穂の國

余の最初の發見地名

豊葦原とはテッサリアの事なり

べし。何となれば饒速日命、邇々藝命、彦火々出見命、神武天皇に關するごとくは非常の混線あり、又た其希臘傳ありて、又た混線を増大するの恐あればなり。(讀者に注意す、饒速日命の研究を行はんと欲せば、希臘のイナナ(Ιννα) - Minis-Minid) 日本の稻水命なるトロヤの大英雄を研究せんことなり)

余はこゝに先づ饒速日命混交の高千穂を希臘に研究するには、其方面の地理の系統的集團に據らんとするものなり。先づ其總名たる「豊葦原」は始めん。

### 三 豊葦原の瑞穂の國

天孫は豊葦原の水穂の國に降りませり。「天」は小亞細亞なるは既に之を證明せり。吾人若し天孫降臨は極東日本に非ずして、希臘なるが如しとせば先づ豊葦原の國を發見せざる可からざるなり。

豊葦原はテッサリア、今若し假定説たる天孫降臨は、希臘なりとせば、余は希臘地理の探検を爲さざる可からざるなり。然り、只た假定に導かれて、盲



「テッサリア」なる語

第十五章 天孫降臨地理希臘高千穂

三〇六

目的に古代地圖を研究せり。即ち希臘の北方トラケー、マケドニア、エピルス等の地圖を探り、漸次南下してテッサリアに來れり。あつたり。求むる所是れなりき。

「テッサリア」は「豊草原」なる語なり。何となれば Thessalia とは Thes (Thes) Salia との合成語にして豊富神惠の地を意味し、salia の語は salis の語に出づる語にして「ハリア」となり、又た縮まりて「ハラ」となる上登飛躍吉兆の語なり。故に此テッサリアは又た Thessalia とも爲し得べき語にして若し此兩語の間に「ハラ」と同意味にして上登を意味せる「アシ」(Asis) なる語を挿む時は「テッサリア」或は「トヨハラ」は Thessalia (豊草原) となり、テッサリアと同語の地名たるなり。此に於て豊草原なる地名は明かに希臘のテッサリアなるを知るなり。

瑞穂國は別に地名として表はれ居らざるなり。何と爲れば是れ此國の形容語なる可ければなり。意ふに瑞穂とは必ずしも「稻の穂」を意味せるに非ず、又た必ずしも「水」を意味せるに非ずして廣義の生産的善美を意味せ

「ミューズ」

(四)高千穂

オートリ山

第十五章 天孫降臨地理希臘高千穂

三四七

る所の Museos 或は Musos 即ち「ミューズ」ムスビ(産靈)の國を意味せる名稱にして「ムゼオ」或は「ムジオ」の「ミズホ」(瑞穂)となりしものなり。此語の發音も意味も、含蓄變化豊富なりと雖、此に其説明は之を略す。其非常に尊貴の意味あることは之を念頭に存せんことを注意するものなり。

希臘のテッサリア此瑞穂の國と稱すと雖、埃及方面亦「ミューズ」の國にして瑞穂の國たることも亦こゝに一言し置く、何となれば是れ同一種族の國土たればならん。

四 オートリ山—高千穂

高千穂—若し極東現日本の九州の霧島山にして、是れ天孫降臨の高千穂ならんか。如何なれば「高千穂」の如き光榮なる歴史ある名稱を棄て、無意味なる霧島山の如き名稱に變換したるか—余は九州人等の國史の愛なく天孫降臨地を尊敬せざるの甚しきを思はざるを得ざるなり。然るに彼等が霧島山の名稱を謂ふも、高千穂を謂はざるは、天孫降臨の此山に非るを示

高千穂はオート  
山なり

「高」と  
「フチオ」と高千

他の語源

めず一證とも云ふべきなり。高千穂はオート山(Othys)是れなり。此山別名を  
 高千穂はテッサリア南境なるオート山(Othys)是れなり。此山別名を  
 Othys 山と謂ふ「高」(Othys)を意味し又「高」を意味す。此にオート山と  
 高千穂の「高」なる名稱とを關係せしむるを得たり。今若前述「タカ」と此「フチオ」  
 此山の北麓をフチオの地(Phthia)と謂ふ。今若前述「タカ」と此「フチオ」  
 を連結せば如何ん。是れ「タカフチオ」にして「高千穂」となり得るものゝ如し。  
 是れ記事全體の大觀より余が始めに求め出だせし語源なり。然りと雖此  
 語源は當らざるものゝ如し。されば尙ほ第十七章に於て第二の高千穂を  
 參考して此語源を定むべく、今はこゝに暫定的説明と爲し置くに止めん。  
 然りと雖、此語源は假令當らずとするも、此オート山の高千穂なるとは  
 確にして、後に論ずる高千穂語源より其證明を之に反射し來ることゝ爲さ  
 ん。只こゝに簡單に一言せば、此オート山は「鳳凰」の日本語たることにし  
 て、鳳凰は之を Phoenix と謂ひ、又た Daedalus と謂ひ、ダカチロ(ス)なる語の發音  
 より「タカチロ」の轉訛音生することとなり。其證明は請ふ之を第十七章の高

楳日はクシヒニ

遷々藝命の御陵

千穂論に譲らん。  
 楳日の二上―極東日本の地には既に真正の高千穂の峯の名なし楳日の  
 峯の名稱は如何ん。益々之れ無し。然るに前記オート山脈にはクシヒ  
 の地名炳として存在す。即オート山脈の西方にクシヒニア(Xythis)の地  
 あり。又た同名の湖水あり。之れ楳日にあらずして何ぞや。二上とは前  
 記 Phthia の「フタ」と縮まりし名稱にして、フチアの上、或は山を意味せるもの  
 如し。  
 遷々藝命の御陵―尙ほ關係地名の集團を作らしめんが爲めに、希臘に於  
 ける、遷々藝命の御陵所在地を考證せん。  
 日本書紀は遷々藝命の御陵は筑紫日向の可愛の山にありと爲す。此筑  
 紫日向とは、決して現日本の筑紫にあらずして、希臘の日向國(地理參照)を  
 謂ふものにして、是前記テッサリア南部なるオート山及び楳日山の西南部  
 にエニアの地(Enia)の地名あるは即ち此可愛の山なる可く、エニアニア  
 は「エノヤマ」可愛山となりしものゝなるべし。

(五) オートリ山神話上の根拠

神々の古戦場

此 *Ategina* は「イナイの地」を意味す。御陵の所在に由つて、又た此命と前述希臘神話の「トヤヤの英雄イナイとの同一なるを判知するなり。此くて吾人は豊葦原、高千穂、穂日及び可愛の山等の名稱は、系統的に之を集團せしめ得たり。天孫降臨地を以つて希臘「テッサリア」なりと爲すも、道理なきに非ざるべし。然りと雖、尙ほ此判断は他の材料及び他方面の地名との連絡を結成するの點より十分其正當なるを證明するものなり。次々の章皆此考證に光明を反射すべし。

五 神話上オートリ山の根拠

余は天孫が降臨し給ひしは、前記オートリ山なりと爲すは、素より地名の系統的集團法を以つて之を證明するを得べしと雖も、又た神話の根拠を有するものなり。これ此山は神話時代より有名なる山にして、ゼウス神國とクロノス神國との戦争の時、前者は「テッサリア」北部のオリンポス山を本據と爲し、後者は、此オートリ山を本據と爲し、との神話は、余が此オートリ山に看想し

日本人は「テタ」神族

(六) 天孫降臨の路順

猿田彦の國タルソス

たるを是認するものと謂ふ可し。素より希臘に傳はれる所の神話は、彼等後代の發生物にして、彼等自己を揚げて、他を貶せるものありと雖、亦吾人に傳はれる所は自ら別種のものありて存し、こゝに吾人が希臘系論を爲すと雖、亦別種の神話傳説を有せるものなるを知るなり。然りと雖、人種の大同中には、又小區別あるものにして、吾人は種々彼等に傳はれる所の神話と、吾人に傳はれる所とを比較して考ふる時は、其優劣は別問題となし、吾人は「テタノス」(Titans) 神族に屬せるものなるを認めざるを得ざるなり。然り、是れ吾人は希臘有史前の人種たり、希臘人の祖先なりと稱する所以なり。

六 天孫降臨の路順

タルソス府の猿田彦神、天孫降臨の時、天の八衢に居て、上は高天原を光し、下は葦原中國を光らす所の赤光色の神ありて、天孫を奉迎せり。猿田彦神と謂ふ。「サルダ」(Zalda) とは赤色を意味する希臘語にして、其赤色は酒

其考證一羽扇と天狗

「宇岐士摩理」は「乗船」

「蘇理」はソリ港

第十五章 天孫降臨地理希臘高千穂

關係の意味を含めり。天の八衢とは何處なるべき。必ずや交通の要路なるべく、意ふに是れキリキヤのタルソス(Tarsons)府なるが如し。此タルソス府は天馬ベカソスの羽翼の落ちしと傳説する地名にして、天馬は即ち酒の産物なり。元來猿田彦神は鼻高天狗と稱する神にして、天狗は羽扇を持ち、意ふに是れ天馬の羽翼を表せるものにして、此羽扇傳説と天狗の羽扇と天狗猿田彦とを順次連結して考證して、こゝに吾人はタルソス府は猿田彦の國たるを知る。然り、此地はAmnos山の關門、東西交通の要路にして、實に天の八衢の地たるなり。(タルソスはホーロの耶蘇教傳道上有名なる地。耶蘇教は天孫降臨史に至大の關係を有す)ソリ港田立猿田彦此地に天孫の降臨を奉迎し、又其臨幸しますべき方角を教へたり。余の見る所を以つてすれば、天孫は此地より聊か西方の海港なるソリより乗船して、海路を取り給ひしものゝ如し。古事記は曰く「天の浮橋に宇岐士摩理蘇理多々斯豆筑紫日向の高千穂に天降りましき」と。「浮橋」とは船なるべく、宇岐士摩理とは希臘語 *kyojuin* 即ち「搭乗」の語なる可し。

地名の系統的集

摘要表

何となれば「オキソマイ」の「オ」は「ウ」となり、語尾の「マイ」は「マリ」に轉訛し、「オキソマイ」は「ウキシマリ」となり、「天の浮橋に搭乗し」との明瞭なる意味を得るなり。「蘇理」立たしては「蘇理」を出立してを意味す。乃ち「蘇理」とは「ソリ」にして、キリキヤ海岸の一都府なり。意ふに良港の都市なる可し。今若し此「宇岐士摩理」及び「蘇理」の言を舊來の如く、浮島在り「進」り立ちの如く解釋する時は、何等得る所有らざる可し。要するに「宇岐士摩理」は乗船、「蘇理」は地名と解すべきなり。

此くて天孫はアーメニアなる高天原を出立し、キリキヤ海岸に出で、タルソス府を通過し、ソリより乗船して、希臘オトリ山なる高千穂の峯に降臨し給ひしことを知り、歴史地理―地名―の集團は秩然として之を系統するを得たり。

- 天……………アーメニア(Armenia)
- 天の八衢……………アマノス關門(Amanus)

猿田彦の國……………ギリキアのタルソス(Tarsus)  
蘇理……………ソリ(Soli)

高千穂……………希臘オリーブ山(Olrys [= Hierax = Trocha] = Trocha-Ph-

liotis

楳日……………クミロニア(Xynise)

可愛の山……………エニアニア(Aeonania)

（以下は非常に小さい文字で書かれた注釈や補説と思われる）

(一)天孫の遊  
行

天孫遊行記事

第十六章 天孫遊行と鹿葦津姫

三子生誕と希臘諸民族

一 天孫の遊行

天孫は高千穂即ちオリーブ山に降臨しませり。然りと雖又忽ち楳日にて遊  
行して吾田の長屋の笠狭の崎に遊行し給へり。吾田の長屋とはテッサリヤ  
の海を隔て、東北に當れるカアシチケールなる三半島ある國を意味す。  
天孫は「楳日の二上の天浮橋より……………葦肉の韓國(書紀空國)と書す。「カラ  
クニ」と訓むべし「ムナクニ」と訓むは誤謬を、頓丘より國竟ぎ行去りて、吾田の  
長屋の笠狭の崎に到ります。笠狭の崎に麗き美人の遇へるに、誰が女ぞと  
問ひ給ひき、答へ給はく大山津見神の女名は鹿葦津姫、又の名は神吾田津姫  
又の名は木花の佐久耶姫と申し給ひき(古事記、日本書紀)

極東現日本に非

國

ヨウボイアのガ  
ルキス

韓國はカルキス

屋笠狹及び鹿葦津姫等の諸名稱に就いて系統的集團法を行はんとするものなり。

開素より極東日本の九州には是等の地名殆どあるなく、脊肉の韓國の如きは夢にだも存在せざる地名にして鹿葦津姫の御名の如きは何等認むべきものあらざるなり。然るに余は之を前記カーシデケイ國に其存在を明示するを得るなり。

### 二 脊肉の韓國及び頓丘

ヨウボイアのカルキス國「脊肉」の語は余未だ明瞭なる觀念を得ず、從つて意義上の連絡を取り得ずと雖、要するに是れ希臘東岸に沿へる所のヨウボイア(Euboea)島なるは明かなり。何となれば此地に頓丘及び韓國あるを以つてなり。

韓國—とはエウボイアのカルキス(或はカーシズ Chaliss)府の事にして、青銅を意味すカラ(金)是れ韓たるのみ。

頓丘はヒュチア  
エオチス

國  
(三)鹿葦津姫

カーシズと鹿葦  
津姫

頓丘—天孫は此カラ國を頓丘より通過し給へり。頓丘とはヨウボイア北部ヒュチアエオチス(Hythia)の訛にして「ヒ」とは往々合して「音」となり、其れに従屬し來る母音亦合するものにして、又其語尾チスを略す時は「ヒチ」なり。此の「ヒチ」は「ヒチ」の音に於て「チ」は「シ」の音となるべし。

意ふに天孫はヒュチアエオチス(頓丘)よりカルキス(韓國)を通過觀察し給ひしものゝ如し。是れ通過の土地なり。

### 三 鹿葦津姫の國

鹿葦津姫とカーシデケイ—天孫はエウボイアを通過して次に北じてカーシデケイ(Chaliss)國に到りませり。是れ吾田の長屋なり。然りと雖余は考證の便宜上先づ鹿葦津姫に就て説く所あるべし。

鹿葦津姫の名義

吾田はアポロの別名

長屋は長矢即メソイネ半島

元來此カーシヂケイとは前記ヨイアのカーシズ人の植民せりと稱する地にして此國名はOriaとDikeとの兩語より成れるものにしてカトシズは發音其まのにして鹿葦津にあらすや。此に於て余は此國を以つて鹿葦津姫の國と爲す。然りと雖「カーシジ」とは何をか意味す。是れ銅器を意味するYakkeにして其Yakkeは日本語酒杯を意味せる「カーラケ」なる語に當るものゝ如きは、此女神々話の遠親上之を察し得るなり。其詳細は第十七章八節に之を説くべし。

吾田「此女神は吾田の長屋に居給へり。此國にアポロニア・カーシヂケイ(Apolonia-Chalcidee)なる地あり。アポロの別名をアンドラ(Andra)勇壯男子終局まで」と謂ひ例に由つて其ラ行音を無聲にする時は「アンダ」となり、次に「シ」音を落す時は「ン」に「ダ」吾田なる語を得るなり。意ふに此アポロニア・カーシヂケイは此地方三帯の稱なりしが如し。長屋とは發音の假字にして、長矢を意味する所の Pallene 半島を謂ふものなり。

笠狹はカスサンドリア

なり。其語原は「長矢或は投矢を揮ふ」を意味し、意味上長矢たり、投矢たり、發音の假字長屋たるのみ。「名護屋」なる名稱も亦此發音の假字たるのみ。然りと雖吾田の長屋とは果して笠狹の確なるものなるか。吾人は地名集團を爲すの要あり。笠狹確「前記長屋半島の根にカサンドリア(Cassandrea)なる地あり。是れ Cass. と andrea との結成地名にして、其の後半を略すときはカササにしてやがて、是れ「カササ」笠狹に非ずして何ぞや。(前記吾田なる地名は或は此の「カスサンドリア」の後半「アンドリア」の「ア」なりしに非ずやとも思はる尙ほ研究を要す。此都市前にはボチダヤと稱せしも紀元前四二九年滅亡し、後カサンドル之を再建せしを以つてカサンドリアと稱すとは西洋の傳記なり。然りと雖其實然らざる如く、以前尙ほカサンドリアと謂ひ居りしものにはあらざるか。尙ほ研究に餘地あるべし。イナイ移住「余は先きに饒連日命と邇々藝命との混線あるを謂ひ、又た饒連日命はトロヤの英雄イナイ(Ahni-Eneus)に當るを謂へり。(又たこれ

神武天皇の御兄稻氷命なり

希臘神話の傳ふる所に據れば、此イナイは又たトリスの滅亡後長屋バレンの地に暫く移住し居たりと謂ふ。又た是れ饒速日命(イナイ)と混線したる邇々藝命が此地に移住し給ひしを傍證するものと謂ふ可し。

(四)三子生誕と希臘諸民族

四 三子生誕—希臘諸民族代表

邇々藝命、鹿葦津姫と結婚し給ふ。鹿葦津姫妊娠し給ひ、其潔白を證せんとして火を放ちて産室を焼き、火中に三子を生み給ふ。其火の盛に燃ゆる時に生れませる御子は、火照命、次に生れませるは火須勢理命、次に生れませるは火遠理命、亦の名は、彦火々出見命。然と雖諸書傳を異にして左の如きなり。

(古事記) 彦火々出見命 (日本紀) 彦火々出見命 (日本紀) 彦火々出見命

火照命 (海幸彦) 火明命 (海幸彦) 火進命

火須勢理命 彦火々出見命 彦火々出見命

三子の御名の語源

(一)火照

(二)火須勢理

(三)火遠理

希臘諸氏の代表

火遠理命(一名彦穗々見命) 火明命 彦穗々出見命(山幸彦)

今は専ら古事記に據ることゝ爲す。(火明命の御名は誤つて此に入れるものゝ如し) 今其語源を考ふるに、

(一)火照—とは其火を去る時は、*phos* 即ち日中極熱時を意味し或はかの有名なるアポロイン關係のデーロス(*Delos*) 島の名稱は此に出でじにあらずやと思はるゝなり。

(二)火須勢理—とは又其火を取り去りて、須勢理は、前に大國主神の章中なる須勢理姫の御名と同じにして、焦熱を意味せる *phospor* (phosphor) たり、其地名と成れるは同じく、キクラデイス群島中のセーリスオス島なるが如し。

(三)火遠理—は又た火を取り去りて、*phos* (phos) 即ち火光閃々の状態を意味し、又た希臘神話に於ては、順風、良風を代表せる神なることを記憶せんことを要す。(本居等の舊解釋は取るに足らず)

是等三子の御名は皆な此「火」の關係を以つて之を説明するを得べく、吾人の語源説も亦當れるものゝ如し。然りと雖亦意ふに、是等三子は希臘人







地理的考究範圍の擴大

海幸山幸交換記

一 山幸海幸

こと之れ有りとなす。其種族播布の擴大に従つて、吾人の地理上の觀察範圍は亦廣大となり、今や、埃及よりモロッコに至るの間、阿弗利加北岸全部は、又余の研究範圍たるに至れるなり。其材料は山幸海幸の交換史傳に存するものにして、希臘に於ては、オヂヂセフスの通歴及び難船神話、及びアイネアスの夫れは、吾此史傳に並行して、余の立論を傍證するものと爲す。

火遠理命、一名天津日高日子火々出見命と申す。山幸彦として毛の魚物毛の柔物を取り給ひ、其兄火照命は海幸彦として鱈の廣物、鱈の狹物を取り給へり。こゝに兩人其幸を交換し給ひ、彦火々出見命、海幸を以つて魚釣らすに一魚を得給はず亦其釣をさへ海に失ひ給ひき。こゝに其兄火照命、幸の返還を強請し給ひ、彦火々出見命事情を語り給へども聞き給はず。之が爲めに弟命、御佩の十拳劍を破りて、五百鈎を作りて、償ひ給へども取らず、一千鈎を作りて償ひ給へども受けず。猶其正本の鈎を得んとぞ言ひける。

彦火々出見命海邊に泣き思ひ居ます時、鹽推の神來りて其何故なるやを

海岸地移住

實際的地理なり小説に非ず

問ひ給ひしかば、命、事の本末を對へ給へり。こゝに鹽推の神無間勝間の小船を造りて、命を其船に載せ奉りて、教へ給はく、吾れ其船を押し流さば、差暫往てませ、味し御路あらん。其道に乗りて往て、まさは魚鱗の如く造れる宮室、其れ綿津見神の宮なりと。此くて彦火々出見命は海神の國に往きますなり。

こゝに吾人は謂へらく、二神の山幸海幸の交換なるものは、彦火々出見の命が希臘方面の山地より降りて海岸地に移住し給ひしことを表はせるにあらざるやと。而して其海岸地とは阿弗利加之れなり。何となれば、吾人は邇々藝の命は希臘オリトリ山に坐しませるを觀ると、雖、其御子彦火々出見命に至つては、其記事凡て阿弗利加海岸の事なればなり。

されば吾人は彦火々出見命の居給ひし所及び海畔行吟地理、及び海神國等の位置を明瞭に爲すべし。之れ決して舊派の學者の言ふが如く、單に海中の空想小説なるのみと言ふこと勿れ、之れ實に地上の明瞭なる地理的地理を謂へるものなりと知るを要す。かの舊派の學者の如く、何事も神話な



彦の國一ヒッポレギウス

十拳劍の地トスカ

「破り」の地ヒッポレギウス

アフリクス即ちヒッポレギウス破るを意味す。吾人は請ふ是等ヒッポレギウスを以つて着眼點と爲し、是れを考證の出立地と假定し、以つて系統的地名集團法を行ひ、以つて余の假定をして真理に變せしむることゝ爲さん。

「彦の住所」ヒッポレギウス「ヒッポレギウス現名 Dina」は彦の住地なり。彦火々出見命鈎を海に失ひて、其兄火遠理の命返還を迫り給ふや、御佩の十拳劍を破りて五百鈎を作りて償ひ給へり。吾人は此一記事を地名に讀む者なり。

「十拳劍」トスカなる語に對して、前記ヒッポレギウスの東方にトツカ(Hippodiscus)の地名あり。此トツカは前に天照大御神が須佐之男命の十拳劍を請ひ取つて御生子生み給ひし時の、アトメニアのトツカと同一語にして、劍の語に當れるを知るなり。彦火々出見命其十拳劍を破りて新に五百鈎を作り給へり。余は其一トツカなる語を又其東方なるヒッポレギウス(Hippodiscus)の地名に讀むものなり。何となれば、之れ「彦破る」を意味し、十拳劍

鹽推神一メルクリイ岬

無間勝間一カルタゴ

を破り」の語に當るを信すればなり。吾人は此く既に三地名の系統的集團を得たり。然りと雖尙ほ此くの如き少集團に止まらざるなり。

「鹽推神」メルクリイ「兄火遠理命」にして弟命の請を聽き給はず。弟命爲めに憂愁して海畔に行吟ひませり。時に鹽推の神來りて理由を問ひ、命に良策を教へ給へりと。余は又だ此に鹽推神の名稱を此附近の地名に讀む者なり。

鹽推神の Dioscuri 即ち道路の神メルクリイ(Mercurii)なるは前數々之を説けり。茲に吾人はメルクリイ岬を前記彦破るなる此の東方に發見す。是れ即ち鹽推岬にして、メルクリイは羅典系鹽推(チオツシ)は希臘系の名稱たるのみ。

無間勝間(カルタゴ)「鹽推神」彦火々出見命の爲めに善議せんと言ひて、即ち無間勝間の小船を造り、其の船に載せまつりて、之れを押し流し給へりと。吾人はこゝに又だ「無間勝間」の地名をカルタゴ(Carthago)の地名に讀む者なり。カルタゴは古代有名なる通商航海の國にして、船舶の出入には素

無間の語源

第十七章 彦火々出見命の海神國行阿弗利加北岸東部地理 三七二

より關係あるべき地なり。吾人は既にヒポチリアリスとカルクリ岬との間に來れり、必らずやカルクリの地名の、此神話中に山で來べきは之を想像するも敢て理由なきことに非ざる可し。

無間勝間とは從來の解釋は間隙なき籠にして、海水の漏入せざるものと謂ふにありき。然りと雖是れ誤謬なるが如し。意ふに――

無間――とは發音の假り字にして、實は希臘語「邁往」直進即ち「健」故に「竹」を意味せる所の「メヤン」(Meyan / Mikan)の「メナシ」或は「マナシ」と訛りしもの、如し。何となれば此命は後に記するが如く、竹に縁あり、又た其御子鶴草草葺不合命には彦波限建の語あり、又た此ヒポチリア地方は前記建即ち竹を意味せる所の「メヤン」(Meyan / Mikan)より出でし語なる「マヌシ」(Manusi)即ち「優勝」を名稱と爲せるに由つても健即ち竹を意味せるを知るべし。後代此國を「メヌ」(Mene)と謂ふは希臘語「邁往」より「メヌ」となり、又た「メヌ」となりしもの、如く「メナシ」とは「延長」「直進」「直立」等を意味し、即ち竹の形容語たるなり。(此の地名埃及の「メヌ」に移り、丹國となり、丹波等の國名となる。是れ即ち海神國

勝間

なり、後に説く。又此海神國は西方より移住せしものなりとは希臘神話の傳ふる所なり。

勝間――とは籠の如く組み合はせたる篋を意味せるもの、如し。日本書紀一書に「鹽推老翁」囊中の立櫛是れ羅典語 Onkii Onoo の發音を表はせるものにして、十字形のものの意味す。説明は略すを取つて地に投ずれば則ち化して五百箇竹林と成る。因つて其竹を取つて大目の籠籠を作つて彦火々出見命を内れ云々とあり。今之を此神史の別傳たる「ホメーロス」に對照するに、オヂラセウスは篋を併給せられて海に浮びたり、篋を英語「Bag」古高獨逸語 «Bag» と謂ひ、希臘語 «Bagma» に當る。「ラホ」或は「オロホ」は「アラコ」(籠籠)と轉訛すべし。即ち知る、これ篋なることを。且つ從來のまゝの解釋を以つてする時は「無間」「間隙なき」と「大目」「大間隙」の籠籠とは反對なりと謂ふべし。又た曰く「無間勝間を以つて浮木に作り細繩を以つて火々出見命に繫ひ着けて之を沈む」と云ふは、無間勝間其物は沈むべきものに非ずして單に浮木たるに過ぎざるを示めす。然りと雖「命を沈む」との語は、後にオヂラセ



メルクリイ神の出現と筏  
細紐と細繩

第十七章 彦火・出見命の海神國行阿弗利加北岸、東部地理 三七六  
の事あり。之れ火遠理彦火々出見命が「風招」を作し「日本書紀」三書給ふどの記事に一致せり。  
オヂラセウス次に數所を経て女王カリブツ(Calybe)花の島今のツニス國に至り、此に前記メルクリイ神の出現あり、又た筏の構立て及び其れに乗りての出帆記事あり。是れ實に彦火々出見命の無間勝間の記事と一致せるものにして、オヂラセウスの難破するや海の女神出現してオヂラセウスを助け、又た細紐を與へて、之を胴に縋めて、一種の浮木と爲すやう敷へたり。是れ前きに引用せし所の「無間勝間を以つて浮木に作り、細繩を以つて火々出見命に繋ひ着けて之れを沈む」との事之を説明せるものと謂ふ可し。是を以つても、無間勝間の如何なるものなるかを知るに足るなり。又彦火々出見命は海底に沈没しつゝ、海神國に行きますに非ずして、普通の航海たるを知るなり。古事記の記事正當なり。  
西洋人等は、オヂラセウス漂流地理を以つて、全く神話空想地理なりと爲せりと雖、實は是れ無學一否な研究方法の缺如せるに由るものにして、若し

カルタゴの地點  
と其事件

日本神史を持ち來りて東西の研究の媒介を爲す時は、希臘神話の地理も、日本神話の地理も、兩者共に之を明確ならしむるを得るなり。  
オヂラセウスは西より東に地中海を漂流せるものなりと雖、羅馬の詩人ギルギリウスの作なる「イナイ傳」のイナイ(Ianai)は、東より西に向つて漂流し同じく、此地點即ちカルタゴに來り、此に又たメルクリイ神の出現あり、筏の構立ては之れ無しと雖、其地の女王デドなるものイナイを戀愛し、イナイの出帆を悲しみ、失望の餘、女王は自ら火葬の薪材を構み立て、焚死せりと  
の事あり。是れ實に而白き對照にして、前者は筏の構立てなり、後者は火葬薪材の構立てにして、其木材の構み立てたるや同じく、又是れ「マナン・カツマ」(無間勝間)なる語と「カルタゴ」なる語とに一致せるは、慧眼なる比較者の容易に看取するを得べき所、又た重要な注意點なりと爲す。(西洋語源學者は「カルタゴ」を「新都市」と解すると雖、之れ斷じて誤れり。彼等「セミナツ」語もて研究すと雖、實は希臘語を以つて研究するを以て正當と爲す)  
イナイは之より西或はシシリアに向つて出立すと雖、オヂラセウス是よ



(四)オヂラセ  
ウスのハヤ  
シの國行  
海神國はハヤシ

オヂラセウスの  
難船

第十七章 彦火々出見命の海神國行 同弗利加北岸東部地理 三七八  
りハヤシ人の國に行くなり。是れ實に彦火々出見命の行きます所の海神  
の國なり是れ亦彼我神史の同一なるを示めせる愉快なる點と爲す。

四 オヂラセウスのハヤシの國行

彦火々出見命は是より海神の宮に行きますなり。オヂラセウスはハヤ  
シの國に行くなり。此兩者は果して異なるか、或は同一國の別名なるか、余は  
兎に角に是より東の方埃及に向つてナイル河東口の地に到りて探檢せん  
中是れ海神の國なればなり。然りと雖前記カルタゴより埃及に至るには甚だ長遠の距離あり、果して  
彦火々出見命及びオヂラセウスは東方に向ひて進行せしや否や、聊か之を  
檢するを要す。彦火々出見命に就ては、吾人何等其間の記事を有せずと雖、  
オヂラセウスに關しては地理的關係の記事ありて、以つてカルタゴと埃及  
との間に連絡を保たしむるを得るなり。オヂラセウスの難船、オヂラセウスの國より筏に乗りて出發

スルチス海岸  
(邪神佐彦神の  
國)

リニューコテア  
の地

す。數日の後或海岸の見ゆる時暴風起り、難船す。時に海の女神リウコテ  
ア出現して救助し、陸地に着くべき方法を教へ。辛うじてハヤシの國に着  
けり。詩人ホメーロスは自ら其地理を知らず、又た誤れる點ある如しと  
雖、余は此文章中に二個の明瞭なる地名を読み得る者なり。一は難船なる  
語と、他はリウコテアなる神名是れにして、其難船なる語はカルタゴ以東の  
海岸スルチス(Sythia)を表はし、リウコテアなる神名は埃及西方の海岸を表  
はせるものたるなり。何となれば――

前記スルチスは希臘語「ナギサ」を意味するなり。ナギサ(諸)とは希臘語  
Ναγισα (nu-gisa) にして、難船を意味するなり。さればオヂラセウスの難船  
はスルチス海岸にして「海岸見ゆる所」にて難船せりとのことは、是れ「落たり、  
同時に難船を意味し、此地點のスルチス海岸なりしを考へしむる者なり。  
スルチスより東に向つて埃及に接せる地方にクノスセマ(Cynosma)なる  
地あり。之れ前記女神リウコテアの祭地なるが如し。何となれば此女神  
の別名をイノ(Ino)と謂ひ、イノは、イヌ(犬)にして此 Cynosは犬を意味して

著陸—其國の豊  
宮殿

第十七章 彦火々出見命の海神國行阿弗利加北岸東部地理 三八〇

イノたり、レウコテアの地を意味せる如くなればなり。(此、リウコテア)は日本字もて「龍華」たり、前記「クノス(セマ)は、久能山なり」(リウコテア)は、地理の連續地にして「カルタゴ」出發以來、地理的順序は正當に東に向へりと謂ふべし。

オデラセウス辛うじて陸に着きて、見れば枝葉繁茂し、雨を蔽ひ日を蔽へる一樹あるを見る、彼れ喜びて其蔭に臥して寝り居たり。又其附近に泉あり。時に王女侍女と共に來りて衣を滌き、又球を投げ遊ぶ。オデラセウス彼等の聲に驚き目覺む。此地はハヤシ人の國にして、平和を好み、富有にして航海に長じ、宮殿樓閣美麗を極む。此王女オデラセウスの事情を聞き、導きて王宮に歸り、之を好遇すと。

是れオデラセウスがカルタゴを出發して難船し、遂に到着したるハヤシ人の國なり。(是れ吾丹後風土記に所謂「速石」の里なり)。此神話は果して彦火々出見命の海神國行の神話と同一なるものにして、余の彦火々出見命

(五)彦火々出見命の海神國行

海神國の記事

一 彼我對照上の同

の行きましたし、海神國を以つて埃及なりと爲すの傍證を供給するものにはあらざるか。

### 五 彦火々出見命の海神國行

彦火々出見命、無間、勝間の小船に乗りて海神の國に到りませり。其宮は魚鱗の如く造り、雉、塼、整頓はり、寰宇、珍瓏門の前には、一の井あり、井の上に一の湯津杜樹ありて、枝葉扶疏たり。彦火々出見命其樹の下に就きて、徒倚彷彿み給へり。こゝに海神の女豊玉姫の從婢、玉器を持來りて、水汲まんとして人あるを知り、豊玉姫に其事を語り、又た海神に語り、其天孫なるを知りて、宮に入れて厚遇を盡くすと。

今此記事をオデラセウスの其れと比較するに、全く同一にして、枝葉繁茂の一樹あること同じく、其下に休息すること兩人相同じく、泉あること兩記事相同じく、王女及び侍女の來ること兩者相同じく、此國の富有なること相同じく、我は之を海神國と稱し、彼は之を航海に長せる人民と爲

せるや意義に於て相同じく、彼は球遊びたり、我は玉器の玉たること相同じく、其來客の貴種人にして之を宮中に招待して厚遇すること相同じく、兩神話全然趣を同うせりと謂ふべく、同一事物を二種に傳べしや殆ど疑ふべきなし。

古は兩神話の合一を示めし、以つて余の立論全體の傍證に供せしものなりと雖、海神の國の果して埃及の何れの部なるやは未だ證明されざるなり。余は言ふ、是れナイル東口ベルーシウムの附近一帯を謂ふものなりと。

湯津杜(マゴダチ)吾國の神史は多く地名となれり。されば地名研究は大要神話地を知らしむるものなり。彦火々出見命の海神國に到りますや、其門前に湯津杜の樹ありて、枝葉扶疏たりと。湯津(五百津)とは希臘語善美の意なるべく、杜は桂冠を意味して、月桂樹たるを示めし、希臘語之をダフネー(Daphne)と言ふ。乃ち知る、門前の湯津杜の樹とはダフネー(Daphne)の地なることぞ。

「從婢」マゴダチ

「湯津杜」マゴダチ

從婢(マゴダチ)彦火々出見命其樹下に泉の側に休み居給ひし時、豊玉

「殷富」ハヤシ

姫の侍婢之れを「マゴダチ」と訓ず、來りて水を汲まんとせり。「マゴダチ」とは英語 maid 古代サクソン語 magdā, 古高獨逸語 maed, 獨逸語 maid と同一語にして、皆侍婢を意味せるなり。今昔「マゴダチ」(magd)を語體と爲し、之に「ラ」或は「ハ」(Ma, Mo)なる地名語尾を附加する時は、吾人は「マゴダチ」或は「マゴドルム」(Magda, Magdala)の名稱を得べく、是れ即ち侍婢の地を意味し、豊玉姫の侍婢の來りし所は、此マゴドルムの名に存せるを知るなり。(謡曲「玉の井」の地)

殷富(ハヤシ)此くて「杜」と「侍婢」との地名を知れり。尙ほ吾人は此海神國の殷富を示めせる語の地名と成れるを發見するものなり。之れハヤシ(ハヤシ)中には「ハヤシ」(Hayash)國と稱する地にして、河を溯りて「ハクサ」(Hakusa)の地ある是れなり。今は「ハクサ」(Hakusa)と謂ふ。「ハクサ」の語源は *diva* 即ち豊富殷賑を意味し、海神國の宮殿樓閣の美なりとの記事は、此語原を證明するなり。是れ日本語「ハヤシ」なる語にして、又其意味をも知るべきなり。

一日にて歸國

彦火々出見命の歸國とオヂラセウスの歸國

且つ丹後風土記丹後とは此海岸を謂ふものにして、極東丹後は此地の移寫なりと知るを要すに、與謝郡々家東北隅に「迷石の里あり」とは此地を謂ふものにして、此與謝郡とは現名「Fushimi」是なる如し。浦島神話の地亦此附近にして、極東日本に非ず、埃及の地なり。

されば吾人は神話上の是等重要なる思想を代表せる所の地名を此地方に系統的に集團せしめ得たる以上は、海神の國は此地なりと斷ずるも、誤謬に非ざる如し。

六 彦火々出見命の歸國とオヂラセウスの歸國

海神の彦火々出見命を待遇し給ふや至れり盡せり。然るに三年の後一夜長大息し給ひしかば、海神其理由を問ひ給ふ。命答ふるに、鉤を失ひし事を以つてし給ひ、海神其威力に由りて其鉤を回復し得給ひしかば、彦火々出見命は今や歸國し給はんとせり。こゝに「尋和運船」あり、一日にして本國

オヂラセウスの海神

一夜にて歸國す

に送り奉らんと申し。其如く行はれたり。

吾人は又た之れと並行せる神話をオヂラセウス傳中に發見する者なり。ハヤシの國王大にオヂラセウスを敬待す。然るにオヂラセウス長大息して涙を流せり。ハヤシ王其理由を問ふ。オヂラセウス答ふるに、其長年月の遍歴事情を以つてし、遂に歸國せんことを欲する由を告ぐ。茲に於てハヤシ王、船を裝ひ、水夫の優良なる者を選抜してオヂラセウスを送り、一夜にして其本國に到着せりと。

請ふ此兩神話を比較せよ、又是れ同一なるものにして、其敬待至らざるなくして、而も長大息あるや兩者同一なりと謂ふべく、其歸國や同一なりと謂ふべく、其一日にして本國に到着せしや亦同一なりと謂ふべし。

此くて彦火々出見神話とオヂラセウス神話とは、全く一史實の二別傳と謂ふべきなり。意ふに彦火々出見命の史傳及び其材料先在して、ホメーロスは之れを使用してオヂラセウス傳を作りしもの如く、吾國の神史は、實にホメーロス以前の時代に屬せるものと謂ふ可し。

七、四個の詛語と其地名

四語に關する註の

こゝに吾人の地理はアレキサンダリアよりカルタゴにまで及ぶものなるを前以つて一言し置くなり。彦火々出見命海神の厚意に由りて、前きに喪ひたる鉤を回復し給へり。其時海神誨へ給はく、此鉤を其兄に返へし給はん時に言ひ給はん狀は、**淤煩鉤須々鉤**、**貧鉤**、**字流鉤**と言ひて後手に賜へ三年の間必ず其の兄貧窮しくなるべしと。此四個の詛の語は全く地名を表はせるものにして、蓋是れ兄の地なるべく、其後手に鉤を渡して其地名を呼ぶは、其地を詛ふものゝ如し。而して其詛の語は意ふに發音の假字にして、必ずしも其漢字の意味を含めるものに非る如し。又其等の語尾の鉤も亦鉤を意味せるに非ずして、只だ「チ」なる發音の文字なるが如し。此四個の語は種々に傳へられ居ると雖、古事記の夫れは最も正確に近きが如し。今順序を以つて之れを地名と爲さば左の如し。即ちツニス以東リビア海岸の地名是れなり。

七、四個の詛語と其地名

(一) 淤煩鉤—エムボリア

(二) 須々鉤—スルチス

(三) 貧鉤—マリオチス

(一) **淤煩鉤**(Emboria) 是れリビア海岸の最西部エムボリア(Bunpoin)を謂へるものなり。即ち「エ」は「オ」となり、「ム」は之を省略するは往々之れ有る例にして、「リ」は「チ」に訛ることも亦之れ有り、「ア」は地名語尾のみ。されば「エムボリア」は「オムボチ」となり、「オボチ」(淤煩鉤)となるは普通の事たるのみ。是れ商業を意味し、悪しき意味にては、貧商行商を謂ふなり。  
(二) **須々鉤**(Sulchis) 是れスルチス(Sulchis)を謂ふ。乃ち語尾「ス」を省略せば「スルチ」なり。「ル」は「ス」に轉じて、「ン」に「ム」チ(須々鉤)となるべし。是れ「渚」を意味し、惡意味を以つてせば、難破を意味す。  
(三) **貧鉤**(Mareotis) の地を謂ふなり。語尾「ス」を省き、「リ」を「チ」に訛りて簡略に發音せば直ちに「マヂチ」(貧鉤)なるのみ。日本書紀一書に之を「狹々貧鉤」と爲す。是れ *balauai-juposori* にして「ラ」音の無聲となりしものなり。此「サラサ」なる語は之を羅典系の語尾を附して、Thalassium(息長帶姫の語原と爲し、「ラ」音を無聲にし、語尾「ム」を「マ」と爲す時は「タシマ」(但馬)と爲る。即ち知る此の「マリ

(四)字流鉤  
—リオチス

オチスの地は後代但馬の地名と爲り、神功皇后の生地たり、天日矛の地たることを。又た古事記中巻の最末部に但馬の出石姫に關して二神の競争及び兄神の敗北弟神の詛語ある等、此マヂチ(貧鉤)の地と但馬と同一にして、マリオチスたるを知るなり。是れ埃及日本の但馬なり。請ふ此地を記憶し置かんことを。

(四字)流鉤(ル・リ・チ・ス)は前記マリオチスの西方一帯の地なり。古事記は之れを「字流鉤」と爲すと雖、日本書紀一書は之を「痴騷鉤」と爲す。是れ兩者同一語の少變化なるのみ。意ふに是れ第四節にオヂラセウスが難船せし時其援はんとして出現し給ひし所のリ・リ・コ・チ・アの地即ちグロスセマ附近の地にして、其リ・リ・コ・チ・アの語幹は「白色」「白光」を意味せる *leukos* にして、日本語の發音法の一として「ラ」行音の前に「ウ」音を加へて發音するときは、是れ「ウルコス」にして、其小變化を爲じ、語に *leukos* あり。今若前述の如く「ウ」音を之に加冠する時は、是れ古事記の所謂「ウルチ」字流鉤にはあらざるか。又た他の變化語に *leukos* あり。又た若し之れに「ウ」音を冠し、「キ」を「ケ」に發音する

貧窮憔悴—リビ

時は是れ日本書紀の所謂「ウルケチ」にはあらざるか。今之を圖表と爲さば左の如し。

*leukos* (ル・リ・チ・ス) 字流鉤  
*leukos* (ル・リ・チ・ス) 痴騷鉤  
*leukos* (ル・リ・チ・ス) 痴騷鉤

乃ち是れ同一語の少變化たるのみ。

貧窮憔悴(リビヤ)「此くて是等四地は兄火照命の地なりしなるべく、其の酷薄なるに由りて弟命の詛を受けしものと謂ふべし。此四地の總稱をリビヤ(Lilya)と謂ふ、是れ希臘語 *leptos* (= *leptos*) を語原と爲し、沈淪憔悴を意味し、

「其兄貧窮くなりなん」及び出石の詛の「青く萎み」なる語に當れるなり。請ふ試みに右呪詛の舊來の解釋と、余の解釋とを比較せよ、舊來の夫れの牽強附會言語に絶せるを感すべきのみ。今之を表と爲す時は左の如し。

淤煩鉤……エムボリア (Emporia)  
須々鉤……メルチヌ (Syria)  
貧鉤……マリオチス (Mareotis)

八 再びオヂ  
ラセウスの  
難船神話に  
比較す

難船神話の別傳

吾人は意外なる言語に由りて、見事に地名の系統的集團を成さしむるを得たり。道路の神鹽推神と綿津見神とに感謝を奉る。此くて彦火々出見命の神話に於て、吾人は系統的に順序正しく、阿弗利加北岸の東半部の地名を讀み得たり。カルタゴ以西の地は、次に鶴草草葺不合命の神話中に之を發見するものなり。

八 再びオヂラセウスの難船神話に比較す

オヂラセウスには難船神話ありと雖彦火々出見命には全く之れ無く、聊か異様の感なきに非ざるなり。然りと雖假令吾に難船これなしとするも、此思想は明瞭に他の形を以つて存在せるものたるなり。乃ち海神が彦火々出見命に鉤を與へて、誨へ給ふの言に曰く「汝の兄(火照命)海を涉らん時は

宇流鈞……ルーナム(=Louises Lencives)  
貧窮沈論……リビヤ(Libya)

九 襲の國は  
カルタゴの  
木之花咲  
耶姫—カ  
ド—プ  
フ—ド  
ン—ド  
姫—姫  
カ—カ  
リ—リ  
プ—プ  
ソ—ソ  
姫—姫  
チ—チ  
ド—ド  
ー—

「襲」の國は何處ぞ

吾れ迅風洪濤を起し其をして没溺辛苦せしめん」と是れ實にオヂラセウスが海を渡らん時の運命の中の一にして、ホメーロスは此材料に據りて變形改作したるものゝ如きを知るあり。

九 襲の國はカルタゴ—木之花咲耶姫—カリプソ姫—チド—姫

皇孫邇々藝命は「日向の襲の高千穂の峯」に降りませり。其饒速日命の記事と混交せる所の高千穂は第十五章に之を説きしが、今や他の高千穂を説かざるを得ざるなり。然りと雖國典が高千穂を謂ふて「襲」の高千穂と言べりと雖、未だ「襲」の何を意味し、又た其地の何れなるやは、余は之を説かず、又た余は之を知らざりしなり。然るに光明はイナイ傳中より余の頭腦に一閃し來り、明かに「襲」或は「ソ」或は「サオ」の發音假字の意味を記載しあるを知り、之に始めて明確に襲國を知り、之と同時に第三の高千穂の所在をも知るに至れり。然り、是れカルタゴの地なり。

三神話の同一地

カリブソ姫

花の杯

鹿葦津姫

酒杯

三神話の同一地點—前數節に説きし如く彦火々出見命の海神國出立地點も、オヂラセウス及びイナイの漂泊地點も、何れも皆カルタゴに一致せるは最も先づ注意すべきことと爲す。

カリブソ姫—其オヂラセウスが漂着せし時は、其地の女王はカリブソ姫 (Calypso, Ἀλιψία = Kalypso) なる花の女神にして、此カリブソなる語は捧げたる花の杯を意味す。此女神オヂラセウスに戀着し、此地に永住せば「不死」を與へんことを約す。然りと雖オヂラセウスは強て出立せり。

鹿葦津姫—此神話は吾に在つては邇々壽命の鹿葦津姫の地に往きまししと同一事にして、此女神の御名を一名木之花の咲耶姫と言ひしは、カリブソ姫の花の女神たる同一なるにはあらざるか。彼は「カリブソ」にして「花」を意味すと雖我は鹿葦津即ち *Quilias* にして銅器を意味し、又た「カールケ」(Kalken) となりて日本語の酒杯「カールケ」なる語に當れるもの、如く思はる。然りと雖前者の花の杯たり、後者の明かに酒杯たるは、其杯たる點に於て意義上の連絡あるなり。而して其別名の木之花咲耶姫の「咲耶」とは素より咲

咲耶は「サクラ」なり

サドー姫

「捧ぐ」

「豊」の語原ソ

「ソ」(豊)は希生「救治」

を意味し「榮へ」を意味し、其語原は羅典系の *colere* にして「音は、音に説りしものなり」乃ち神聖、健康、救治、不死を意味す。櫻の語原亦是れなり。

サドー姫—夫れ然り。次に吾人はイナイ關係を見んか。イナイ傳に於ては、此カルタゴの女王はサドー姫と謂ふ是れ希臘語「捧ぐ」を意味せる「サド」(Sado) により出でたるものなるべし (*Sado*, Ἀδω). 其「捧ぐ」なる觀念は、これ亦酒杯を捧げたる意味に外ならざるなり。(持統天皇の御名同じ)

「豊」の語原—前記の「ソ」は、オヂラセウスを引き留めんが爲めに「不死」を與へんと言ひしと雖、今此サドー女神は「未だ嘗て自ら悲哀を知らず。妾は不幸の者に救助を與へんと欲す」と言ひ玉へり。此觀念こそは、實に前記羅典語 *Salva* 即ち「咲耶」に當り、希臘語に譯せば實に、全く *salva* (或は *salva*) 佐保の語に當れるなり。此「ソ」なる語は、是れ吾人の探求し居たる所の「豊」なる文字を以つて表はしある所の名稱たり、國名たるには非ざるか。然り是れ「豊」なり。故に咲耶姫及び磐長姫神話にも、人壽長久談あり、オヂラセウス譚にもイナイ譚にも亦此思想あるは、此に吾人が希臘語 *salva* を當て



羅馬教の聖杯

火の觀念

鳳兒生誕

第十七章 彦火々出見命の海神國行—阿弗利加北岸東部地理三九四

て「嬰」なりと爲すの正確なるを證明する者と謂ふ可く、吾人は此に嬰の國のカルタゴなるを知り得たるものなり。(熊襲の「嬰」は希臘語尾の變化のみ此「嬰」と關せず)

吾人は此に「酒杯」と「救治」と永生思想とを發見し、一種のバックス神話たるを知る者なり。耶穌羅馬舊教の儀式中「カリス」なる聖杯あるは實に此に起原せるものにして、吾神道と耶穌教とは關係非常に親密なるものなり。宜なり、此カルタゴは古代羅馬教の大中心たりしを以つても之を知る可し。

「火」の觀念—此に尙ほ神話上の面白き對比は—木之花咲耶姬は其貞操堅固を證せんが爲めに、火中に御子生みましゝなり。前記テド—姫はイナイと別離を悲しみ、失望の餘り、自ら火葬の薪材を積み上げて焚死せり。兩者其事情は同じからずと雖、其「火」の觀念の共通なるは、又兩神話の同一根源に出づるを知るなり。

鳳兒の生誕—火の觀念は又た吾人を鳳凰神話即ちホイニシア神話に導くなり。鳳凰之を Phoenix と謂ふ、ホイニシア國名と同一語にして、赤色及び

鳳凰神話

火より出でし鹿  
茶津姫

カルタゴは鳳凰  
人種

火色を意味す。

東洋に傳はれる神話に據れば、鳳凰なる神鳥は亞拉比亞の野に五百年或は六百年を生活し、其死せんとするや自ら火葬の薪材を積み立て、羽翼を以つて火を起して其薪材に點火し、火中に入りて焚死す。然りと雖、其灰燼は再び蘇生して新鮮なる生活を爲す。故に鳳凰は又た「不死」の記號として使用せらる(センチュリー)字彙。此神話は埃及、亞拉比亞、波斯、印度及び支那にも傳播せり。

此に余は木之花咲耶姬が御子を生みます状態を見るに、全く鳳凰神話其ものにして、自ら産室に火を點じて、火も御身を焼くこと能はず、火中より三子生れ出で給ふなり。日本書紀は曰く「然る後、吾田鹿葦津姫火燼中より出で來りて言ひ給はく、妾が生める兒及び妾が身、自火の難に當ると雖、少も損ふ所なしと。天孫對て給はく、……汝靈異の威あり、子等復た絶倫の氣あるを明かさんと欲してなり……」と。是れ全く鳳凰神話なり。

今若しカルタゴの地はホイニシアのチル人の植民地なりとせば、此女神

「竹」の國  
(一〇)高千穂

第十七章 彦火々出見命の海神國行—阿弗利加北岸東部地理三九六

はホイニシアの人即ち鳳凰種なるべく此女神の三子生産の神話は鳳凰神話として傳はれるものと謂ふ可し。然り是れ鳳兒の生誕にして其孫兒は即ち吾建國の祖なりと傳ふる所の神武天皇是れなり。

鳳凰を Phoenix と謂ひ又た之を Dale-palm と謂ふ即ち椶櫚なり又竹なり。此語は吾人を導きて高千穂の研究に進ましむ。

一〇 高千穂

製の國已にカルタゴなりとせば高千穂は又た此地にあるべきなり。余は此命に關する記事を大觀するに此地は「竹」の地なるが如きを感じたるなり。木之花咲耶姫が御子生みます時竹刀にて臍帯を截り給ひ其之を棄てし所は「竹林」となりと謂ひ此地を「竹屋」と謂ふと爲し鹽推神が彦火々出見命の爲めに船を作り給ふ時支櫛を投げ給ひしかば「五百個竹林」となれりと謂ひ—此地に長屋の「竹島」ある等—吾人此地の「竹」の産地なるを思はずんばあらざるなり。

椶櫚竹  
高千穂の語原  
「ダテ」(手達)と

然りと雖此に所謂竹とは現に吾國に在る所の竹とは同一に非ずして専ら椶櫚を謂へるもの如し。然りと雖今其語原を研究せんにかの椶櫚は英語之を date-palm(手掌)と謂ひ學術名之を Phoenix Dactylis(赤手掌)と謂ひ其主語は Palm 或は Dactylos として「手掌」を意味す。

意ふに「高千穂」とは此「ダクテロス」の訛りしものにして例に由りて「音の無聲となる時は此語ダクテオとなり「ダ」は「タ」に「ク」は「カ」に轉ずる時は吾人はこゝに「ダカテオ」を得べし是れ「高千穂」の語なるべし。書物が支那文字「高」と「千穂」(穂多き)との文字を使用せるは即ち是れ形容的意味を含めて其椶櫚なるを示めせるものにはあらざるか。

前記 Dale Palm の Dale は語原前記「ダクテロス」に出づるものにして歐洲諸國殆ど同様に近き綴字を用ゐる「ダテ」と發音するを當然と爲す。余の舊藩主伊達侯爵家は意ふに此語原即ち「竹」を意味せる姓名なるべし。故に「竹」の丸を以つて其家紋と爲す。

若しまた高千穂は「ダクテロス」の轉訛なりとせば此山はカルタゴ附近に

赤色の手掌と櫻

「ホイニクス」(鳳凰)と竹と高

第十七章 彦火々出見命の海神國行—阿弗利加北岸東部地理三九八  
あるべきは、蓋正當なる考證なるべし。

元來阿弗利加北岸、殊にカルタゴは此櫻欄竹の名産地たるなり。

赤色の手掌—尙ほ此地の櫻欄即太古の所謂「竹」(Date Palm)の地なるを證するものは日本書紀一書なりとす。乃ち火照命が幸に敗れて、弟命に赦罪し給ふ時「赤色」を以つて掌に塗り、面に塗り給へり。是れ櫻欄竹を Phoenix Dactylis 即ち「赤色手掌」と稱するに申つても之を知るべく。日本書紀の此語は、此地の櫻欄の地なるを暗示し遺せるものと謂ふ可し。

此カルタゴはホイニシヤ人の植民地なり。「ホイニシヤ」とは「赤色」「赤火」を意味す。乃ち「赤」を掌に塗り、面に塗り「は此赤色即ち「ホイニシヤ」關係を示めすものに非ずして何ぞや。

此くて Phoenix なる語は前節に説けるが如く、鳳凰を意味し、櫻欄及び竹を意味し、又た Dactylis と同語にして、其發音上高千穂の語原となれるに於ては、余は又た前々第十五章に反へりて希臘高千穂を證明せんと欲するものなり。

現日本の薩摩地名とカルタゴ

鳳凰は日本語おほりと謂ふ。前きに余が希臘の高千穂はオトリ山 (Otrys) なりと指示したるは、此鳳凰の純日本語を以てせるものにして、左の方程式を以つて希臘のオトリ山は高千穂たるを知るなり—  
Dactylis (發音轉訛高千穂) || Phoenix (鳳凰)  
Phoenix (鳳凰) || Otrys (大鳥) 鳳凰  
Otrys (オトリ山) || Dactylis (高千穂峯)  
此くて吾人は阿弗利加に高千穂あると同時に、希臘のオトリ山も亦高千穂たるを知るなり。  
現日本の九州は最も巧みに是等地名を移寫せしものにして、其薩摩の國名は幸關係の語に出でしものなり(後に論ず)。其櫻島あるや、咲耶姫の御名なり、暗啖那あるは「サクラ」櫻の希臘語「ソ」なるは前に説きし所、又た「斐」の國の寫しなり。加世田はカルタゴのホイニシヤ名たる Carthago なり。其「九十」の紋章は後に説く或はカルタゴ人種の移植を示めせるもの、如し。其東漸せる者には吾人は此後暹羅に於て邂逅するなり。

(一)彦火々出見命の御陵

三代御陵に關する國典の不明と昏亂

三代同一處にあり

彦火々出見命の御陵は希臘

一 彦火々出見命の御陵

天降三代の史蹟は國典は凡て之を一概して筑紫にありと爲し、又其御陵も筑紫日向にありと爲し、凡て一處に集團せるもの、如く書けりと雖、遼遠なる歴史上の事とて、決して精密なる史傳を存せず、又た之を解知し得ざるものありしより、凡て三代を以つて一處に在りしものと思ひしもの、如し。されば後代の研究家たるものは、只だ古書を信するのみに止まる可からず、其不明は之を明かにし、其混亂は之を判斷せざる可からざるなり。

吾人若國典を一瞥する時は、天降三代は皆同一筑紫に居り給ひしもの、如く思はるゝと、雖、尙ほ若し進みて、銳利なる研究を行ふに於ては、三代は別々の處に坐しまして、其御陵も決して同一日向に在らざるを知るものなり。

彦火々出見命の御陵は希臘オトツ山の西南方に在るとは既に之を説けり。次に彦火々出見命の御陵は、古事記は「高千穂の山の西の方に在り」と爲せりと雖、彦火々出見命の坐します國は、本章に説くが如く阿弗利加なるを知る

彦火々出見命の御陵はカルタゴ附近にあり

に於ては、其御陵も亦此方面に在るべきは理の當然と謂ふ可きなり。

日本書紀は此御陵は「日向の高屋の山の上」にありと爲し、高屋と高千穂とは言語上より一見する時は別地名の如き觀ありと雖、前述の如く、高千穂は「ダクテロ」を語原と爲し、高とは「タケ」竹と同一語の發音字を以つてせるものなりと知るに於ては、兩者又た同一地を謂へるものと見て不可なかる可し。

前にも述べし如く彦火々出見の坐しまして、地はヒッポ或はカルタゴ方面即ち「竹」の國にして、其海神の宮に行きまし、時、鹽推神が、無間勝間の小船を作らんが爲めに「囊の中の支櫛を取つて地に投ぐれば五百箇竹林になれり」と謂ひ、又木之花咲耶姫が御子を生みます時、竹刀をもて臍帯を截り、給ひ、其之を棄てし所は「竹林」となり、此地を「竹屋」と謂ふを思ひ見るに、古事記が此命の御陵を高千穂にありと爲し、書紀が高屋の山の上と爲せるも、何れ皆「竹」關係の地名にして、其臍帯を截りし竹刀を棄てし地を「竹屋」と謂ふは、其御陵の「高屋」の山と發音及び其實地は同一にして、只其支那字の異なるのみ

カルタゴの「幸の宮」は御殿。

なりと爲すも不可なるなきが如し。然りと雖余はカルタゴの局部詳細地圖を有せざるが故に、素より之を針尖もて指示すること能はずと雖、カルタゴ舊街の中央部、寧ろ北部に當つてサチルニ(Satum)神殿あり、サチルニは「サチ」(幸)にして、此宮は即ち「幸の宮」なるを知る。而して彦火々出見命は大に「幸」を得たる神なるに於ては、此宮假令御殿に非ずとするも、此命を祭れる宮なりとは之を言ひ得るもの、如し。

### 一二 「幸」及び「薩摩」の語原及び十字紋章の起原

#### 紋章の起原

山幸海幸の交換以後、兄火照命は弟彦火々出見命の徳を知り、自ら寧に伏し、假鼻を著け、赫を掌に塗り、面に塗り其の弟に告げて曰く、吾れ身を汚すこと此の如くし、永く俳優者と爲らんと。意ふに「幸」なる語は希臘の「ラ」行語にして、其樂を羅典語もて Dithyramm と謂ふ。若し此語中より例の「ラ」行音即ち「ロル」を無聲にする時は「サツム」となり、「ム」を「マ」と爲す時は吾人「サツマ」

「一二」幸及び薩摩の語原及び十字紋章の起原

華人の語原

(薩摩)の語を得べし。然り、火照命は華人の祖にして、華人は薩摩たり、以つて吾人の「サツマ」の語原を確むるを得べし。

華人とは意ふに Sina (Sina) 人にて其弟に敗れて「困苦憂愁」を意味せる語なり。決して雄健の「ハヤ」を意味するに非ず。又た其「アハヤ」の語根「アホス」は是俗語「阿呆(阿保同じ)にして、其「サツロルム」(薩摩)が「バツカス」神の樂筵の嘩方なるに見る時は、日本の神樂の「バカ」嘩なるものは、此「アホ」種族の爲せる所なるを知る。宜なり、謠曲が阿保親王の後なりと謂へる在原業平を謂ふて「極樂の歌舞の菩薩(Bodhi)」の化現なれば「杜若」と言へるや。又た演劇に「大薩摩なるものあるは、此「サツロルム」の樂に起原せるものなり。

薩摩人種は「丸十」の紋章を用ゆ、是れ「十字形」を表はせるものにして、第二節に鹽推神が囊中の「玄櫛」を投げ云々の事に起原せるを知るなり。何となれば玄櫛とは黒色の櫛を意味せるに非ずして、羅典語「クロクシ」(Cris = Cross)の發音を表はせるものたり、是れ「十字形」を意味すればなり。此に吾人は薩摩の丸十の紋章の起原を知るなり。

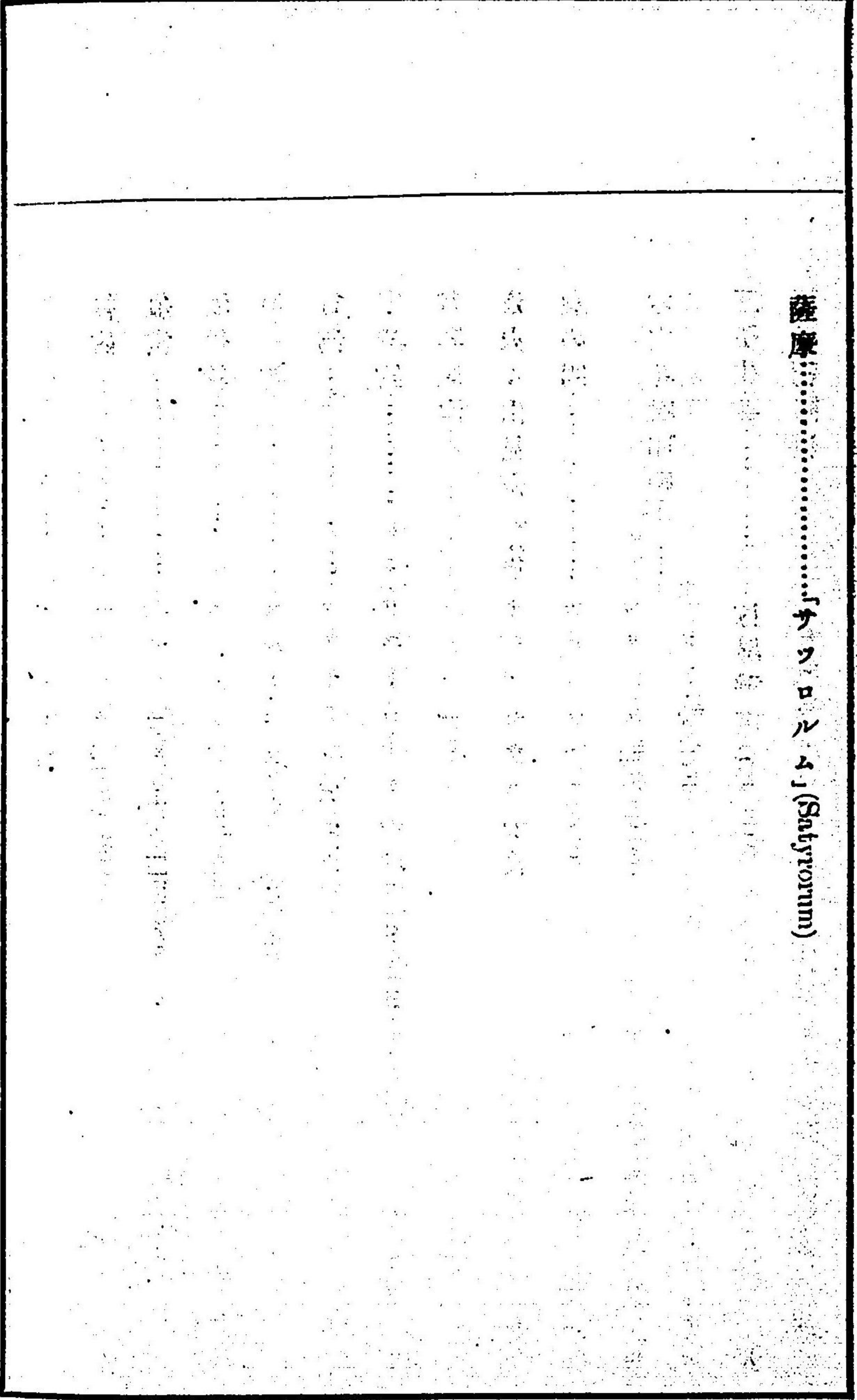
十字紋章の起原

第十七章 彦火々出見命の海神國行阿弗利加北岸東部地理 四〇四  
今若し是等の諸材料を綜合して考ふる時は、此ツニヌの國は、薩摩の國たるを知るなり。  
此國の西方をモーリ、モーレ、モーリタニア或はモールの國と爲す、黒を意味す。(Mori, More, Mauritania, Moor) 或は日本の毛利氏の大本國にはあらざるか。

- 彦火々出見……………ヒポダム (Hippodamos)
- 本國……………阿弗利加ヒポレギウム (Hippo-Regius)
- 「十拳劍」……………トスカ (Tusca)
- 「破り」……………ヒポヂアマリツム (Hippo-diarhytus)
- 鹽推、神……………メルクリイ (Mercurii)
- 無間勝間……………カルタゴ (Carthago)
- 「囊」……………パルクロト輪 (Pulchrum)
- 「老翁」……………ウチカ (Ufca)

- 湯津社……………ダフネー (Daphne)
- 從婢……………マカダチ (Magdolum)
- 殷富……………ハヤシ (Phaenicia = Phoenicia)
- 淤煩鉤……………エムボリマ (Emporia)
- 須々鉤……………スルチス (Syrus)
- 貧鈎……………マリオチス (Mareotis)
- 宇流鉤……………リネーロキマの地 (Cynosoma)
- 貧窮沈淪……………リビヤ (Libya)
- 彦火々出見命の笈…オヂラセウスの笈
- 襲の國……………カルタゴ (Carthago)
- 木之花咲耶姬……………カリポン姫 (Calypso)
- 三子生誕……………チドー姫 (Dido)
- 高千穂語原……………Dactylos

薩摩………「サソノホルム」(Sasynorm)



(一) 鵜葺草葺不合命の生誕

葺不合命の生誕記事

### 第十八章 鵜葺草葺不合命—阿弗利加北岸西部地理

#### 一 鵜葺草葺不合命の生誕

彦火々出見命の史傳に於て、吾人は阿弗利加北岸東部の地理は之を知れり、次に其御子鵜葺草葺不合命の史傳に於て、阿弗利加北岸西部の地理を學ぶ者なり。

彦火々出見命は海神國より、本國ヒッポレギアの地に歸へり給へり。然るに海神の女豊玉姫は妊み給へり。天つ神の御子は海原に生み奉る可からずとして、彦火々出見命の國に到り給ひき。即ち海邊の波限なみかきに鵜の羽を葺草にして産殿うぶどのを造りき。産殿未だ葺き合へぬに、御腹忍みはらへがたくなり給ひて産殿に入りましき。其の御子産みまさんとする時、其夫に申し給はく、凡て佗國の人は子産む時は本つ國の形になるものなり。妾も亦今本の身に

(二) 鵝草葺不合命の  
義 | 天地の  
支持者ア  
トラス

なりて産まむとす。妻を見給ふ勿れと。夫の神其言に従ひ給はず、御子産み給ふを竊ひ給へば八尋和邇に化りて匍匐委蛇ひき。豊玉姫夫の神の伺ひ見給ひしを知り、大に怨み、其御子を波限に置きて海限を塞ぎて返り入りましき。或は言ふ「御子を波限に置くは非なり」と、豊玉姫自ら抱て行き之を久うして曰く、天孫の胤は此海中に置く可からずと。乃ち妹玉依姫命をして抱き送り出さしめ、治養し奉らしめ給ふと。足れ鵝草葺不合命の生誕と、又其御名の意味なりと傳ふる所なり。  
然りと雖其比較研究の基礎に立てる所の名義解釋及び真正の神性は如何ん。

## 二 鵝草葺不合命の名義

### 天地の支持者アトラス

産殿未だ鵝の羽及び葺草を葺き合へずして生れまし、が故に、此神鵝草葺不合命と申すは俗説なり。素人語原學なり。

天地の支持者  
アトラス

アトラス傳

希臘語天地の  
支持者「ウガヤ  
ナスキエス」

余は此御神を以つて天地の子たり、天地の支持者たる所の、アトラス(Atlas)なる神と爲すものなり。されば先づアトラス神に就て記する所あるべし。アトラスには傳説種々あると雖も、要すに父は天、即ちウラノス(Uranus)母は地、即ちガイア(Gaia)にして、地の西極に居りて一身を以つて天地を支持して決して疲勞せざる神なりと爲し、後世之を山に配して現モロコシのアトラス山と爲す。此神又た海底の深さを知り、又た原始時代の天文學者なりとは希臘神話の傳ふる所也。



アトラス

希臘に傳れる鵝草葺不合命  
——希臘古彫刻

今若し「天地の支持者」なる語を希臘語に綴る時は如何ん、曰く「*Oigan-nu-nu-pagan*」天地支持者にして、若し例に由つて「ウラノ」なる語中より「ラ」音を省き、又た「ノ」音を略して全體を發音する時は、是れ「ウガヤフキアエス」にして、ウガヤフキアエス(鵝



「ウラノ」の「ウ」  
一音の發音例

葺草葺不合と殆ど同一發音を得るなり。此に於てか知る此神はアトラスにしてウガヤフキアエスとは其意味上の名稱なることを。英雄ヘーラクレースの神が日没國の林檎を獲んとして此地に來りアトラスに代りて天を支持せし神話あるに見る時は、鶉葺草葺不合命はヘーラクレースと系統を一にし給へるを知るなり。又ヘーラクレースは剛勇を以て天下に鳴れるドリヤ人種なるに見て葺草不合命も亦ドリヤ人種たるを知るなり。

然りと雖ウラノ(Urano)なる語中より「ラ」の二音を落すの例は他に之れ有りや否や。然り余は一個之れ有るを知れり。かの垂仁天皇の時に來朝せる所の宇斯岐阿利智叱于岐及び天の日矛は實は天文學者宇斯岐(Utsukimihiko)及びHipparchosの事にして、此事後に論ずべしと雖、其ここに「宇斯岐」なる形容語を考ふるに、是れ「宇」とは天を意味する希臘語(ouranos)の轉訛發音なるが如く、「斯岐」とは「識」或は「學」を意味せる羅典語(scientia)なるが如く、「ウシキ」とは「天文學」を意味せるものゝ如し。殊に日矛に「天」の形音詞あるは、是亦「ウ」な

(三)支那に傳はれる鶉葺草葺不合命  
伏義氏  
天皇氏、地皇氏、人皇氏  
大吳伏羲氏  
蛇身

る語に當れるを暗示せるものと謂ふべし。是れ此兩人の天文學者なるに由つて判知するを得るなり。さればウラノなる語は「ウ」一音を以て發音せられ有るを知り、ウガヤフキアエスの「ウ」は又たウラノ即ち天を意味せるを知るなり。

### 三 支那に傳はれる鶉葺草葺不合命——伏義氏

此神支那には甚だ詳細に傳へらる。彼れの所謂天皇氏とは即ち前配ウ即ち天を謂ふなり、地皇氏とは「ガヤ」即ち地を謂ふなり。人皇氏とは第二章第二節に説きし所のヒト人を謂へるものなるべし。意ふに大吳伏羲氏或は庖犧氏なるものは葺草不合の神を謂へるものにして、其「フッキン」と謂ひ或は「ホーキン」と謂ふは希臘發音全然(Phoegon)と同一たるに由つて之を知る可し。

伏羲氏は蛇身人首なりとは支那書の傳ふる所。是れ吾國典の豊玉姫を龍或は蛇族と爲し、其此神を産みます時、自ら龍の形と爲り給へりと謂ひ、其

天文学者

日本人と支那人

御子は又た一方龍の系統を引き玉へると一致せる思想なりとす。希臘神話の傳ふる所に據れば、此神原始の天又學者なり、天地を支持せる神なりと。ウガヤの名稱之に一致せるは前之を説けり。支那書亦同様の事を傳へて曰く「庖犧氏聖徳あり、仰ては象を天に觀俯しては法を地に觀傍ら鳥獸の文と地の宜とを觀、近く之を身に取り、遠く之を物に取る」と。是れ葺不命の支那傳にして、明かにウガヤ天地思想を表はせりと謂ふべし。此の他日本太古史と支那太古史との關係の希臘羅典埃及的研究に就ては、甚だ愉快なるものありと雖、今は之を略す。要するに支那人も太古は西洋に居りしが、後代に至つて極東に移りしものたるなり。故に我に缺けたる所、彼れ之を保存せることあり、彼れに傳へざる所、我れ之を傳ふるあり。世界的知識を以てする所の太古の比較研究は、決して今日の碌々たる歴史家等の夢にだも思はざる所、又能くせざる所なりとす。支那太古史の研究にも、大々的の革命を興へ、其大部分は之を西洋地理に歸へして説明せざる可からざるなり。此に一言の注意を興へ置く。

(四) 鷓鴣草葺不命の地理

此命の御名の語原

天津日高

日子「ヒツキ」

波限「スルチス」

建「マツシリー」

#### 四 鷓鴣草葺不命の地理

此神名の語原及び神話上此神の神地は大要モロッコのアトラス山地方なることは之を知り得たりと雖、尙ほ此神名中に含まるる地名の説明を試むる所ある可し。

此神天津日高日子波限建鷓鴣草葺不命と申す。

天津日高は皇位繼承者の號なるは既に之を説明せり。

日子とは即前述「ヒツキ」にして、其地はヒツキギウス即日子の居所を意味せるなり。是れ今のツニス及びアルゼリアの地なり。

波限とはツニス、トリポリ間の海岸の稱にして、前記スルチス(Syria)即ち「波限」の地を表はせるもの如し。

建とはツニスよりモロッコに至る間の地の古代の名稱 *Mussosyri* 或は *Nassyri* を謂へるもの如し。是れ酒人種關係の「マツサリオ即ち猛夫」を意味せる種族を表はせる語にして、之れを「建」と謂ふは普通たるなり。次に――

五 吾平山の御陵—ジブラタルの對岸アピラ山

西洲の宮

●●●草●●●不●●●合●●●とは前に述べしが如く、天地の支持者アトラスの神の別名にして、阿弗利加北岸最西部現時のモロッコの地に當り、此地にアトラスの大山脈ある、即ち是れ此神の地たるなり。

### 五 吾平山の御陵—ジブラタルの對岸アピラ山

葦不合命、其姨玉依姫を妃と爲し、五瀬命、稻水命、三毛入野命及び神日本磐余彦命、神武天皇凡て四男を生みませり。之を久うして葦不合命、西洲の宮に崩じませり。因て日向の吾平山の上の陵に葬る。

此に吾人は特に注意せざる可からずして、古來何等の注意せしものなき所の「西洲」の宮なる語あること、爲す。天降二代即ち邇々藝命及び彦火々出見命の神々に就ては、何等「西洲」なる特記なくして、唯此神のみに就ては特に「西洲の宮」に崩すとの語あるは、獨何ぞや。他なし、これ此命の特に獨り西洲の宮に坐しまし、西洲の宮に崩じましが故なり。即ち是前記モロッコの

吾平山—現日本に在らず

アラビ山

地希臘神話の「西方即ヘスベリア(Hesperia)」の地たるなり。

吾平山—御陵は日向の吾平山にありと。吾極東九州の地には吾平山なるものなし。諸註釋者往々之れ有るが如き言を爲せりと雖、一として取るに足らず、皆曖昧漠然學術的確實なる考證決して之れ無く、「某山は往古吾平山と言ひし由」云々の註釋たるのみ、信するに足らず。今若し往古吾平山と言ひし有名にして、尊敬すべき山名を後世無意味なる他の名稱に變更するが如きことは決して之れ無かるべきは、常識を以つて知り得べし。然るに眞に之を變更したりとせば、其等九州人民は、史蹟を重んぜず、皇家の御傳を敬せざる不敬なる人民と謂はざる可からず—豈此くの如きことあらんや。現九州の地には、太初より吾平山は無かりしのみ。アラビ山—眼を轉じてモロッコの地を見よ。西班牙のジブラタル岬角に對する阿弗利加側の岬角には、嚴然としてアピラ(Ayila)山ありて存す。此地東に面す故に日向と謂ふのみ。アトラス山(ウガヤヌ、オルキヌス山)と共に地名集團の系統を保ち、日本書紀が特に此命一人にのみに就て「西洲」と言

(六)玉依姫  
虹霓と菖蒲  
の女神

海神の使節  
一族玉依

第十八章 鷓鴣草葺不合命阿弗利加北岸西部地理 四一六  
へるの意味を知るべし。又た神武天皇が日向に居まし、時の妃阿比良姫は、又此地名に取れるもの、如し。此山今はムサ或はアベス丘(Musa, Aps)と稱す。西班牙領にして、セウタ(Ceuta=Septia=Sebta=セ)なる要塞都市は此アベラ山に建てられしものなり。  
此くて鷓鴣草葺不合命に關する地名の系統的集團は、之をツニス以西の阿弗利加北岸と爲すことを得て、天孫の勢力の何れの邊にまで及び居りしかを察するに足るなり。

### 六 玉依姫—虹霓と菖蒲の女神

葺不合命の御姨たり妃たり、又た神武天皇及び其他の母に坐します玉依姫命は、實に是れ海洋美を代表せる所の霓裳羽衣の女神に坐せるなり。  
希臘神話に、海神の子にタウマ(Thaum)族あり、タウマは即ちタマ玉にして、神を意味せる「トヨ」を冠する時は、これ豊玉姫(Thao-Thaum)の家名に非ずして何ぞや。玉の神の女にイリ或はイリス姫あり(Iri=Iris)。今若しイリ

「玉依」は虹霓を意味す



玉依姫 (Iris)

鷓鴣草葺不合命 (Atlas) を養育し給ふの圖  
(希臘古瓶畫)

を訛て「ヨリ(依)」と發音する時は、吾人は此に玉依姫の名稱を得るにあらずや。  
希臘神話の言ふ所に據れば、此女神は虹霓の女神にして、挿畫の示すが如く、實に霓裳羽衣の天使なり。此に於て吾人は謂へらく、かの此女神の「イリ」即ち「依」なる御名は、吾等の日常使用せ

「あやめ」の語原

る所の「ニヂ」虹なる語と同一語なりと。何となれば「イリ」の「リ」音は往々「ヂ」音に訛り、又其「イ」音に「N」音加はる時は「ニ」となり、こゝに「ニヂ」虹の轉訛音生せしものゝ如くなればなり(此例少なからず)。然らば古事記の玉依姫は之を希臘語に譯する時は「タマ・イリ姫」(Thama-Iri)にして、吾人は其虹霓の女神たるを知るなり。

此女神夜の國即ち西洲に使ひし給ふ。太古此國を「アヤ」(Aia) 或は「ガヤ」(Gai) と稱し、土地を意味す。今若し「アヤ」國の使者を希臘語に譯す時は「ヤム・メ」(Yam-mé) にして、若し其「ム」音を「メ」音に融合せしめて「アヤ・メ」と爲し、「メ」音又た「メ」音に轉ずる時は如何ん。あゝ是れ「アヤ・メ」(舊蒲)にあらずして何ぞや。

然りと雖も、果して是れ舊蒲なる植物の名稱なるや否やに至つては、今一應の試験的證明を要す。吾人は前きに玉依姫の「依」は「イリ」なることを言へり。而して「イリ」或は「イリス」(iris) の植物名の舊蒲なることは、外國語を知れる者に取ては極めて明瞭なる事にして、此女神の舊蒲の女神にして、神話方

蛇「ジャ」の語原

暗黒

面の「アヤ」國の使神を意味せる所の「アヤメ」なる語は又舊蒲なることを断定するも、決して誤謬に非るを知るなり。

蛇の別名を「あやめ」と謂ふ。其理由如何ん、曰く希臘神話「殊に「キム・メリ」神話は容易に其説明を與ふべきなり。然りと雖も其大略を言はんには、前記「アヤ」なる語は又た「ガイ」或は「ゲ」と謂ふ、其「G」を「J」音に發音せば是れ「ジャ」にして「蛇」たるなり。然りと雖も一層簡單なる説明は、此神の御姉玉姫の蛇となり給ひしは、即ち玉依姫たる「あやめ」も亦蛇族たるが故なりとの事を以てするにあり。

暗黒を形容して「あやめもわかぬ」と謂ふ。從來の解釋は此場合の「あやめ」を以つて舊蒲の「あやめ」と別語原と爲し、物の差別を意味すと爲せりと雖も、是れ誤れり。此「あやめ」は尙ほ前述舊蒲と同語原の語にして、「アヤ」の使者を意味し、「あやめもわかぬ」とは「暗黒國たるアヤ」の使者たるものも、別き兼ぬる」を意味せる語なり。舊來の字書類盡く訂正を要す。

又此「ガヤ」なる語は「ウ・ガヤ・フキア・エズ」の神の御名中なる「ガヤ」なる語に當

「モロッコ」唐の語原

(七)西偏なる日本—神代

世界の極西國

第十八章 鵜葺草葺不合命—阿弗利加北岸西部地理 四二〇  
り、玉依姫が此神を養育し給ふの姿は、挿書に就て之を見る可し。其抱き給へる小兒は是、ウガヤフキアエヌの命也。  
若し夫れ海神國は前記埃及ナイル河口たり、葺不合命の國はモロッコなりとせば、阿弗利加北岸は、實に吾祖先の神々の足跡を印し給ひし土地たるなり。又此モロッコは太古の「モロッコ」唐の語原にはあらざるか。説明はこゝに略す。

### 七 西偏なる「モロッコ」日本—神代

#### 結論

鵜葺草葺不合命の國は此くて阿弗利加北岸最西部モロッコなり。是れ實に太古世界の最西國にして、此命は此地に住し給ひ、此地に御陵あり、此地に御子は育ち給ひしなり。神武天皇が「蒙以つて正を養ひ、此西偏を治む」と詔り給へる「西偏」の日本帝國は實に此地にありしなり。  
此に於て吾人は今まで經歷し來れる歴史地理を回顧せんに、吾人は小亞

過去歴史及び地理の回顧

蒙以つて正を養へる時代

細亞を以つて天となし、襍祿地となして歴史地理の出立點と爲し、神々の關係は其れより西方獨逸及スカンデナヴィア諸國に及び、東は須佐之男命の關係に於て波斯、印度より埃及及びエチオピア方面にまで至り、伊邪那岐命の國生み神生み地理は、吾人に示すに地中海沿岸一帯の地理を以てし、天孫降臨は希臘の地たり、天孫の子孫は夫れより發展して阿弗利加北岸—東は埃及のナイル河東口の地より、西はモロッコに至る詳細なる歴史地理を有せるものなることを誨ふるなり。

此間に有する吾人の神史は、實に希臘羅典神話と同一なるものにして、又た北歐神話の如きも吾神史に關係あり、又た吾神史の變形たるなり。然りと雖、茲に之を論ずることを略すべし。

若し夫れ猶太教及び耶蘇教と吾神史との關係に至つては、決して親密ならざるに非ずして、寧ろ兄弟たるの關係を有し、彼等は吾神史神典に據りて其經典教義を編成せるを見るなり。

此神史を有し、此地理的範圍を有し、其神裔たる天孫は、鵜葺草葺不合命の

代に至つて、此廣大なる神政的世界帝國の極西地に坐しまして「是時運鴻荒に屬し、時草昧に鍾れり。故に蒙以つて正を養ひて此西偏を治め」給ひ、日本書紀の謂ふ所に據れば「天祖降跡より今に一百七十九萬二千四百七十餘歲」神武天皇起りまして、こゝに天業は恢弘せらるゝに至るものなり。

蕪草葺不合……………希臘語「天地支持者」アトラス(Atlas)支那傳の伏羲

「查」……………ヒポの地(Hippo)

「波限」……………スルチヌ(Sythia)

「建」……………イダシリー(Massyli)

「葺不合」……………アトラス—アロハ(Atlas)

吾平山……………アビラ山(Abyla)

玉依姫……………メウマイリス(Miunna-lis)

〔六合を兼ね、八紘を掩ふの皇圖〕  
神武天皇の大抱負

### 第四編 歴史及び地理 (希臘日本)

#### 第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來

##### ス族の希臘歸來

##### 一 〔六合を兼ね、八紘を掩ふの皇圖〕

神武天皇の皇圖は雄大なり、其理想は天業の恢弘にして、其抱負は實に天下を洵治して一家と爲し、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲し、世界的帝國の天祖の遺業を擴大し給はんとにありき。故に其東征の時の勅語に曰く

「余謂ふに彼地は以て天業を恢弘し、以つて天下に光宅するに足るべし。蓋六合の中心か」

世界的大見識を要す

と。又た皇宮造營の時に勅語に曰く  
 『六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲さん』  
 と。神武天皇の抱負夫れ此くの如し。是れ天照大御神以来の理想にして、日本帝國の國是なり。されば神武天皇の事業を知らんと欲するものは、先づ其大精神を解し、世界的大見識を以つて研究に臨まざる可からず。  
 鵜葺草葺不合命に四子あり、(一)五瀬命、(二)稻氷命、(三)三毛人野命、(四)神日本磐余彥命、幼名は狹野命、又た彦火々出見命。  
 神日本磐余彥命年十五にして立ちて皇太子と爲り給ふ。御年四十五に及びて諸兄及び御子等に謂うて曰く『昔我天つ神高皇產靈命、大日靈命、此豊葦原の瑞穂國を擧て我天祖彦火、邇々藝命に授け給へり。是に於て彦火、邇々藝命、天關を開き、雲路を披て仙躰を駈て戻り止す。是時運鴻荒に屆し、時草味に鐘れり。故に蒙以つて正を養ひ此西偏を治む。皇祖皇考乃ち神乃ち聖、慶を積み暉を重ね多く年所を歴たり。……又鹽推翁に聞く、曰く、東に美地あり、青山四周す。其中亦天の磐船に乗りて、飛び降れるものありと。』

高千穂會話

舊派の小日本主義

余謂ふに彼地は以つて天業を恢弘し、天下に光宅するに足る可し。蓋六合の中心か、その飛び降れる者は、謂ふに是れ倭速日か、何ぞ就て都せざる」と。諸皇子對て曰く、『理實に灼然。我亦恒に以つて念と爲す。宜しく早く行ひ給ふべし』と。  
 天業を恢弘し、天下に光宅するは實に神武天皇の皇圖なり。規模實に世界的なり。  
 然るに從來の世界的知識なき時代の國史家等の爲すが如く、此天皇の此大精神を度外視して、毫も世界的思想を以つて研究せんとするの念なく、之を解するに極東小島國の現在日本の地理を以つてし、世界的大運動を將て之を小島國內の一地方に壓縮するが如きことあらんか、是れ大日本の大歴史を小歴史と爲す者にして、此くの如きは國史を愛せず、史實の眞理を愛せざる者と謂ふべく、不忠之より大なるは無し。決して區々現日本島國の小地理の知識を以つて解すべきに非ざるなり。敢て天下の愛史家に倣す、世界的知識を以つて、此世界的大帝王を研究せんことを。世界の太古史及び



東征概要

ドリアン族との  
關係

希臘方面の神史は、此天皇の御名を太古以來傳へ居るなり。然るに從來の歴史家は之を知らずして、國典の大記事を縮小して極東に傳へ居るなり。大に改めざる可からず。

余の新研究を以つてする時は、神武天皇は、御父鵜葺草葺不合命の坐しまし、所の「西洲」即ち現今のモロコシより東を指して出發し、地中海を横断してマルタ島附近に珍産を得給ひ、其れより直航して西北希臘のアカルナニヤ即ち所謂難波に上陸し、コリントス海岸に沿ひて東に進み、轉じて北に折れてアイトリア方面に轉戦し、遂に北進して、テッサリアに入りて長髓彦を滅ぼし、其中央なる克蘭ノン即ち「樞」の地に帝都を定め給ひしものゝ如し。

其日本太古史に出づる所の吾民族に關係ある希臘の諸地を綜合して考ふる時は、日本太古の民族は、明かにアイオリア（火遠理人種に屬せるを知る）と雖、又其須佐之男命即ちヘーラクレス神の關係より見る時は、又たドリアン種族たり、チタン種族と見るべきものありて、或は神武天皇の東征は、彼太古史に傳ふる所の「英雄神」ヘーラクレス民族の希臘歸來に當れるものゝ

第一章 神武天皇の天業恢弘ヘーラクレス族の希臘歸來 四二六

(二)神武天皇  
と世界歴史

現島國日本に非

如きなり。何となれば、鵜葺草葺不合命の地は、ヘーラクレス族の居りし地たり。神武天皇の希臘經過地は、皆是れヘーラクレス族の地たり、又其神話あればなり。

### 二 神武天皇と世界歴史

神武天皇は世界的大帝王なり、極東小島國の小大和に縮め込みて解釋するが如きは、大不敬なり。余は始めに謂へらく、吾人の所謂神代史までは、日本人は希臘方面に居りしと雖、其より以後、神武天皇に至りて、帝國は始めて極東日本に移りしものならんと。此思想を以つて、余の新研究は、神代を以つて一段落を付け得べしと思ひ居たり。然るに其歴史、其地理決して現日本のものに非ず、依然希臘方面のものにして、其出發點たる「西洲」の何處なるか——東征の道筋及び滯留し給ひし土地等殆ど不明にして、其順序は決して現日本のものに非ず——難波上陸以來の地理に至つては、全然日本の地に合はず、又た書物に記載しある所の諸地名の現日本に無きもの多く、其順

第一章 神武天皇の天業恢弘ヘーラクレス族の希臘歸來 四二七

希臘地理と國典

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四二八

序方向、戰略等に考へ、全體の調和を缺き、苟も誠實に研究するの意ありて、決して牽強附會心を有せざる者は、容易に其現日本の地理に關せる歴史に非るを知るべし。

之に反して試みに希臘方面の地圖に就て、神武天皇東征史を讀め、其路順は正當に、其日本に之れ無き地名も、希臘の地圖には明瞭に存在し、又全體の連絡方位等完全なる調和を保てるを見るべし。是れ余が神武天皇紀は、未だ極東日本のものに非るを謂ふ所以なり。

此に於て舊派の學者は大に驚き、或は其頑冥固陋の徒は、余に向くるに不敬なりとの語を以つてするものあらんと雖、事實は事實なり。歴史は曲ぐべからず。况や世界的神武天皇は、彼地の太古之を希臘羅典史中の人物として記るしあるに於てをや。余も始めは大に之を驚きたり。然りと雖、事實は如何にするとも打消す可からず。次に余は喜びたり、何となれば神武天皇の世界的の大帝王たり、吾日本の祖先の世界に雄飛したる民族なるを知り得たるを以つてなり。

神武天皇は世界史上の天皇

古事記と日本書紀との相違及び誤謬

然り。神武天皇は極東日本の天皇に非ずして、「世界大」時代の「西洋日本」の希臘に都し給へる帝王たるなり。現日本の畝火山及び樺原の宮は吾人は之を神武天皇の御移靈地なりとして尊敬するは敢て人後に落つるものに非ず。而して世界の太古史は曰く「磐余彦天皇は希臘羅典方面に其史傳あり」と。國典は曰く神武天皇は六合八紘を家と爲すを目的と爲し給ひ、必ずしも極東の小大和を以つて、其宇なりと自ら界限し給ふこと無かりしと。歴史家たるもの請ふ活眼を開き、其胸度を大にして、此天皇の御史傳及び大日本帝國の太古史を研究せよ。豆の如き小量見を以つて、吾太古史を見るものは、是れこそは祖先の神々及び天皇に對して大不敬たるのみならず、又た國史を汚すものなり。

### 三 古事記と日本書紀との相違及び誤謬

神武天皇の東征の路順を記るすに於て、日本書紀と古事記とに相違あり。

今其大要を對照し、然る後詳説に及ぶべし。

○日本書紀

- (一)日向出發
- (二)速吸之門

○古事記

- (一)日向出發
- (二)豐國宇佐

混入記事

- (三)筑紫菟狹
- (四)筑紫岡田宮

混入記事

- (五)安藝多祁理宮
- (六)吉備高島

- (三)筑紫岡水門
- (四)安藝瑛宮
- (五)吉備高島の宮
- (六)吉備高島の宮
- (七)難波上陸

- (二)速水門
- (七)難波上陸

速吸之門は日本に無し

右の如く(三)より(六)に至るの間に兩者の相違あるを見る。何れか果して正當の記事と爲すべき。今若し試みに日本書紀を取り、現日本の地理に適用せんか。速吸ノ門は今の所謂豊後海峽なるべしと雖、此海峽は決して速吸ノ門と稱せず、又た稱へたるの證なく、船人皆之を佐田の岬或は御鼻と謂ふ。又其文字の意味に由りて速く吸ひ込む所の海峽なりと解せんか、此豊後海

埃ノ宮等の不明

徵證すべからざる理由

峽は何等速く吸ふ的のものあることなし。故に余は豊後海峽速吸ノ門説を否定す。

又若し、古事記に據るとせんか、速吸ノ門を配當すべき海峽一として之れ有るなし。兩書何れか正當なる。或は兩書共に誤れるか。速吸ノ門此くの如く夫れ不明なり。否此くの如き海峽は現日本に之れ無きなり。

次に安藝の埃ノ宮とは果して何處ぞ。あゝ亦不明、否此くの如きの史蹟は一點だに徵すべきなし。古事記は之を多祁理の宮と謂ふ。益、徵すべき無し。

次に吉備の高島の宮亦知るべからず、徵す可からず。此くて兩者の相違は如何に之を處分すべき。又其地名の多くは全く徵證すべからずとせば、あゝ、從來の研究も亦覺束なしと謂はざる可からず。日本人は爾かく史蹟を貴ばざる、人民なるか否々他に理由あり、即ち之れ現日本の土地に非ればなるべし。

兩書記事の誤謬  
の理由

紀行を二分せよ

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四三二

余は言ふ、此地理や、素より現日本の地に適用すべきに非ず、又た兩書其記事に混亂あるは、神武天皇東征紀行に混するに、又他の或者の遠征紀行を以つてせるものあればなりと。何となれば、神武天皇の東征出發地は明かにジブラルタルの對岸アビラ (Abila) なり、難波上陸以後の地理は、又た明かに希臘にして、宇佐及び岡の水門は希臘の他方面の地たり、安藝はアイギプトス (埃及) たり、吉備はケミの地にして、(三)より(六)に至る間の地理は、全然別紀行の混合なりと認め得べければなり。是れ余の研究の結果として、後に説くべき所を前に一言し置くものなり。されば余は順序を追ひて、神武天皇の出發地點より東方に向つて進行し、果して如何の結果を呈するやを試むべし。

請ふ從來の如き、見戯に類せる研究法と、唯だ記録史料を肯信する惡習慣とを打破し、眞の研究心を以つて、十分の批評と懷疑とを以つて史料を取扱ひ、以つて公明正大なる結果を得んことを力めよ。

されども古事記日本書紀兩記事共、其(三)より(六)に至る間を取り去る時は

兩書の順序亦同一たり、又た其(三)より(六)に至る間の順序も兩書同一たり。故に其兩書相違の理由は、(三)より(六)までの記事の介在と否とにあるべし。されば試みに此紀行を二分して、(一)は神武東征、即ち吾平より希臘に至る地理と、他は(二)何人が—蓋神武天皇の或一族—が希臘より出發して埃及 (安藝) を通過し、ケミ (吉備) に滞在し、以つてアビシニヤ、大和に帝國を創建するの紀行と爲せ。今之を分解して表と爲す時は左の如くなるべし—

○神武天皇希臘歸來

(一)日向(モロコ)のアビラ出發

(二)遠吸之門

(三)(四)(五)(六)は別人の別方面の

運動

(七)難波(希臘)アカルニヤ上陸

○他の或一團のアビシニア遠

征

○希臘出發

(三)豐國の宇佐

(四)筑紫岡の水門

(五)安藝多祁理宮

(六)吉備高島の宮

○アビシニヤ上陸

（四）出發地點  
アピラ

此くの如く判別して始めて又た古事記と日本書紀との順序に相違あるの理由を知り、又た余の立説の正常なるは遂次明瞭となるべきなり。

四 出發地點アピラ（吾平）

神武天皇始めに居給ひし國は、御父鸕草葺不合命の地なるや明かなり。葺不合命の御陵は吾平山にして、此山は今のジブラルタルの反對側モロッコの一岬角なるは前既に之を證明せり。神武天皇の又此アピラの地に居給ひしは、其始めの妃を阿比良姫（書紀は吾平津姫と爲す）と謂ふに由りても之を知る可し。

此のアピラは又た高千穂第一高千穂は希臘オトリ山第二高千穂はカルタゴの地、此高千穂は假に第三高千穂と稱し置かん」と謂ふものゝ如し。何となれば、此アピラは現名ムサ（Musa）と謂ひムサは「ミーズ」にしてアポロン神の別名なり。アポロンは *Apollon*（破るの語に出でしものにして、此「アポラの」アピラ「吾平」と訛りしものなるべく、アポロンの神は亦建或は「竹」の

モロッコのアピラ山

第三高千穂

東征地

神にして竹の語より高千穂の名稱出でしは、彦火々出見命の章に之を詳論せり。

されば古事記は曰く、「神倭磐余彦命、其兄五瀬命と二柱高千穂の宮に坐し、まして議り給はく、何れの地に坐さばか、天の下の政を平けく聞こしめさん。猶東の方に、行まされと語り給ひて日向より發したり」と。乃ち知る此地又た高千穂の稱あることを。是れ第三高千穂なり。

其東の方とは何れの地ぞ、前きに天の磐船に乗りて、饒速日命の飛び降り給ひし地是れ「就て都し給ふべき地なり。而して饒速日命の降りまし、地は、第三編第十五章に論せし所の希臘オトリ山の地なるべし。何となれば、暹々藝命の天降と、饒速日命の天降とは、記事に混交ありて、其天降地は希臘オトリ山の地なるを想ひ起すは、當然たればなり——然り、其此地なるは次々に之を證明することゝなるなり。

五 速吸之門はマルタ海峡—珍彦

（五）速吸之門—珍彦



オヂラセウスの  
神話の改作の  
か

大使徒ポールの如きも亦甚だ疑はしき人間にして、假令實在人間なりと爲すも、使徒行傳等は構設的事多く、又た古代神話を使徒行中に編入せるもの有るが如し。ポールが羅馬に行く時、マルタ附近に難船したる事の如きは、吾人の比較研究より見る時は、是れ全く古代神話の改作にして、彼れや嚮導の神ヘルメースの如く、又た難船したるオヂラセウスの如く、此兩人物を一に合したるもの乃ちポールなる人間の如し。故に使徒行傳二十七章を通讀せよ、公平なる思想は必ず是れオヂラセウス難船神話と同一なりとの判断を下すべきなり。故に使徒行傳は、難船の状態を記して然る後曰く「或洲崎を望して走りしに潮の流れ交ふ處に至りて舟を洲に乗り上げ、船は膠定て動かす、船は浪の動き爲めに破られたり。……百夫の長ポールを救はんと欲ひ……滔ぎ得る者は先づ水に跳び入り、其他は或は板、或は舟の碎木に乗りて岸に至らんことを命じたり(二十七章)。我等已に救を得て其島の名をマルタと稱ふことを知り(二十八章)」と。あゝ是れ「オヂラセウス」の焼き直ししたるなり。

第一章 神武天皇の天業恢弘ヘーラケレース族の希羅歸來 四三八

珍彦記事

此くてオヂラセウスの難船地點は、餘りに神話的にして十分の明確なしと雖、其マルタ附近——然り余はマルタと判断すべき位置たり。古神話改作的なる耶蘇教の使徒ポールの難船地は明かにマルタたり。是等神話を參考して、余は速吸之門を以つてマルタ海峡なりと爲すは、其着眼の動機たるなり。

珍彦記事——右はマルタ海峡着眼の動機なりと雖、是より其本文の珍彦關係より之れが説明を試むべし。日本書記は曰く「天皇諸皇子を帥ゐて舟師東征し給ふ。速吸之門に至ります。時に一漁人あり、艇(古事記、能の甲)に乗りて至る。天皇招して問て曰く、汝は誰ぞ。對て曰く、臣は是れ國つ神名を珍彦と謂し、曲浦に釣す、天神の御子來ますと聞き、即ち迎へ奉ると。又問ふて曰く、汝能く我が爲めに導を爲すか。對て曰く、導きまつらん。天皇漁人に椎橋の末を授けて執らしめて、皇舟に牽き納れ、海導者と爲し、乃ち特に名を賜て推根津彦(古事記、橋根津彦)と謂ふ」と。是れ珍彦記事なり。次に此記事中なる種々の言語中に含蓋せらるゝ意義より、マルタ島證明を試むべし。

第二章 神武天皇の天業恢弘ヘーラケレース族の希羅歸來 四三九

「速吸門は「ハヤシ」の門なり

「速吸」の語原

「マルタ」は材木丸太なり

きなり。何となれば嚮導の神は又言語の神たり、言語には生命あり又た是れ研究の光明たればなり。

「速吸之門ハヤシの門」——「速吸」とは何ぞや。是れ意味ある文字なるか、或は發音の假字なるか。余は謂ふ發音の假字なりと。何となればマルタは前述オヂラセウス神話中のハヤシ人の地にして、意ふに「速吸」とは「ハヤシ」の發音の境れて其「シ」音は「ス」となれること、猶丹波風土記に「速石をハヤシ」と訓せるも何等「石」の速きを意味せるに非ずして「ハヤシ」は「林」たるを知るが如し。「林(Pine)」とは樹木の繁茂豊富を形容せる語にして、材木を日本語「マルタ」(丸太)と謂ふ。「マルタ(Marta)」とは思ふに英語 *Marta* 獨逸語 *Marta* と同語にして廣き意義の「騰る」ことを意味し、土地よりの「生々發生を意味し、やがて又た林を意味し又た材木を意味することゝ爲るべし。(四十五頁四十六頁の「上登」思想關係語參照然らば「ハヤシ」は又た「マルタ」たる可く、「速吸」は「ハヤシ」たり、ハヤシはマルタたり、こゝに速吸之門のマルタ水道たるは稍之を考へ得るものゝ如し。

「樁」  
棒、丸太

板、碎木

使徒「ポール」の語原「棒」

「ポール」は樁根津彦の改作

珍彦が皇船に乗り移るや「樁」を指し渡して之を引き入れたりとのこと、は又た丸太觀念を説明するものにあらずや。何となれば「樁」は又是れ一種の「棒」なり、丸太なればなり。

かのポールがマルタ島に着きし時、或は板、或は舟の碎木に乗りて岸に至る」との記事は又これ「材木」即ち丸太觀念を含めるものにして、オヂラセウスの場合と全然同一たるなり。

且つ「ポール」の名は之を *Pole* と書すと雖、是れ「棒」を意味せる希臘語 *Polos* 英語 *Pole* 獨逸語 *Pol* 等と同一語なるも亦之を推知するを得べく、西洋の語原學者の説明取るに足らず。珍彦が「樁」即ち「棒」を傳ひて皇船に乗り移りしと同一觀念の名稱なるが如し。

其珍彦が「樁」を傳ひしより、一名を「樁根津彦」と謂ふ。「サラ」(樁)とは又是れ希臘語強力生活呼吸向上(即ち「棒」の觀念を意味せる所の「カミ」を語原と爲し、又た「マルタ」及び「ハヤシ」と同一意義なりと謂ふ可し。かのポール亦一名を「サロ(Salo)」と謂ふは「樁根津彦」の「サ」と同語なるが如し。而して是れ「靈魂」



「艇」の奉迎—ガ  
ウルス島

珍彦と「カリブ  
デス」渦巻

を意味せる英語 *Canoe*、*Canal*、*Canoe*、*Canoe*、*Canoe*、*Canoe* 等と同一語にして、語原は「活動」を意味し又た希臘語の *κίνησις* に當れるなり。然りオヂラセ  
ウス神話は又た此地點に於て、風神アイオロスを出だせるは余の語原を證  
明すると同時に耶蘇經典のポール或はサアルなるもの、難船記事は事實  
に非ずして、古代神話の改作なるを示すものと謂ふ可し。

「艇」の奉迎—夫れ然り神武天皇が此水門に來り給ひし時、珍彦は艇に乘  
りて來り奉迎せり。地圖亦其奉迎を教ふるなり——元來此マルタ島は二  
島より成り、其西なるは小島にして、奉迎的位置に當り、其名をガウルス (*Gauls*、*Gauls*、*Gauls*) と謂ふ。譯せば「艇」なり。然り、珍彦の「艇」に乗りての神武天皇奉  
迎史は幾千年來地中海の海圖に記載せられて不磨たるなり。

珍彦とカリブデス—殊に珍彦の名稱と希臘神話の「カリブデス」とは余  
の前説一切を證明するものゝ如し。「カリブデス」は伊邪那岐命の禊に成り  
ませし甲斐辨羅神にして、海中渦巻の神なり。此神シ、リア海峡に居ます  
とは希臘神話の言へる所、後メシナ海峡に移す。廣き意味のシ、リア海峡

珍彦の語原

「船根」の語原

又たマルタ海峡をも含み得るなり。珍彦は此海峡の國の神にして、「珍」とは  
「渦」にあらずして何ぞや。然り、珍彦は渦彦なり。神話の人化なり。ポール  
の難船記事中、潮の流れ交ふ所と言へるは、即ち是れ渦巻ける所を意味せる  
なり。

支那字「珍」字を用ひしは、後世意味の誤解に因るものにして、「珍」とは、大切、要  
用等を意味し、羅典語 *us* (us) に當ると雖、實は前記渦巻の渦たるなり。而  
して此渦なる語は羅典語 *volvo* (volv) なる語の「ウツ」となりしものなるべく、  
導、直進、教示、向上、興起、旋轉、糸等を意味せる語にして、其「旋轉」の意味にて「渦」た  
るなり。又其興起、向上、直進等の意味に於ては、橋根津彦の「橋」たるなり。珍  
彦一名を「船根」と謂ふ、又た是れ羅典語、向上を意味する所の *Surgen* (*Surgen*) の  
「ツルギネ」の發音を取りしものなり。

是等皆カリブデス(實は「カリブリス」と同一意義を有し、珍彦なる名稱中に  
は、捧橋、嚮導、旋轉等の觀念を含有し、前述耶蘇の使徒「ポール」「サウル」「マルタ」  
「バヤシ」等の諸觀念と十分に調和を保てる名稱なりと謂ふべし。

(六)難波上陸  
より竈山ま  
で—アカル  
ナニア、アイ  
トリア國經  
過  
アカルナニアは  
難波

且つ珍彦の語原 *ediv* 或は *ediv* は最も多く「嚮導」の觀念を有する語にして  
天皇問ふて「汝能く我が導きを爲すか」對て曰く「導きまつらん」との言の如き、  
明瞭に「嚮導」的觀念を表はし、*ediv* 或は *ediv* なる語が「ウツ」の語に當れるを證  
明せりと謂ふ可し。  
是等種々の事實、歴史、地理的位置及び言語等を綜合して考ふる時は、速吸  
之門は「ハヤシ」の門にして、マルタ水道たるを謂ふも誤りに非る如し。

### 六 難波上陸より竈山まで—アカル

#### ナニア國及びアイトリア國經過

如何に精讀するも、如何にこぢ付くるも、神武天皇紀の難波上陸後の地理  
は極東現日本地理に非ずして、之に反して明瞭確然北希臘の地理たるなり。  
余は斷々乎として之を確言す。

珍彦は海路を導きて、天皇を北希臘の西岸アカルナニア (Acar-Nunia) に至れ  
り。アカルナニアとは「アカル」と「ナニア」との合成名稱にして、其「ナニア」は即

アケロ河湖「流」  
龍田—テスチエ  
ス

ち難波たるなり。吾人は先づ此地點を上陸地と定め、神武天皇紀の地理は、  
全然希臘なるを證明すべし。然りと雖、仁徳天皇の難波は埃及なり。此に  
一言し置く。

アケロ河湖「流」——國典は曰く「皇師難波の碇に至る。流を溯りて直ちに  
河内國草香の邑の青雲の白肩之津に至る」と。難波とは前に言へる如くア  
カルナニア國の稱にして、其「流」を溯るとは、此國を貫流せる所のアケロ(アケ  
ローオス Acherous) 河を謂ふものなり。何となれば「アケローオス」(Acheron)  
とは希臘語「流」を意味すればなり。

皇軍、青雲の白肩の津に至る。是れ肩津なるものにして、ストラッス (Stras)  
(Stras) の地即是れなり。(後に證明す) 皇軍此地より「兵を勸へて歩いて龍田に  
趣く」——

龍田(テスチエス)——とは前記ストラッスより東方に進める地點テスチ  
エス (Thesiens) にして、其語尾「ス」を略し「エ」を「ア」音に轉する時は容易に「テスタ」  
となり「タッタ」(龍田)となるべき音たるなり。是れ亦龍の女神 (Elois) の名稱

地なり。

「然りと雖其路狹險にして人並び行くことを得ず。乃ち還つて更に東の方膳駒山を踰えて中洲に入らんとす。時に長髓彦之を聞て属兵を起して之を孔舍衛(クサカ)と訓するは誤れるが如し坂に徹る。流矢五瀬命の脰脛に中り、進み戦ふこと能はず。天皇憂ひ給ひ神策を運らして曰く、今我は日神の子孫なり。日に向つて虜を征つは天道に逆れり。今より日を背負ひて撃たんと。乃ち軍を引て還り給ふ。虜敢て逼らず。却つて草香の津に至り、盾を植て、雄詰を爲し給ふ。由て其津を號して盾津と曰ふ」と。

是れ素より現日本の地理に非るなり。何となれば若し假定して白盾の津を以つて或人の解する如く淀河の牧方なりとし、其地より龍田に至るとせんか。既に龍田に至らば是れ大和に入れるものたり、且つ是れより前路は平坦なり、決して其路狹險にして人並び行くことを得ずと言ふが如きことあらざるなり。之に反して若し生駒山を越えんとせば、却つて山道を通過するの不便あり。既に目的とせる所の大和に入りながら、之を出で、平坦

現日本の地理に非ず

膳駒山—アラキントス

膳駒山は長髓彦の別名

孔舍衛坂—ブレネ

地に面しながら狹險なりと言ふが如き。現日本の實地々理に合はざるなり。此點よりするも、此記事の現日本の地理に非るを知るなり。されば吾人は茲に之を希臘地理として證明すべきは膳駒山、長髓彦、孔舍衛坂、脰脛(五瀬命の)及び盾津なる可し。

膳駒山(アラキントス)——とは希臘に於ては何れの山なるべきぞ、又其意味や如何ん。是れアイトリア國西南の山にして、アラキントス(Areyntus)山即ち是れなり。アラキントスとはアポロン神の別名にして、アポロンは又た其丈高きより一丈二尺彦(Dodeca-Schoenus)と謂ひ、是れ長髓彦(Donga-Schoenus)なり。アポロンの神は第五編第一章三節に説くが如く、垂仁天皇の御名活目系統にして、イクマの轉訛は「イクマ」なり。即ちアラキントス山、アポロン、長髓彦、イクマ(膳駒山)にして、長髓彦山即膳駒山たるなり。又かの長髓彦の「髓」の語原 *skion* は「矢」を意味する語なるが故に、「長髓彦の流矢」なる句ある所以なり。

孔舍衛坂(ブレネ)——長髓彦皇軍を孔舍衛坂に徹る。意ふに此坂は、此

方面よりアイトリア國に入るの門戸にして、ブレートネ(Praene)なる地は乃ち其れなるべし。孔含衛とは希臘語他國人を意味せる *prohaimoi* の「クサエの」となれるものなるべく、此地は此國に入るの門戸たるは、やがて他國人に關係ある地にして、此名稱あるの理由なきに非るなり。後に出づる所の母木邑も亦此地の別名なる可し。

「肱脛」の地名—オレヌス

肱脛(オレヌス)——孔含衛坂の戦、皇兄五瀬命肱脛に長髓彦の流矢を受け給ふ。其肱脛の紀念は膽駒山の西北即ちトリコニ湖の南方に地名として存せり。オレヌス(Olenus)是れなり、下腕即ち肱脛を意味す。語根は *olen* にして、「オ」の「ウ」となり、「レ」の「デ」となりしもの、是れ日本語「ウデ」即ち腕なり。

「戦争中止の地名—リシマキア

戦争中止(リシマキア)——皇軍進む能はず、軍中に令して、且く停れ、復進む勿れ」と。是れ一時戦争の中止なり。「戦争中止」の地名となれるものは、是れリシマキア(Lysimachia)なり。膽駒山の西方にあり。

「盾津—ストラッ

盾津(ストラッス)——皇軍其位置の不利なるを悟り、一旦以前の上陸地に退き、盾を植て、雄詰を爲す、故に此地を盾津と謂ふと。是れ前に謂ひし所

母木の邑—プロスキウム

の青雲の白盾の津の別名なり。此地はアケローオス河畔のストラッス(Stratus)なり。何となれば、是れ希臘羅典語「立て」縦「陣地」武備を意味せる語にして、「盾を植て」と同語たればなり。

母木邑(プロスキウム)——初め孔含衛の戦に、人ありて大樹に隠れて難を免るゝを得たり。仍て其樹を指して曰く、恩母の如しと。時の人其地を號して母木の邑と謂ふと。此母木の邑とは、ブレートネと同一地にして、之をプロスキウム(Proschium)と謂ふ、遮蔽を意味す。母木邑とは「オモギノ」(Omo-gi-no)即ち同生、同母を意味せる語なり。

雄の水門—エラウッス

雄水門(エラウッス)——皇軍茅渚の山城の水門に至る。時に五瀬命の矢瘡痛み希臘地圖にては茅渚 *Pythine* 『赤色』は此地に非ずして磐楯の西南にあり、甚しく、劍を撫して雄詰して曰く、慨かな大丈夫にして、勝手に傷けらる。報いずして死せんかと。時の人其の處を號して雄水門と云ふ。雄水門とは雄詰を意味せる所のエラウッス(Elauus)にして、膽駒山南方の海岸にあり。現名、ミソロンギ(Missolonghi)長髓を嫌ふを意味すなり。

菟山—カルキス

菟山(カルキス)——進んで紀伊の菟山に至りて五瀬命軍に薙じます。因て菟山に葬る。菟山とは其海岸を東に傳へる所のカルキス(Chalos)是れなり。「カルキス」とは凡て一般の銅器を謂ひしものゝ如し。故に國典他の部分に菟の神(ヘスチアの地に當る所を)カルキス(輕)と謂ふに據りて考ふる時は今此カルキスの地は、又た菟山なりと謂ひて不可無き如し。

七 名草より荒坂津まで—ロクリス・オゾーリス國海岸

(七)名草より荒坂津まで—ロクリス・オゾーリス國海岸  
名草—ナウバクタス  
佐野—オエネオン

名草(ナウバクタス)——皇軍是よりロクリス・オゾーリスの國に入り、名草に至り、名草、戸畔なる者を誅す。名草とは其海岸の要地ナウバクタス(Naupactus)の訛れるものゝ如し。即ち「ナウ」は「ナ」となり、「バクタ」の「バ」は「マ」、「タ」は「サ」となり。「ナマクサ」となり、又た「マ」音を落して「ナクサ」(名草)と爲りしものなるらんか。現名を「レバンナ」(Lebanu)と謂ふ。  
佐野(オエネオン)——遂に佐野を越て熊野の神の邑に到る。意ふに佐野

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四五〇

磐盾—ヨウバリウム

とはこれ Oison のことにして、希臘の此語は甚だ廣き意義を有し、健康を興へ、疾病を治療し、興揚、物興を意味す。故に其同意義を有せる羅典語を以つて「サノ」(Sano)佐野即ち健康と謂ひしものゝ如し。熊野の神の邑とはロクリス・オゾーリス、ドイリス、ホーキス人を含める總稱なるが如し。故に是れより以下の記事は一種の神祕を含めるを見る。熊野(Onuma)の神とはアポロンの稱にして、其中心はデルフイ(Delphoi)なり。是れ海豚を意味し、其能く「波に乗る」を希臘語「クマノ」と謂ふ。アポロンは又た太物主神としても現はる。

磐盾(ヨウバリウム)——此地に入りて皇軍天の磐盾に登れり。是れヨウバリウム(Bupadium)なり。支那字磐盾は發音の假字にして、何等岩石の意味あるに非ず。今此ヨウバリウムなる語の意味を尋ぬる時は「ヨウ」は「善ウ」なり。往々「イッ」の發音に訛る。「バリウム」とは「balium」を語根とし「技巧」を意味す。「技巧」の別語に「autolis」なる語あり。其内「イ」音の無聲となる時は「グデ」となり、濁音を清音とせば「グテ」(盾)となるべし。此くて若し「ヨウバリウム」に

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四五二

荒坂の津一ハエ

八熊野山中  
オゾクリス

第二章 神武天皇の天業恢弘一ヘーラクリス族の希臘歸來 四五二

代へて「ヨウダテ」と爲し「ヨウ」又「イワ」と爲す時は「ニ」に「イワダテ」磐盾となるべし。意ふに是れ「善き盾」を意味せるものゝ如し。

荒坂の津一名丹敷浦(ハエズ)——皇軍海中卒かに暴風に遇ひ稻水命奮慨して劍を抜て海に入り、劍持の神となり三毛入野命も亦常世の郷に往きませり。天皇獨り皇子手研耳命と共に軍を帥ゐて熊野の荒坂の津に至り丹敷の浦にて丹敷戸畔を誅す。荒故津は又た丹敷の浦と謂ふ。

余は「荒坂」の名稱は之を地圖に發見せずと雖、丹敷(錦)の浦はハエズ、(Plea-  
re)なるを知る。是れハエズ(即ち映え)光華燦爛を意味し、日本語「錦」の語に當れるなり。「ニシキ」とは希臘語「光華燦爛」を意味せる *phosphores* の「ニシキ」  
リ「錦織」「ニシキ」「ニシキ」と、簡略になりしものなり。さればハエズ、は荒坂、  
津の別名たり、丹敷錦は又たハエズ、の別語なるに於ては、此地圖上のハエズ、は荒坂の津たり、丹敷の浦たるを知る。

### 八 熊野山中——ロクリス・オゾーリス

國海岸より  
ドーリス國  
の山中へ

### 國海岸よりドーリス國の山中へ

其記事

皇軍はロクリス・オゾーリス海岸より、ドーリス國山中に向ふなり。是より記事は神祕に入り、地理の説明は甚しく複雑となり、十分に希臘學の思想なき者に取つては、或は解し難からんことを思ふ。然りと雖、余は成し得る限り簡單と平易との主義を以つて説明を試むべし。書紀に曰く——

「時に神毒氣を吐きて人物咸く瘡(おへ)と讀むぬ。是に由りて皇軍復振ふこと能はず、時に彼處に人あり、名を熊野の高倉下と云ふ。忽ち夜夢むらく、天照大御神、建御雷神に謂ふて曰く、夫の葦原中、國は猶喧擾けり、宜く汝往て之を征てと。建御雷神對て曰く、吾行かずと雖、吾が平國の劍を下さば、國將に自ら平ぎなんと。天照大神曰く、諾。時に建御雷神、高倉下に謂ひて曰く、吾が劍の名を薙靈と言ふ。今汝の庫裏に置くべし。宜しく取つて天孫に献れと。高倉下唯々と言ひ、寤めて明且夢中の教に依りて庫を開けて之れを視れば、果して落ちたる劍ありて庫

の底板しとに立てり。即ち取つて之を進る。時に天皇適寢たふませり。忽ちに寤めて曰く、吾れ此くも長く眠つるかなと。尋で毒に中れる士卒悉く復た醒め起きたり」と。

甚だ興味ある記事にして、而も此記事中の重要な言語及び思想は大抵此國の地名となりて保存せらるゝを見るなり。然りと雖、先づ一言し置くべき事は、此記事中に表はるゝ所の現象は、一種酒神關係——寧ろ惡方面の酒の神話なりとの事を心得るを要することなり。

余が今此記事中の重要な思想及び名稱と地理地名との關係に就て説かんとする所は、

神毒氣を吐く

人物咸く瘁やへぬ

高倉下

夢むらく

劍を下す——落ちたる劍

「神毒氣を吐く」の地名「ロクリス・オゾーリス」

神の靈

劍は庫の底板に立てり

劍を天孫に献れ

等と爲す。順次其地名的説明を試む可し。

神毒氣を吐く(ロクリス・オゾーリス)——吾人の研究は今やロクリス・オゾーリスの地にあるものなり。此國名は西洋語原學者の以つて未詳と爲す所なりと雖、此に神武天皇の此記事を持ち來る時は、意味自ら明瞭を致すものゝ如し。

日本書紀に曰く「神毒氣を吐く」「人物咸く瘁やゆ」と。是等の材料は以つて能くロクリス・オゾーリス國名の意義を明かにし、又た神武天皇紀の地理的説明を與ふるものと爲す。此一段の記事は一種の神力と其毒氣作用とに關せるものなるが故に、解釋亦此方面より爲さる可からず。希臘太古以來の國名地名は、凡ての言語及び名稱の常として、長年月間に非常に變化せるを思はざる可からざるなり。余は日本書紀の記事に據てロクリス。

酒神の意義

「ロクリス」  
「オゾーリス」

オゾーリスの國名は之を完全なる希臘語に還元せば「強力なる酒神」と「氣を吐く」との二語と爲ると信ず。即ち Louis とは Lou-krissos 「一層強力なる自由の神(酒神)」にして Ozois とは「臭氣香氣」等を意味せる Ois と「人民」を意味せる Ozois との合成、即ち「臭氣を吐く人民」を意味し、ロクリス、オゾーリスの國名は「臭氣を吐く強力なる自由の酒神國」を意味し、日本書紀の「神毒氣を吐き」の語に當れる國名なるが如し。實に是れ、西洋學者の解釋し得ざる希臘名稱等は、日本歴史を以つてして、始めて其解釋を得たるものと謂ふ可し。簡略に對照せば

$$\left. \begin{matrix} \text{Ozois} \\ \text{Lou-krissos} \end{matrix} \right\} + \left. \begin{matrix} \text{Ozois} \\ \text{Lou-krissos} \end{matrix} \right\} = \text{「神毒氣を吐く」}$$

の如し。

人物成く瘁へぬ(オエアンテア)——「瘁へ」とは瘁萎することなりとして使用しありと雖、實は「なへ」の語を以つて正當と爲す。何となれば「なへ」なる語は實は「物興を意味し」皇軍亦振る能はずの「振るは即ちオへ」たるべく「なへ」と

「瘁へ」オエアンテア

高倉下ヘーラ  
クレーリス族

高倉下と「ヘーラ」  
クレーリスの  
語原

「ヘーラ」と「高」と

「をへ」とは或は言語轉倒せるにあらすやと思はるゝなり。其正否は茲に之を別問題となし「なへ」なる語に當るべき地名にはオエアンテア(Oeanthea)あり。是れ「新芽發生物興を意味し」復振る「復醒起きぬ」の書紀の語に當れるなり。

高倉下(ヘーラ)クレーリス族——此地に熊野の高倉下なる神あり。天照大御神、建御雷神の神助に由りて劍を得たり。此高倉下とは余はヘーラクレトス(或は其族裔)の別名なりと爲す。何となればヘラクレトスはポイオーチア及びホーキス(熊野)一帯の希臘神話上の英雄神にして、神武東征に當つて其出現は當然の事たればなり。

ヘーラクレトスは Heracles と綴り、又た Hercules とも綴り、其相違あるは意義の不明あるを示すものにして、西洋の學者等未だ十分に其意義を明確に爲し得ざるなり。然るに此に日本書紀の記事を持來りて研究の一材料を供給する時は大に其明確を得るものゝ如し。意ふに「ヘーラクレトス」(Heraclitus)は神聖なる食即ち故に「酒倉を意味せるものゝ如し。即ちヘーラ(Hera)



「倉下」と「ク  
リス」

西洋語原字の

は實は *tepeza* の「ヘーラ」となりしものにして「神聖を意味し、又た高及び」<sup>ウツ</sup>「厩を意味し、若し之を羅典語と爲す時は *Stab* となり、<sup>ウツ</sup>「菜酒神聖」となるなり。

*Stab* は又た *stab* と綴り、<sup>ウツ</sup>「母音ある時あるに由つて見る時は前者は有るべき音を落したるものと思はるゝなり。今若し日本書紀が支那文字もて高倉下として「倉字を書せる」と又た「庫」に關係せる記事あるとに由りて考ふる時は、高倉下の「倉」は其意味を以つて説明して可なるが如く、<sup>ウツ</sup>「庫」即ち「庫」なる語の綴字の變化せしものは、是れ從來使用せる所の *staba* 本来の綴字にして「ク」レオシなる發音は「ク」ラシ（倉下）となりしものと謂ふべく、「ヘーラ」クレ「ス」の意義は高倉下即ち「神聖なる庫」なるべし。故に此神羅馬に在つては一種富有の福神として尊敬せらるゝなり。且つ此神は「ミューズ」の一方面を有す、「ミューズ」は又た「所蔵を意味し、庫を意味す。

然るに西洋學者は「ヘーラ」クレ「ス」の名は「ヘーラ」女神を顯揚するを意味すと解し、*Heraclion* に其語原を求め、雖其彼の綴字たる *Heraclion* に「u」の母音字存し得るの理由を説明し能はず、羅馬方面の信仰をも説明し能はざる

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四五八

「高を下す」の地  
名—カライウム

なり。されば余は日本書紀の「高」と「庫」とに關する觀念を嚮導と爲し之れを *Heraclion* (*Hera-clion*) の綴字に還原し、又其意義に解し、高倉下は「ヘーラ」クレ「ス」の別名なりと爲すものなり。尙ほ其次に説く所の劍關係は、高倉下の「ヘーラ」クレ「ス」なるを示めすものなり。

然りと雖、又た是れ「ヘーラ」クレ「ス」神其人に非ずして、其後裔を意味せる所の *Hera-clion* が「ヘーラ」クレ「ス」(「イ」ヂ「ス」)となり、以つて「高」クレ「ス」の發音を爲すに至らんことも有り得べし。兩者何れなりとするも、大差なく、誤謬にも非るなり。

● 高を下す(カライウム)—建御雷神、劍を下すべしと言ひ給ひ、高倉下の庫裏に「落ちたる」劍ありとの記事は、カライウム (*Chlainum*) の地名となれり—是れ *Yukio* を語幹と爲せる地名にして、「下す」落ちたる等を意味する語たればなり。

元來前記「ヘーラ」クレ「ス」の神(高倉下)は、劍法(希臘)には棍棒と爲す(カストール)建御雷神に學べるものにして、又た常にアテーナ女神即ち吾天照大

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四五九

語の靈

「立てりの地名  
—アンフの地名

御神の庇護の下にある神なり。故に此一段に於ける日本書紀の記事中天照大御神及び建御雷神の出現し給ふは、又た彼我神話の一致を示めして、吾人の立説に傍證せるものと謂ふ可し。

「靈」——建御雷神の劍の稱號を「靈」と謂ふ。此神は鹿取の神即ち鹿を  
取る神にして、希臘神話のカストールに當り、カストールは「打」の神にして、  
其精神はヘーラクレースの根棒と現化せり。されば此點より考ふる時は  
「靈」は「打」の靈にして、語原は英語の butcher (ほき) と同語にして、即ち「打  
ち殺す」を意味し、又た鹿を取り、殺すを意味し、「フツ」の「フツ」となり、又た「ウツ」打  
つ」となれるものたり、全然鹿取の神名に合せるなり。

「庫」の「底板」に「立てり」(アンフ) —— 劍落ちて庫の底板に「立てり」と。此  
「立てり」の語はアンフの此名となれり、是れ「立てり」と「立てり」の合成語の地  
名的變化を爲せるものにして、「アンフ」とは「四周」を意味し、「イステロミ」とは  
「立つ」を意味す。即ち劍の立ち居りしを表はせる地名たるなり。然りと雖  
「劍」なる觀念は果して何に由つて此地名に表はされ居るか。曰く「ドーリス」

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四六〇

「劍を天孫に獻  
る」—ドーリス

なる國名に於て然り。吾人は今や隣國ドーリスに入るものなり。

「劍を天孫に獻る」(ドーリス) —— 高倉下劍を得て之を天孫に獻る。此奉獻  
思想は「ドーリス」の國名中に包含せらる。元來「ドーリス」(Doris) とは *Doris*  
を語幹とし、「奉獻」を意味せる語にして、又た *dois-doris* なる熟語を形成して「劍  
の奉獻」を意味するなり。されば此「ドーリス」國名は、高倉下が「劍を天孫に獻  
る」の思想を表はせるものと調ふべし。

又此劍即ち *horis (horis)* なる語は「切り出す」を意味し、古事記の所謂「熊野の  
山の荒ふる神、自ら皆切り出す」なる語に當れるなり。

此くして熊野山中の神武天皇の事變は、此く地名となりて記念せられ居  
り、又た我國典地理の此部分は、希臘の此部分なるを知り得たり。

此にドーリス國あり、ヘーラクレース族ありて天皇に盡くせるを見る時  
は、神武天皇と、ドーリアン人種との關係を思ふべく、神武東征は希臘史に所謂  
「ヘーラクレース神族」——或はドーリアン人種——の希臘歸來なるものに當  
れるが如し。

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 四六一

（九菟田に進  
入し西向戦  
争期始る）  
オタ地方

八咫鳥山—コ  
ラス山

菟田の穿邑—エ  
ギチ邑

### 九 菟田に進入し西向戦争期始る —オタ地方

吾人の研究は、今やドリス國より菟田の地に進入せんとす。山中険に  
して行く可きの道なし。茲に天照大御神の神恩に由りて八咫鳥皇軍を嚮  
導す。吾人亦此鳥に従つて研究を進むべし。

八咫鳥山(コラス山)——皇軍前には東に日に向つて戦ひて利あらざりき、  
今や西に向つて日を負ひて戦ふべき時となれり。八咫鳥軍前に翔翔す。  
乃ち地圖を見よ、ドリス國の西方に當つて鳥山あり、Coun と綴り、アイオ  
リア人種アツチカ人種は之を「コラス」と發音す。「コラス」は發音「カラス」(鳥)にし  
て意義亦鳥なり。乃ち知る是れ八咫鳥の名を山名に負へるものなること  
を。(八咫とは酒關係の swan の「ヤタ」と訛れるなり)

菟田の穿邑(オタのエギチ邑)——八咫鳥の飛び行きしはオタ(Ota)の地な  
り。Ota は「オタ」「小田」「オータ」「太田」「オーイタ」(大分)となり「オ」は又た「ウ」に轉じ

兩猪

「牛酒」の御歌

て「ツタ」(菟田)となり、又た其地名語尾「タ」を略する時は「オエ」或は「オーエ」(大江)と  
なるの語なり。

鳥は西南に飛び行きしもの、如し。道臣命先鋒たり。乃ちオタの南部  
或は下部即ち下縣にエギチ邑あり (egitim)、「エギチ」は「ウゲチ」(穿)なり。此語  
の意義は「牡羊」なり、或は鹿なり。英語「ラム」(Lamb)と謂ひ、又た攻城突穿機  
名稱たるに由りて、此「エギチ」なる語が「穿」を意味するを知るなり。

兩猪——菟田に兄弟猪の二會長あり、猪とは「穿」と同意義にして、語尾「シ」  
と「チ」の變化あるのみ。而して其穿なる語は牡羊を意味することを再び  
此に注意す。——牡羊を別語 *hircus* (hircus) と謂ふ。

天皇此兩人を徴し給ふ。弟猪直に至りて軍門を拜すと雖、兄猪至らず、權  
謀を以つて新宮を作りて殿内に機を施こして天皇を壓殺せんとす。弟猪  
之れを知りて天皇に奏せしかば、道臣命大に怒り、劍を按し、弓を轉きて、兄猪  
を殿内に追ひ入れ、自ら其機を踏みて壓死せしむ。(希臘神話のテッセウス  
傳中にも是と同様の事あり) 弟猪大に牛酒を設けて、皇軍を勞饗す。天皇

舊解釋の誤謬

「笑ふべき」鳴と

山と海との混同

無上の奇劇

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクリ—ス族の希康歸來 四六四

其酒完を軍卒に班ち賜ひ、親ら御謠を作りて歌ひ給はく、

「子僕能多伽機珥。辭茲和奈破蘆。和俄末菟夜。辭茲破佐夜羅瑪。伊殊區波辭。區施羅佐夜離……」

誤謬なる舊解釋——此に「牛酒」なる語あり、意ふに「牛」を意味せるに非ず、鹿を意味し、鹿の犠牲祭を牛酒と謂ふものゝ如し。何となれば前記天皇の御歌之を謂へばなり。

御歌の舊解釋は大に誤れり。然りと雖其舊解釋をこゝに出さば、曰く「菟田の高城丘に、鳴網張る、我が待ち居れば、鳴は其網にかゝらずして、鯨かゝる」と。是れ大々的誤謬にして、到底論ず可からざる誤謬なりとす。何となれば山上に鳴網張るさへ既に事實に相違せるなり。何となれば鳴は田鳥にして、山鳥に非ざればなり。假令「辭茲」は鳴なりと爲すも、小鳥なり、其小鳥を捕る爲めの網に、大なる海獸たる鯨が山上に來りて、其小鳥の網にかゝる可しとは、思はれざるなり。如何に滑稽詩人と雖も、其如きの奇想は天來せ

新研究の正解

菟田のタカキ

「シキ」は獅子なり、神武天皇代

ざる可きなり。然りと雖舊來の解釋は皆是れにして、何人も疑ふ者なく、「何人か天皇に鯨肉を献上せしものありしより、天皇即興して此歌を詠み給ひしものならん」とは、彼等の解する所なり。あゝ是れ全く誤謬たるのみ。然れども雖語原學なき時代は止むを得ざりしなり。

吾人の正解——此歌實は鯨献上者ありて云々の如きものに非ずして、實は「兄猪が獅子たる神武天皇を網にかけんとして、機を施きし」と雖其待ち居りし獅子たる天皇はかゝらずして、却つて「牡羊たる猪之にかゝれり」と笑ひ給ふ歌なり。今之を詳説せんに

「菟田の多伽機(ヘーラクリ)とはオタの東部なる Heta-ota を謂ふものなり。これ Heta は高倉下の説明と同じく「多伽」なり、Ota(倉)は「リ音無聲」となる時は「クイ」は一音「キ」機にして、此地の多伽機たるを知るなり。

「辭茲和奈破蘆」——は素より網を張ることなりと雖「辭茲」は決して「鳴」に非ずして「獅子」なり、獅子は Sion にして、又た「シ」の發音を呈す、シ、リア島と同語原。伊邪那岐、神國生み地理志、山津見 [Teonin] の部を見よ、又た「磯城」

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクリ—ス族の希康歸來 四六五

「クナラ」は山羊  
兄弟代表

と同一なり、磯城は余の研究に據れば後に論ずる Eurythans の地に當り、之を磐余と謂ふは、イウリ(タネス)の「イワレ」となりしものなる如く、こゝに「辭藝」は濁らず、清音「キ」と訓ずるは、磐余産神武天皇の御名に同じきを知る、方程式もて示めさば――

辭藝 = 辞 = 磯城 = Scilla = Eurythans = 磐余 = 神武天皇の御名

故に辭藝 = 獅子 = 神武天皇

此に於てか、辭藝は即ち獅子にして、神武天皇を意味せることを知る。辭藝和奈とは即ち神武天皇を捕らんとせし網なり。(若し此説の如く、辭藝は神武天皇を指せるものに非ずとせば、後に出づる磯城産を謂へるなるべし)。兄猪此く獅子天皇の網を張りて待ち居りしも獅子は之にかゝらずして却つて自己其機に懸るなり。何となれば――

「伊殊區波辭區旋羅佐夜離」を以つてなり。舊解釋は、いすくはしを以つて鯨の冠辭、磯魚取と同語の、磯魚細なりなど、説明せりと雖、磯魚細なる冠辭は日本語中に一語も之れ有る無し。捏造牽強附會の説明も極まれり

と謂ふ可し。「いさな」とり、は明瞭に海關係の語なるは余既に第一卷言語篇中、冠辭の部に之を説けり。然りと雖、いすくはしは全く別語にして、強力を意味せる希臘語 *Isos* にして、其突撃の激しきより、牡羊の冠辭たるなり。決して海に關せず、又た、鯨に關せざるなり。

然らば此に「區旋羅」の語あるは如何ん。是れ鯨に非ずして、牡羊の希臘語たるなり。前に猪の語原を説明する時、是牡羊を意味し、別語之を *scilla* と謂ふことを一言し置きたり。「クナラ」區旋羅の「チ」は清音なり。(鯨は別に *scilla* を語根とせる語なるが如し、何となれば其口輪の如ければなり)

此くて猪は *Agilia* (ウリ) たり、*scilla* たり、山羊たり、牡羊たるなり。國語山羊を「ヤギ」と言ふは *scilla* の縮まりて「ヤギ」となりしものなり。

乃ち是れ猪(牡羊)は獅子(神武天皇)を捕らんとして、反つて猪自ら其機にかゝりしと解するは正當なるを知るなり。かの舊解釋の鴨の小鳥の網を山上に置き、海中の大鯨之にかゝると謂ふが如きは實に笑ふべきのみ。舊研究法は此くの如く、破産を示めすものと謂ふ可し。本居以來の舊解釋全然

吉野ヨイノス

〔十〕磐余方面  
の戦闘準備  
イウリタ  
ネス

西方瞻望

抹殺に値す。

吉野(ヨイノス)——此後天皇吉野の地を省んと欲して宇陀の穿邑より親ら輕兵を率ゐて幸す。吉野の國とは宇陀(Oda)の西南なるアイトリア(Aeloria)の國にしてヨイノス河(Euenna)の流るゝ國なる可し。而して「ヨイノス」は吉野なる可し。即ち「ヨイ」は日本語「吉」にして「ヨイノス」は「ヨイノ」と爲り、又た別に「ヨシノ」(吉野)となるべし。此川アイトリア國の河なり。

### 十 磐余方面の戦闘準備——イウリ

タネス

西方瞻望——皇軍今や菟田オタより西方の賊虜を討伐せんとす。天皇吉野より還りて菟田の高倉山の巔に陟りて城内を瞻望み給ふ。高倉山とは何れの山なるべきか明確ならずと雖、蓋オタ山(Ota)なる可きか。何となれば此山此附近の最高山なるが如ければなり。其時國見丘上に八十梟あり。女坂に女軍を置き男坂に男軍を置き墨坂

國見丘—バンアイトリウム山

墨坂—サームム

磐余—イウリタネス

(炭坂)に煉炭を置き、又た兄磯城の軍磐余の邑に布き滿てり。是れ此附近賊虜の形勢なり。

國見丘(バンアイトリウム山)——國見丘とは「全國を見る丘」を意味し、今此國はアイトリアなるが故に、こゝに此國の中央に「アイトリア全國を意味せる Pan-aiolium 山あり、國見の意味に合せりと謂ふ可し」。

墨坂(サームム)——男坂、女坂は未だ之れを詳かにせずと雖、墨坂、炭坂は明かに Therman なるを知る。何となれば「サームム」とは「溫熱」を意味せる語なれば、其煉炭を置きし炭坂、墨坂なるや疑ふ可きなし。且日本語「スミ」炭なる語は Thernus より出でしものにして、又た「Therni」となり、こゝに「サ」音變化して「ス」となり、以つて「スミ」なる音となるなり。「スミ」即ち「溫暖」なり。(若し之れに「ア」なる否定辭を冠して「Asmirus」と爲す時は「アサム」となり、「オサム」お寒となり、何時しか再び「ウ」音を落去して「サム」となり「寒」となるなり)。

磐余(イウリタネス)——又兄磯城の軍磐余の邑に布き滿り。意ふに磐余とは「Bury-tanes(Bury, tanes)の地に當り、イウリ」は「イワン」(磐余)となりしもの

天皇軍中の神祭

如し。即ち是れ希臘語「廣布延張」を意味せる語にして「布き滿てり」の語に當れるなり。即ち「礧城」とは「布き敷き」なり。強力の延張を動物名に移して「獅子」と爲す。Sion、シリウ及びシケル人種同語は此語に當り「シキリ」(Shiri)と兩様の發音生ず。其「シキリ」となりしものは是れ「礧城」なり。此地又た Apenin 之總稱あり「無限」「無崖」を意味し、「イウリタネス」と同意義なり。是れ礧城、邑なるが如し。

天皇軍中の神祭——賊虜の據る所皆是要害の地故に道路絶塞して通るべき處なし。天皇之れを惡み給ふ。此夜天皇夢み給はく天神ありて曰く、天香山の杜の中の土を取り天の平瓮八十枚及び嚴釜を造りて天神地祇を祭らば虜自ら平伏せんと。天皇即ち椎根津彦及び弟猪をして老人老嫗の貌を爲して敵地を通過して天香山の嶺の土を取らしめ給ふ。

然るに礧城の邑に八十梟帥あり又高尾張の邑或は葛城に赤銅の八十梟帥あり。此類皆天皇に反抗せんとす。されど兩人安全に是等敵地を通過して往復せしかば天皇即ち其土を取つて祭具を造り丹生の川上に陟りて

第一章 神武天皇の天業恢弘——ラッレニス族の希臘歸來 四七〇

香山—チャムス

高尾張—オハリ

諸神を祭り給へり。天皇又た丹生川の五百津眞賢木を抜にして以つて諸神を祭り給へり。

此に吾人は此記事中に論せざる可からざる地名は香山なり礧城の邑なり高尾張の邑なり丹生川なりと爲す。是等の地名は日本地理に著ては決して能く説明し得べきに非ざるなり。

香山(チャムス山)——かの香山は敵地を通過せざれば到り能はざる位置なるは日本紀の言へる所。然りイウリタネスなる礧城を過ぎて西に當りてチャムス(Chyama)山あり是れ香山なり。何となればチャムスには希臘語「橋」を語幹とせる名稱にして「橋」を意味す、橋は香の木にして、橋を香の木の實と謂ふ乃ち此上の香山たるや疑ふ可きなし。此山は皇軍の陣地より敵地を通過せざれば至る能はざるなり。其通過すべきは高尾張の地と礧城の邑となり。

高尾張(オハリ山)——今若し皇軍の陣地たるオタ方面より前記香山に至るの途を案する時は高尾張の位置を見當するを得べきなり。然り前記イ

第二章 神武天皇の天業恢弘——ラッレニス族の希臘歸來 四七一

磯城の邑—アヘ  
ランチア

丹生川—ダフ  
ヌス川

ウリタネスの北方に當つてラハリ(Coahale)の地名あり。是れ高尾張にして「高」とは蓋高地を意味せるものなる可し。或本に葛城邑と爲せるは、此地ドロピア(Dopia)の境介に接し、ドロピアは葛城たればなり(後に論ず)

磯城の邑—アヘランチア——是れ前に説明せし所にして、アヘランチアは「無限延張」を意味し、「イウリタネス」と同語たり、是れ磯城たるなり。

故に見よ、オタ方面より前記二地を通過して、此に始めて香山即ちチャムス山に到るを得べく、余の考證の詳細明確を證明せりと謂ふ可し。

丹生川(ダフヌス川)——次に丹生川とは何れの川なるかを述べざる可からず。

其天皇が丹生川の上に陟り給ひしに見れば、此川上は本營地に近かるべきは當然なり。余は是れオタより西南に流るゝダフヌス川なりと爲す。ダフヌス(Dafnus)とは月桂樹を意味す。是れ神聖木即ちカウカウ木なり。故に「丹生川上なる五百津眞賢木を抜にして」の語あり。是れ「丹生」と「眞賢木」と「ダフヌス」との関係あり、又た其同一なるを示めすものなり。

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラケレン—ス族の希羅歸來 四七二

(十一)伊那佐  
及び磯城方  
面の戦闘  
イナス及び  
イウリタネ  
ス

國見丘—パン  
アイトリウ  
ム

天歴の神

### 十一 伊那佐及び磯城方面の戦闘

イナス及びイウリタネス

國見丘の八十梟帥(パンアイトリウ)——天皇兵を勸へて先づ八十梟帥を國見丘に撃ちて之を破り、之を斬り給ふ。國見丘とはパンアイトリウム山なるは前既に之を説けり。

忍坂(ボムボム)——然りと雖尚ほ餘黨の残れるあり、爲めに大久米命をして「大室」を忍坂(或は大坂)に作らしめ、盛に宴饗を設け、計略を以つて虜を殺して復讐類なからしめたり。然らば忍坂とは何處なる可き。是れアイトリアとイナスとの國境なるオタ山の坂道なる可し。此地にボミウスなる地あり、是れ「大室」を意味せるもの、如し。何となれば是れ「深き客室の音響」を意味せる *Bomizo* より來れる名稱にして、「大室」の語は最も善く當れるを以つて之を知るなり。

天歴の神——次に皇軍磯城を攻めんとして先づ使者を遣はして説諭

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラケレン—ス族の希羅歸來 四七三



伊那佐及び宇加比の地—イナス及びアグライ

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラッレ—ス族の希羅歸來 四七四  
す。弟磯城容を改めて曰く「臣聽く天歷の神至ますと聞き且夕に畏懼せり」と直に皇軍に來る。こゝに天歷の神の語あり、是れ古來難解誤解の語なりと雖實は希臘語「アマホス」なる可し。「アマホス」とは「無戰」にして「戰はずして勝ち戰へば敵す可からず」との威烈を意味せる言語なり。弟磯城此く承順せりと雖、兄磯城愚謀を守りて承伏せず、是に於て椎根津彦の計を用ひ、先づ女軍を遣はして忍坂道よりせば、賊兵之れを見て大兵已に至ると爲し、力を畢して相待つ、是に於て男軍の勁卒を以つて直に墨坂を指し、宇陀川吉野川の上流の名かの水を取り、其炭火に灌ぎ、倏忽の間に其不意に出で、後より挾撃して、其鼻帥兄磯城等を斬る。

伊那佐山及び宇加比の地—イナス及びアグライ—是より前、皇軍攻むれば必ず取り、戰へば必ず勝てりと雖、士卒疲勞せざるに非ず、故に聊か御謠を作りて將卒の心を慰め給ふ、御歌に曰く—

「楯並めて 伊那佐の山の 木の間よも  
いゆきまもらひ 戰へば 吾はや飢ぬ。」

日本地理にては説明し得られず

「しまつとり 宇加比が徒 今救に來ね。」  
と。既に忍坂墨坂等の地理は明瞭となれり。次に説明すべきは「楯並めて」の御謠中なる伊那佐の山及び宇加比が徒の地理なりとす。伊那佐—とはアイトリアの東部オタ(菟田)の北部なるイニアネース或はイニアニア(Ehines, Aehinai)にして、是れイニアス(Aenias=Aenne)の名に出でしなり。「伊那佐」とは「イニアス」の縮り「イナス」となり、又「語尾」サとなりしなり。「宇加比が徒」の地—は磯城イウリクテス(の北方なるアグライ(Agrai)の地なる可し。即ち「ア」音の變化と、「エ」音の無聲とに由りて直にウガイ(宇加比)と爲る可ければなり。

今此地方に於ける戦争を大觀せば、神武天皇は大田山或は烏山或は高倉山を本據と爲し、北は伊那佐方面より忍坂の大室道に出で、南は直ちに墨坂のテラムム方面に進み、腹背挾撃を行ひ給ひしものと謂ふ可し。

以上の諸戦争はアイトリア、吉野(ヨエヌス)、宇陀(オータ)、伊那佐(イニアス)及びイウリクテス(磯城等)に於ける戦争にして、皇軍未だ大和(テッサリア)に討入

十二倭進入  
甘美眞手命  
の歸順  
テッサリア

第一章 神武天皇の天業恢弘一ヘーラックレーヌ族の希臘歸來 四七六

らざるものなり。是等の戦略及び地理等は、現日本の地理及び地圖等をも以つてしては決して説明し得べからざるなり。是れ又た一方には此事變は日本に有りしに非ずして、希臘に於ける事變なるを證明せるものと謂ふ可し。吾等是より皇軍に従つて始めて大和に入らんとす。然りと雖此に謂ふ所の大和とは、テッサリアの事たるなり。

茲に尙ほ一言し置くべきことは、神武天皇は自ら楯並めて戰場に勇戦し、飢え給ひしこと有ること、女子亦從軍して、所謂女軍なるものありしこと爲す。

十二 倭進入、甘美眞手命の歸順——

テッサリア

テッサリア方面磯城は殆ど平定せり。皇軍是より北轉して倭に入り長髓彦を撃たんとす。此に所謂倭とは、テッサリアを謂ふなり。皇軍連戦勝つこと能はず。時に天陰りて雨氷る。乃ち金色の靈鷲飛び來りて皇弓の弭

長髓彦—ナルタ  
キウス  
地二個の長髓彦の  
「長髓」の語原

に止れり。其瑞光輝照流電の如し。是より長髓彦の軍卒皆迷眩して復た力戰せず。長髓彦は是れ邑の本の號なり。因つて以つて人名となす。皇軍の瑞端を得るに及びて時人瑞の邑と號く、今鳥見と云ふは是れ訛れるなり。

長髓彦(ナルタキウス)——長髓彦は邑名に由れる名なり。然らば其邑は何處ぞ。曰くテッサリア南部、オートリ山北麓なるナルタキウス(Nathainus)の地即ち是れなり。吾人は前きに、皇師を孔舍衛坂に遊ざりたる長髓彦と、今此に出現せる長髓彦との希臘名稱の異なるを見る者なり。前者はアラキントスにして、後者はナルタキウスなり。然りと雖其實は一たるなり。何となればアラキントスは前に説けるが如くアポロンの別名にして、アポロンは一丈二尺彦即ち Dodeca Schoenus なり。其の一丈二尺は「長き」を示めし Schoenus なる語は語尾 Schoene と變じて、「ヌコイネ」「スタネ」「シューネ」「シネ」(髓)等の發音範圍を有して其意味「竹類」を謂ふものなり。此くて前の孔舍衛のアラキントスは素より長髓彦たるを失はざるなり。

又此ナルタキウスなる語も、語原は *καλαμίσκος* にして竹類を意味して、前述シ  
ネ(髓)と同意義の別語なるが故に、今此ナルタキウスは之を、シニネ(即ち髓)と譯  
して毫も不可なく。

*Selouie* (髓) = *Arceuthios* = *Apollo*  
*Narhacius*

兩地名は、シニネなる語を媒介して之を合一せしむるを得るなり。

意ふにアラキントスの長髓彦の反抗は、其名の山地の人民の反抗を示め  
し、今此ナルタキウスの長髓彦の反抗も、亦此地の名を負へる人民の反抗を  
意味せるものにして、國典は之を同一人の如く言へりと雖、必ずしも同一人  
に非ずして、只其土地の名稱を負へるより此稱あるものゝ如し。然りと雖  
眞の強力なる長髓彦は、今此ナルタキウスの夫れたるなり。

玳の邑(コロネア)——こゝに玳の瑞ありて其邑を玳の邑と謂ふと。是  
れ「玳」を意味せる「コロネア」(Conna)の地を謂へるものなり。  
「玳」に就ての疑問(オートリ山)——玳の邑はコロネアにして、實地之れ有

玳の邑—コロ  
ネア

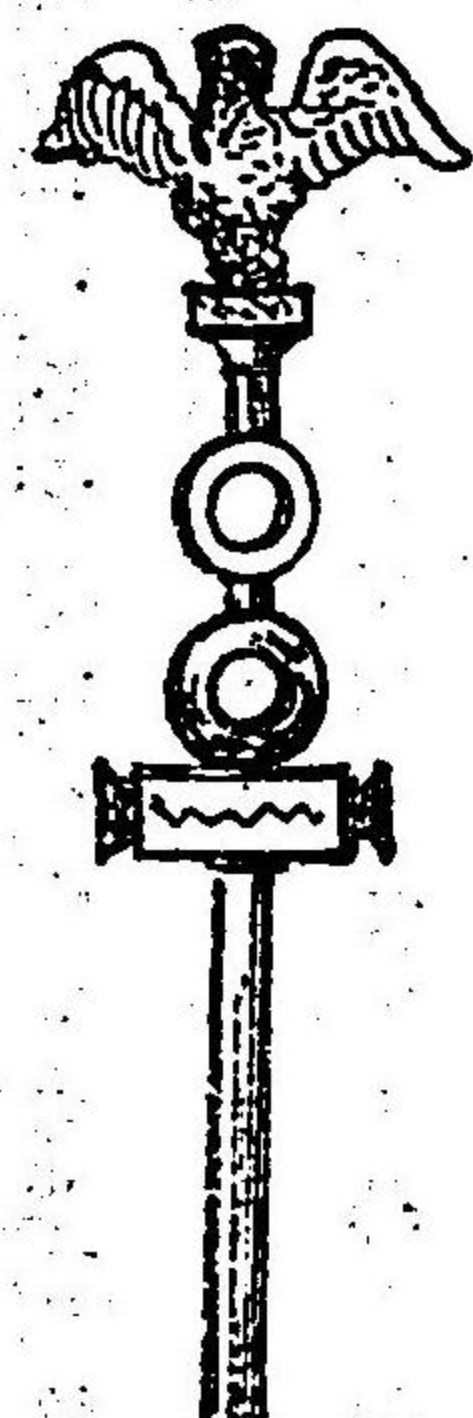
「玳」に就ての疑  
問(オートリ山)

鷲と鷹

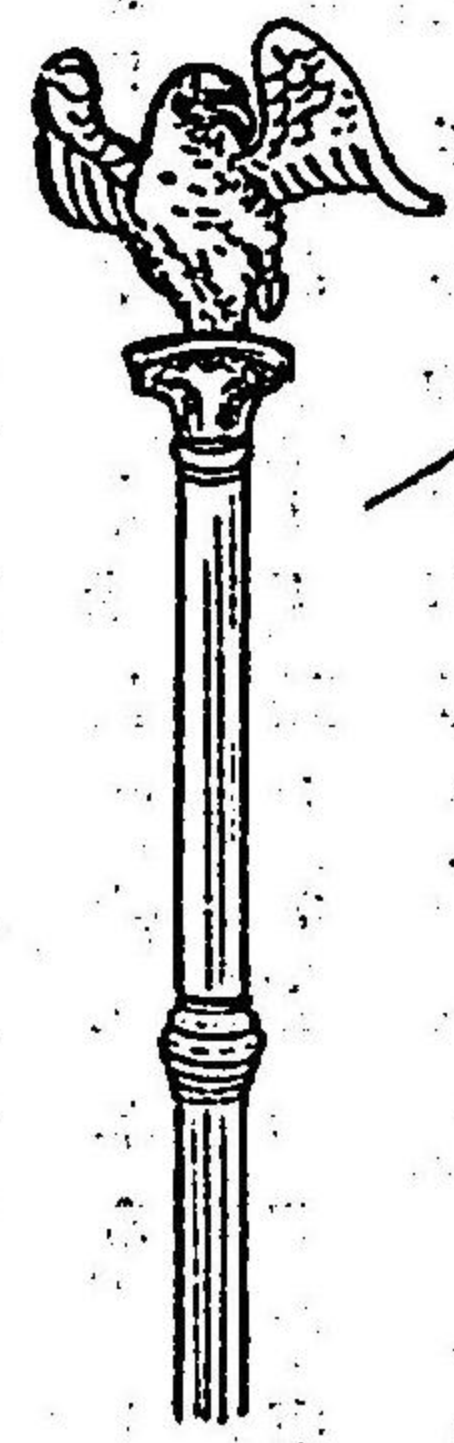
りと、雖「金色の靈鷲」なるものは、果して今日所謂鷲なるか。是れ從來多少  
疑問となれる所なりと雖、未た何人も明解を與へざるなり。余は是れ鷲に  
非ずして、鷲或は鷹を謂へるものと爲す。是れに就ては又希臘神話を參考  
するを要するなり。希臘神話に在つては、此地のオートリ山は神話上の名  
山にして、チタノス(タイタン)神族の神山なり。オートリ山或はヒエラッコス  
山(Ochys, Hiens)の名稱は、日本語大鳥即ち鷲或は鷹を意味する語にして、鷲  
の羅典語は「アキラ」(Aquila)にして日光の矢を運び送る者なりと爲す。是れ  
日本語「明」なり「見」なり。(西洋語原學者等「アキラ」の意味を解せずして霧なり、  
暗黒なり等の愚説を爲し其等の語は別語原に屬せるを知らず可笑。然り  
「アキラ」なる鳥は日光を代表せるなり。是れ日本書紀が「金色の靈鷲」と謂ひ  
又た「其鷲光輝煜て、狀流電の如し、長髓彦の軍卒迷眩す」との言に應せりと謂  
ふ可し。

若し夫れ金鷲は鷲に非ずして鷹なり、鷲なりとせば、鷲の邑或は鳥見なる  
ものは實は金鷲の瑞の地に非ずして、實は是れ長髓邑附近の長髓彦の別名

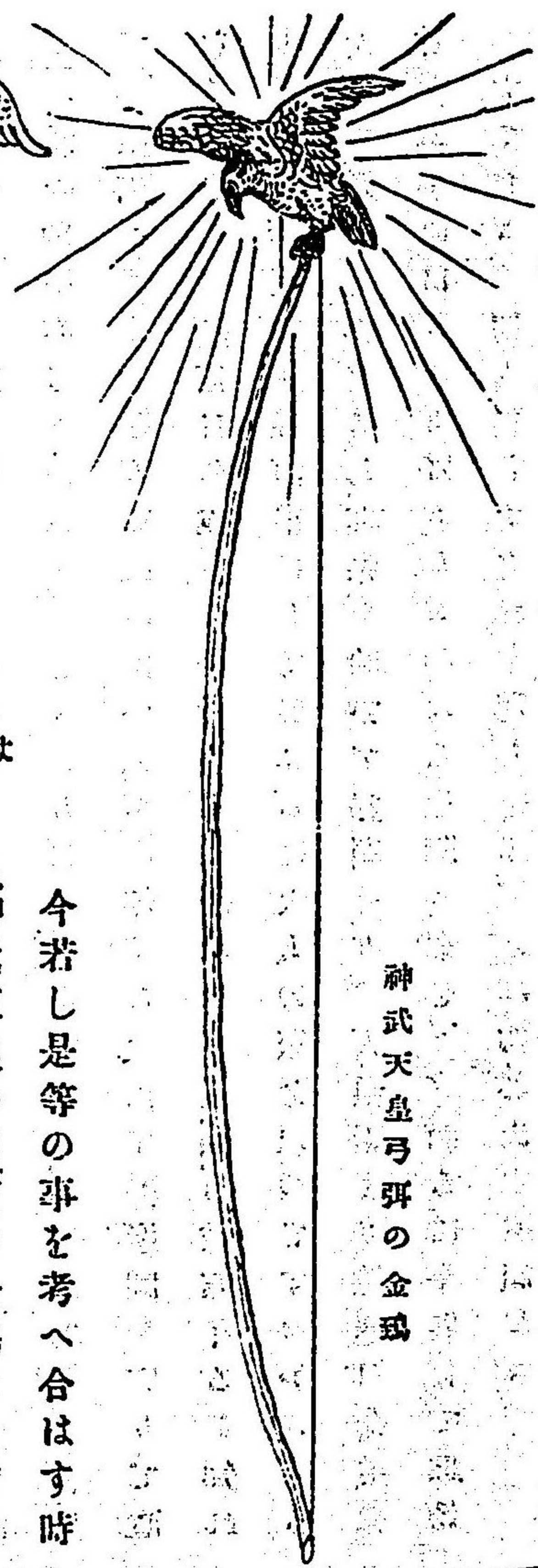
甘美真手命の歸順



羅馬の軍旗



ゼウス神の杖



神武天皇弓弭の金瓊

今若し是等の事を考へ合はす時は、神武天皇の弓弭の金瓊なるものは、亦是鷲或は鷹なるなからんや。若し夫れ然りとせば、此後皇祖天神を祭り給はんとして、靈時を立て給ひし鳥見の山中とは、又た前記オリ山なりと謂ふべきか。甘美真手命の歸順——昔に孔舎

第一章 神武天皇の天業弘恢——トウクレンス族の希臘歸來 四八一

羅馬の軍旗とゼウスの杖と弓弭

羅馬と日本と

第一章 神武天皇の天業弘恢——トウクレンス族の希臘歸來 四八〇

鳥見彦の名稱の出所たる一邑と爲し、真正の靈瑞地はオリトリ山と爲さる可からざるなり。何となればオリトリ山は大鳥山にして、鷲山たり、又た別名神聖を意味せる Hionus 即ち鷹山たればなり。

されは日本書紀の光暉的記事と、鷲鷹等の語原關係との綜合より考ふる時は、金瓊の瑞は無意味のコローネアよりも、オリトリ山寧ろ其地なるが如し。

羅馬の軍旗、ゼウスの杖、弓弭の靈鷲——比較は物の意義を明瞭にす。吾伊邪那岐の神たる大神ゼウスは光明の神、雷電の神なり。而して其使鳥は鷲にして、日光の矢を握れる姿を以つて之を美術に表はし、又たゼウスの御杖には頭に鷲或は鷹の裝飾を附す。

羅馬帝國はイナイ命(Aeneas)神武天皇の御兄稻水と同一人の創建なりとは、詩人ギルギリウスの言ふ所、吾國典の謂ふ所の新羅の祖なりとは、是れ所謂なり(後に論ず)。此國の旗章は鷲なり。亦以つて吾れと彼れとの民族關係を知るべし。

長髓彦の主張

第一章 神武天皇の天業弘恢一ヘ一ラケレニス族の希願歸來 四八二

衛の戦に、五瀬命矢に中りて薨じ給ふや、天皇之れを衞みて、常に憤懣を懐き給ひ、此後に至りて、意に窮誅せんと欲し給へり。時に長髓彦行人を遣はして、天皇に言して曰く、「嘗て天神の御子あり、天の磐船に乗りて天より降ります、號けて櫛玉饒速日命と曰ふ。是れ吾妹三炊屋媛、亦の名は長髓媛、亦の名は鳥見屋媛を娶りて、遂に兒息あり、甘美真手命と曰ふ。故に吾れ饒速日命を以つて君と爲して仕へ奉る。夫れ天神の御子豈兩種あらんや。奈何んぞ天神の御子と稱して人の地を奪ふや。吾心未だ信と爲さず」と。天皇曰く、「天神の御子亦多きのみ」と。こゝに互に表物を交換し、長髓彦其天表を見、益、蹠踏を懐くと雖、凶器已に構へ其勢中休するを得ず、猶迷圖を守りて改むる意なし。饒速日命、或は其子甘美真手命、本より天神の勲感なるを知れり、且つ長髓彦の稟性復很にして、教ふるに天人の際を以つてすべからざるを見て、乃ち之れを殺し、其衆を帥ゐて歸順せり。天皇素より饒速日命、或は甘美真手命は天より降りしものなるを聞きませり。而るに今果して忠効を立てたり。則ち褒して之れを寵し給ふ。之れ物部氏の遠祖なり。

甘美真手の地

神武天皇の正理

甘美真手の地、メリテ——今ま此に甘美真手命の名を考ふるに、又た此の附近の地名となりて存せるもの、如し。「甘美は尊稱、*Amaterasu*なり、真手とはオートリ山の北方、*Nelimo*なる地是れなる如し。何となれば、*Nelimo*は又た *Nelimo* となれる語にして、例に由りて「音を無聲にする時は、マテ、真手たればなり。意義は、生々勃興」にして、第五節速吸之門の「マルタ」と同語なり。

神武天皇の正理——こゝに、饒速日命、長髓彦の主張と神武天皇との位置及び關係を考ふるに、饒速日命は神武天皇の曾祖父、邇邇尊の兄弟にして、其天降史の相混交せるは既に論せし處なり。されば神武天皇の大和に進入し給ひし時は、素より饒速日命の時代に非ずして、其より二三代の後ならざる可からざるが故に、吾人が其等人名を扱ふには、こは是れ其等の人々の後裔を謂へるものと見做すべきが如し。

又若し饒速日命と邇邇尊命との史傳混交し、兩者明瞭に判別すべからず爲めに、兩人同一物なりと假定し、長髓彦の女三炊屋姫は邇邇尊命に由て御子生み給ひしとするも、長髓彦の奉する系統たる甘美真手命は正流に非ず

舊地恢復

して、木花咲耶姫に生れまし、御子彦火々出見命は正統に坐します理由ありしものゝ如し。史書何等此事を言はずと雖、吾人は其如く判するの外なく、何れも天神の御子なるや言を要せずと雖、其正嫡と然らざるとは自ら之れ有るを思はざる可からず。始め邇々藝命、天照大御神の勅を奉じて豊草原テッサリアに降り給ひしも、彦火々出見命及び鶺鴒草葺不合命等は阿弗利加に移り給ひ其地に崩御し、神武天皇及び諸兄は又た其地に成長し給ひしものゝ如く、國都は豊草原より遷て西州に在りしと謂ふ可し。意ふに是れ「是時速鴻荒に屬し、時草昧に鍾れり、故に蒙ふして以つて正を養ひ、此西偏を治らす」との勅語に當れるものと謂ふ可く、又た「遼遠の地猶未だ王澤に霑はず、遂に邑に君あり、村に長あり、各自ら疆を分ち相凌躐」せるは豊草原の状態たりしなり。

是を以つて皇化を其等の地に及ぼさんが爲めに、神武天皇の東遷ありしなり。故に天皇の西偏日向の吾平會議に曰く「昔我天神高産巢日命、大日靈命、此豊草原の瑞穂國を擧げて我天祖彦火能邇々藝命に授け給へり。是に

第一章 神武天皇の天業恢弘一ヘーラクレース族の希臘歸來 四八四

彦火能邇々藝命天降を開き、雲路を披けて仙躡を駈りて以つて戻します」と。神武天皇は邇々藝命の天神に授かり給ひし國を再び治ろし召さんとするにあり。而して其豊草原はテッサリアなるは既に論せし所、邇々藝命の天降も亦此地にして、邇々藝命は西偏の地に天降まし、には非るなり。神武天皇は即ち曾祖父の地を回復するにありしのみ。而して此に所謂「此豊草原とは實はテッサリアにして、」此の字は實は無知の譌入なり。日本書紀の論者之れを知らざりしか、或は知りて何等かの政策の爲めに、此事を暗昧にし、今天皇の進入し給ひし倭の地に高千穂あり、是れオトリ山たり、應たり、驚たり神聖地たることを含蓄せしめんとして、或は「金色の靈鷲」を持ち來りしものゝ如く思はるゝなり。

之を要するに神武天皇も、甘美真手系統も何れも天神の御子なりと雖、正嫡と否とは之れあるなり。然るに長髓彦天人の際の理を悟らず、以つて皇軍に反抗せしものゝ如し。饒速日命(或は其子甘美真手命)は其理を知り、必ず歸順し、忠効を立つべきは天皇の豫期し給ひし所、果して忠効を立つ天皇

第一章 神武天皇の天業恢弘一ヘーラクレース族の希臘歸來 四八五

の東征は決して自ら天神の子なりと稱して人の土地を奪ふ者に非ず、只だ天祖の地に於て皇運を再興し、天業を恢弘し給はんことにありしのみ。

十三 殘賊の誅滅—イナス及びピア方面

### 十三 殘賊の誅滅—イナス及びピア方面

最も有力なる長髓彦族は歸順せり。然りと雖尙ほ殘賊ありて存す。乃ち層宮の縣の波多の丘岬に新城戸畔なるものあり、又和珥の坂本に居勢の祝なるものあり、隣見の長柄の丘岬に猪祝なるものあり、此三處の土蜘蛛並に其勇力を持みて背て來延せず。天皇偏將を遣はして皆之れを誅し給ふ。層宮の波多(スベルピアのヒバタ)——是等の地は意ふに皆ラッナリア南境外の土賊にして、層宮の縣の波多の丘岬とは Spetelia の Hypata なる可し。何となれば「スベルピア」の語尾を簡略に發音する時は「スベルフ」となり、此内より例の「フ」音を去る時は「スベフ」となり、「ベフ」は「フ」となり遂に「スフ」となり、「フ」層宮となる可く、又波多とは「ヒバタ」の「ヒ」の一音に合する時は直に「バ

層宮の波多 波多の丘岬

葛城の高尾張

葛の網

十四 橿原奠都—クランノン  
和珥の嶺原の宮

タ」となり「ハタ(波多)」となる可ければなり。和珥坂及び隣見等は未だ之を詳にせず。葛城別名高尾張(ドロビア)——又高尾張の邑に土蜘蛛あり、皇軍葛の網を結びて掩襲して之れを殺す。因つて其邑を葛城と謂ふと。高尾張とは第十節に説明せし所の Oecalia の地なり。皇軍葛の網を結びて土蜘蛛を掩殺せりとの事變は Diopia の地名に残れるなり。何となれば「ドロビア」とは *diop* と *ria* との二語より成れる地名にして、*diop* とは「策略」(網網等)を意味し、*ria* とは「捕捉」(掩襲)を意味する希臘語なればなり。然らば葛城とはドロビアに當れるを知るなり。且つ其位置を考ふるに其ドロビアの南部にヲハリ(高尾張)の地あるは又た之を説明せりと謂ふ可し。

### 十四 橿原奠都—クランノン

中國は略平定せり。天皇こゝに敵傍山の東南橿原の地を以つて、蓋國の境區なりとし、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲さんとして、帝宅

榎原クランノ

を經始し正妃を立て即位の式を行ひ給へり。之を日本の紀元と爲す。天皇尊稱して「欽傍の榎原に底つ磐根に宮柱太立て高天原に轉風岐時りて始馭天下之天皇」と曰ひ神大和磐余彦火々出見天皇と曰ふ。「希臘日本」創建の祖なり。

榎原(クランノ)——欽傍の榎原とは、テッサリアの中央部「國の塊區」に *Chionon* なる地名ある即ち是れなり。 *quercus* なる樹木の名稱より出てしものなる可く此樹の羅典名は *Quercus* にして角の如く堅硬にして兜を作り又た投箭及び槍の柄を作るに用ゆる木即ち榎の木なり。兜の羅典語は *Cassida* 及び *Cassius* (*Cassida, Cassis*) にして「カシ」(*Cassid*) を以つて語幹と爲す。榎の樹の「カシ」は之と同語にして地圖は希臘語名を以つてせりと雖我は羅典系の語を以つて之を呼べるの差異あるのみ其榎の地即榎原なるや同一たるなり。

欽火エニビ

欽火(エニビ)——テッサリア全國に蔓延せるペーネウス(*Peneus*) 河の上流の一派をエニビウスと謂ふ。欽火山は此河名に出でしもの、如し。かのエ

欽火の語原

ニビウスの語尾 *ウス* は附加語尾なるが故に此河即ち *エニビ* 河なり。其音の「ウ」に轉じ他の音に小變化ある時は直に之れ *ウネビ* (欽火たるのみ)。「ウネビ」とは雲かゝるを意味せる希臘語 *νεβη* (*nebe*) に出でし名稱にして天皇の皇后の御歌に「欽火山は雲とむ」とあるは又其意味を表はせるものなり。かの希臘地圖上の *Enpeis* は前記希臘語の訛れる綴字たるなり。(萬葉の

チタミス山

此河は海神ポセイドンに關係を有し(オチテラセウス十一卷三三五行)又た神武天皇は母系に於て海神關係を有じ欽火山は此河名に取りしものならんか。此山の位置たるや前記クランノなる榎原の西北チタミス(*Titamis*) 山に當る可きか。是れ *ウネビ* 河の環流せる山なるが故に爾か名付けしものならん。希臘語此山を *チタミス* と稱するの理由は意ふに古傳説に

チタン族

基けるチタン(*Titan*) 神族に關係ある山を意味し神武天皇がウラノス及びガヤの神系を引けるより或はチタン神族の稱ありて何人か後代此山に命するに「チタミス」の名稱を以つてせしもの、如し。



榛原ハルサロ

十五 腋上の  
ドエビ  
秋津洲の  
腋上の  
腋上の

第二章 神武天皇の天業恢弘ヘーラケレース族の希臘歸來 四九〇

榛原(ハルサロ)——天皇が皇祖天神を効祀て、靈崎を立て給ひし鳥見の山中とは前に説明せし鴉邑の事なる可く、又此地をよつ小野榛原下つ小野榛原と謂ふ。是れナルタキウス山の北麓ハルサリア(Halsaria)なり。其結成名稱の後半部「サロ」は又た「サロ」となりて「ハルハリア」となり「ハルサロ」となり、又た「ハルハラ」榛原となるなり。  
然りと雖前にも論せし如く金鷄の瑞は鳥見長髓邑即ちコロネア或はナルタキウス山に非ずしてオートリ山なるが如く、又此に謂へる所の鳥見の邑も或は「トリ」の邑の誤にして、オートリ山を意味せるには非ざるか、疑問と爲して後日の研究に待たん。然りと雖小野の榛原のハルサロスなるや、吾人の判断誤らざるが如し。

### 十五 腋上の喙の丘——秋津洲の意

義——エビルスのドーディーナ

腋上の喙間の丘——天皇巡幸して腋上(腋の上)に非ず、ソキガミなるが如

喙間の丘トリス山

腋上ドーディーナ  
「腋上の語原」  
「アイキウム」  
(山羊)

し。の喙間の丘に登りて國狀を廻望して曰く、新かな國を獲つ、内木綿の真進國と雖猶蜻蛉の臂帖せるが如し。是に由つて秋津洲の號ありと。  
腋上——とはテッサリアの西なるエペイロス國の中央部なるドーディーナ(Dodona)の所在地或はアタマニア(Atamania)を謂へるものゝ如し。ドーディーナは大神ゼウス(大物主神)の別名にして、此神又た「アイキウム」(山羊)と謂ひ、之を地名とせば「アイキウム」(Aikium)となるべし。其ア音は「ワ」に轉訛し、全體の語勢上「はき」となり、ギアムは「ガミ」となるは自然にして、吾人はこゝに「ソキガミ」の語を得べし。是れドーディーナの別名と見るべし。其余が之を「山羊」を意味せる「アイキウム」なる語に出でしと爲すは、又此地に「Heliopis」語原「山」山羊或は鹿なる語あるに由りても之れを是認するを得べきなり。  
喙間の丘——ゼウス即大物主神は、又別名を「オキム」(全視)目の神と謂ふ。「オキム」は「オキマ」と發音し、又訛りて「キマ」と發音するを得べく、是れ即ち「喙間」の語に當れる如し。意ふに此丘はドーディーナ島の西方トリス山(Tomaris)山を謂へるものならんか、是れ亦ゼウスの神性を含める雷霆的意

第一章 神武天皇の天業恢弘ヘーラケレース族の希臘歸來 四九一

内木綿の真進國

内木綿—山羊或は鹿

味ある山なり。  
 天皇の此國の廻望は只だドードーナ附近を謂へるものにして決して吾國全體或は倭(ヤマト)を謂へるものに非るなり。  
 内木綿の真進國——の解釋に至つては、古來全く牽強附會の外一も有るなく。大抵木綿の如く狭く長きを意味すと謂ふにあるが如しと雖、これ亦發音支那文字に欺かれ誤られたる解釋たるのみ。余は一旦此地の鹿或は山羊關係の地名なるを發見したる以上は、尙ほ其思想上の系統をたどりて解釋の歩を進むることを得べきなり。  
 余は謂ふ、内木綿とは發音の假字にして何等支那文字の意味あるなく、前述(股上)の山羊を意味せるに考へ、此「ツツエー」なる語のアリアン語 *Antel* に當り、其「ブ」音は「ウ」に轉じ、「ツツチャ」より「ツツエー」となりしものと爲す。是れ山羊或は鹿を意味し、又た其れを殺す者を意味すと雖、尙ほ山羊或は鹿を意味せりと解し得べし。是れ前に論せし所の「鹿の靈」と同語原にして、鹿取の神に關係せる語たり、又其鹿に關せる語なるを知る。

第二章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラツレニス族の希臘歸來 四九二

真進國—神聖

希臘神話の證明  
アタマスの鹿取神話

山羊奉獻國

真進國——とは何等從來の解釋の如き、狭きの意味あるに非ずして、神聖(真進)なることを意味せる羅典語 *Sacri Sacri* 、「犧牲」の語原の「r」音無聲となりて「サキ」となり、是れに「マ」音を接頭して「マサキ」となりしもの、如し。故に「内木綿の真進國」とは鹿の神聖なる國、或は鹿を神に奉獻する國を意味する如し。  
 希臘神話の證明——余の前述の解釋は極めて正當なるが如し。余の此く説明せる間に、突然余の思想中に一の光明は閃めきたり。是れアタマス (Atamas) 家に關する希臘神話の鹿取物語即ち金羊神話是れなり。此神話は第一卷神話比較の部に述べ置きたれば、此に之を略すと雖、アタマスの國は、今此に論し居る所の股上の曠間の所在國にして、此にアタマニア (Atamania) の地名あるなり。  
 此國は大神ゼウスに山羊鹿を奉獻する國にして、鹿或は山羊は神聖たり、又た鹿取り神話—金羊神話ある所以なり。されば此神話の與ふる光明を以つて、前述「内木綿の真進國」の解釋を照らす時は、余の言の正當なるを判

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラツレニス族の希臘歸來 四九三

蜻蛉の臂咄

比較言語上より説明す

知すべし。

此くて内木綿の真進國の意味を明かにしたる希臘神話は、尙ほ又た夫いで来る所の蜻蛉の臂咄なる語の意味に對しても亦其光明を反射すべきが如し。

蜻蛉の臂咄——とは從來の解釋は蜻蛉交尾して其尾を銜みて輪狀を爲せるを謂ふことなりとなせりと雖「臂咄」の果して其如き意味あるかは毫も言語の使用上に例證あるなし。余は前述比較神話に據りて其言語の意義を尋ぬるに尙ほ是れ鹿或は山羊に關せる語なるを感ずる者なり。「アギツ」の發音に對して「蜻蛉」なる文字を當てありと雖果して是れ強なる蜻蛉を意味せるか或は後人の誤解上別語原に屬する類似音の有意の文字を適用せしにはあらざるか。余は或は其然らんことを想ふ者なり。

余は此に所謂「猶ほアギツ」の臂咄の如しとは前句「内木綿の真進國」の換言句或は説明句なりと見るものなり。何となれば蜻蛉なる蟲は日本にも希臘にも神話にも美術にも何等太古に傳はるものなく殆ど無意味のものた

「アギツ」

「臂咄」

ればなり。(雄略天皇の蜻蛉の歌は蜻蛉野に關する御歌にして、今此地とは何等關係なき他國たり且つ彼の歌は後人の作たるのみ)

余は此アギツを以つて「ウツユト」に對する翻譯語となし之を「山羊」を意味せる *Agrius* (アギツ) なりと爲す。「アギツ」は「アギツ」なり。意ふに神武天皇は此地を形容し給へるものにして其御言葉は多くは地名として存せるを前定して可なるが如し。故に見よ此地方をヘロロピア(Hallopi)と謂ふ是れ鹿或は山羊を意味せる *Agrius* に出でし語にして山羊は又た *Agrius* を謂ふなり。故に「内木綿」「ヘロロピア」「アギツ」は皆同一物の別名にして此地の「アギツ」秋津(山羊)たるを知るなり。

臂咄——は舊解釋が交尾して尾を銜む状態なりと爲せるは支那文字に誤られたるものにして實は只た發音の假字たるのみ。意ふに是れ希臘語「奉獻」を意味せる *agouze* (Agouze) の「アギツ」なり「アギツ」と轉せしものゝ如し。乃ち是れ内木綿の真進國の真進は「神聖」「奉獻」「犠牲」の語に對釋せる語なりと爲す所以なり。

「アキツ」は蜻蛉に非ず

秋津人種は希臘人種

されば内木綿の真進國と雖猶蜻蛉の臂帖の如しとの語は、換言せば内木綿(鹿)の真進(奉獻)國とは之を譯せば猶ほアキツ(山羊)のトナメ(奉獻)なりと言ふが如しと言ふにあるが如し。前者は羅典系の語たり、後者は希臘系の語たるの差あるのみ。是れドーディーナなる山羊を以つて符號と爲せる、ゼウス大神社此地に在ると、アタマス家の鹿取神話とに由りて之を判知するなり。耶蘇教の以つて神聖なりとせる「神の小羊」なる觀念は、實に此に起原せるなり。されば此に所謂「アキツ」とは決して蜻蛉には非る如し。

●秋津人種は希臘人種——尙ほ吾人の説明に一粟の重きを加ふることは秋津洲人種と希臘人種との關係論なりとす。余は日本人を以つて希臘人と同種族なりとの論を爲す者にして、日本人は秋津洲人種なりと稱し其語原は「アキツ」たり山羊たるなり。希臘人は廣くヘラス人種と稱し其の語原は「Σίον」たり、鹿或は山羊たるなり。されば兩人種は同一物を別名もて呼べる人種にして

秋津(アキツ)——日本人

秋津洲とアギプツ

(十六)日本(ヤマト)の種々の國號

浦安の國

鹿或は山羊人種……希臘(Σίον)——希臘人

同一人種たるを知るなり。

且つ希臘の太古は埃及方面よりの植民なりとは希臘人の認むる所に於て希臘と埃及とは關係淺からざる國なり。而して秋津なる語原は前述の如しとせば、後世其名稱を以つて歴史に現はるる國は埃及なりとす。是れ Aegyptus にして Aigis (山羊の國なり。諸曲等に秋津洲と訓せるは「アギプツ」の「プ」音を略せし稱呼にはあらざるか。日本の「安藝」は此「アギス」埃及の移寫名なり。

### 十六 日本(ヤマト)の種々の國號

日本の國號種々あり、伊邪那岐神此國を稱して浦安國、細戈千足國、磯輪上秀真國と謂ひ給へり。

●浦安國——從來の解釋は、盡く支那文字に捉へられたるものにして、其發

細戈千足の國

磯輪上秀眞の國

音の假字に意義を求めたり。大に誤れり。故に「浦安」を解して「ウラ」は「心なり」故に「心安き國なり」と爲す。當らざるが如し。日本はウラノス(天)の系統を引ける人種として、*Oyano*、或は *Oyano* を訛りて「ウラヤス」と謂ひしものゝ如し。即ち「天皇氏」或は「天より來りし者」を意味す。専ら阿弗利加西北部の稱なる如し。(鶴草草葺不合命の稱を参照せよ)

細戈千足の國——支那字は發音の假字なり、何等武器の充實を意味せるに非ず。日本は世界の太古國たり、又た海國なり(地中海岸にて)。「細戈」とは「倭等」を意味せる *Classie* (Classio) の「シ」音の「フ」となりて「クワシホヨ」と訛りし語なり。故に後世希臘羅典に關せる事實を *Classical* と呼ぶなり。「千足」とは希臘神話のヌバルタ王 *Nyctaxus* なる人名に表はるゝ語なるが如しと雖も、實は *nyctaxos* の訛れるものにして、他語「面足」(*Ojo-dugoso*) 即ち共同王を意味せる語なるが如し。千足(チンダレオス)の國は後世専ら希臘南半島のラニコニカ及びメッセニア國に配當せらる。

磯輪上秀眞の國——磯輪上は如何に讀むべきか古來不明にして「シワガム」

玉牆の内國

玉牆の内國

「シワノホル」「インワカミ」等の訓ありと雖、余は之を「海環」を意味せる英語の *Sea-girt* の「シアガン」(ト)と訓すべしと爲す。日本の海國なるに適せる意義なり。「秀眞」とは美麗秩序、秀眞世界等を意味せる所の *Kosmos* の「ホスマ」となりしものと爲す。専らホイニシア國の稱なり。

玉牆の内國——是れ大名持神の命名なり。舊解釋は「玉の如き牆を廻らせ其内の國」と云ふにありき。されども是れ支那文字に捉へられたる解釋なり。宜しく發音に改めて解釋すべし。意ふに是れ「海神國」を意味せる *Gauju-yang-oyo* の語尾の「ヨ」となり、*タマ*、*ガイキ*、となり、次に又た「*タマガキ*」と略されしものなるべく「玉」とは海神豊玉氏の「玉」なり、「*ガイキ*」とは海神の別名「地の支持者」「地の震搖者」を意味せる語なり。「内國」とは「舊國」を意味せる所の *Ostrya* の發音の假字にて、内なる國を意味せるに非ず。此 *Ostrya* なる語はホイニシアの *Alia*、希臘國名の *Athio* に當る語にして、要するに玉牆、内國とは「海神の舊き國」即ち別名「葦垣のふりぬる」國と同一意義なり。専ら埃及、イドム方面の稱に用ゐられ、又た希臘アツチカの稱ともなれり。

虚見日本の國

笑ふべきアイン語主義

第一章 神武天皇の天業恢弘——ヘーラクレース族の希臘歸來 五〇〇

虚見日本の國——饒速日命天の磐船に乗りて大虚を翔行して是郷を脱せり故に虚見日本の稱ありとは舊傳説にして、而も後代の俗語原家の附會たるのみ。若し夫れ大虚より脱すとせば却つて或は伏して見或は伏見の國と稱すべき筈なり。實は是れ日光過多を意味せる所の羅典語 *Solitaria* なる語にして、ソラニミツは正音にして、ソラミツは訛りなり。或はマケドニア及びトラケイ方面の稱なる如しと雖、又アビシニア、エチオピア方面に於ける日本の稱なりとも思はるゝなり。何となれば此方面は最も日光過多にして、熱國なればなり。

『ヤマト』——吾人は世界的大理想ある日本の國號ヤマトなる語を論せざる可からざるなり。舊解釋は曰く——山門なり、四方山にして山門より入る國なり。山跡なり、——山道に人の足跡ある義なり。山壺なり。矢的なり。家場所なり、人の住居する義なりと。兒戯に類せる語原説と謂ふ可し。チンパレーン氏一派のアイン學者は *Yamto* は「栗の樹もて圍る池の義なり」と爲せるに至つては抱腹絶倒。無學に加ふるに牽強附會と稱すべきのみ。

大救世主義

希臘語「ヤマト」

「ヤマト」と「大和」  
世界大和主義

み。日本人はアイン人に非ず、其後裔にも非ず。アイン語を以つて日本事物を説明せんとするは愚物の爲す所。近時素人學者往々之を爲す。其無學一笑に附すべきのみ。

日本人は「ヤマト」を「大和」と書す、是れ意味を傳へしものなり。大に人を和することなり。日本人は世界人類を以つて目的と爲し、神武天皇は六合を兼ね、八紘を掩ふを旨とし給ひ、天照大御神は天の下四方の國を安國と平けく治らし召さんを理想と爲し給ひ、崇神天皇は神人を司牧するは王者の任なりと詔り給ひ、實に天下人類の「和」と「安」とは日本の大使命なり。「和」を「ヤマト」と謂ひ、安を「イヤマト」と謂ふ、是れ同語にして希臘語「ヤマト」(Yamto) 是れなり。是れ人を救治し、平安を與ふるを意味し、日本の「大和」の文字は最も善く當れるなり。

若し「ヤマト」(ス)の意義を擴充する時は天下の救治なり、——救世なり。余は前數々耶蘇教の救世思想は日本に起原せりとし、本書一卷二卷諸所に之れを説きしは、以つて「大和」の希臘語「ヤマト」(ス)に當れるを證明せる者と謂ふ

第一章 神武天皇の天業恢弘——ヘーラクレース族の希臘歸來 五〇一

十七 舊約書中の「ヤマト」人種記事

創世紀第十章

「ヤマト」

可し。從來の語學者語原論者は無學に加ふるに無見識にして、此くの如き大着眼を有する能はず、無意義の言語を臆列して恬たり。殊にチェンバレン氏輩の如きは其無意義の甚じきものと謂ふ可し。苟も日本事物を研究せんと欲するものは、宜しく先づ國祖遠大の理想を了解し、其高所より全體を見て解釋に従事せざる可からず。

十七 舊約書中の「ヤマト」人種記事

「ヤマト」の語原既に明瞭を致せり。其語根は「ヤマト」(Yamat)にして、附加語尾「トス」(tos)及び「ノス」(nos)あり。之れに由りて「ヤマト」(Yamat)、「ヤマト」(Yamat)の語を生じ、又其「ヤマト」(Yamat)の「m」の「v」に轉じて語尾發音を略せるものは「ヤマト」(Yamat)となるなり。

舊約書創世紀第十章に人種起原を記載して、ヤベテ(八幡)の子にヤマトあり。

ヤマトの國

東方移遷地名  
耶馬臺

「ヤマト」の名

りと爲せるは、即ち「ヤマト」人種の事にして、聖書地理學者等は「ヤマト」の國は伊太利、希臘、トラケイ及び地中海の海島なりとし、吾人の研究と符合せるものあるは、又以つて余の立説の傍證と爲すに足り、又「ヤマト」人種の太古以來の大民族たるを證明するものなり。創世紀第十章は人種研究上參考の價値あるものとす。然るに日本の學者等顧る者なし、愚なりと謂ふ可し。

第一章 神武天皇の天業恢弘一ヘーラタレニス族の希臘歸來 五〇三

本(十八)尙ほ残  
埃及問題  
及及び  
ニア  
ア日

東征諸國記事地

別運動

前既に神武天皇東征の路順を論ずる時古事記と日本書紀とに大なる相違あるを謂ひ又た其相違の理由として兩者共に神武東征以外他の或者の他方面の遠征行程の混入あるを言ひ置きたり。乃ち番號を以つて(三)より(六)までと爲し、ものは是れなり。

余は其(三)筑紫の宇佐より(六)吉備の高島に至るまでの記事は希臘より埃及に至る間の記事たるを知り得たる者なり。

神武天皇は希臘テッサリアの欽火の榎原の宮に在せり。されば此遠征は神武天皇の御名と威靈とを奉戴せる或一團が希臘より埃及を經過し尙ほ東方に發展運動を爲せるものと爲し、以つて思想の統一を形成すること爲し置かん。何となれば神話と歴史との境界は嚴正に之を分割すること能はざるものなればなり。今此に謂ふ所の一運動は希臘高千穂に起るも

### 十八 尙ほ残れる問題—埃及及び

アビシニア日本

第一高千穂

宇佐の宮—タナ

「足一騰」の宮の

タナグラ

のとす。

高千穂——此高千穂は余の所謂第一高千穂にして希臘のオートリ山たり。饒速日命彦火能邇々藝命の神聖地なり。此地點より出發して筑紫の宇佐に至り給ふ。

筑紫宇佐(タナグラ)——筑紫とはアツクン(Athens)なり。宇佐とは宗像三女神を論ずるの章中の宇佐にして、アツチア北東部アソプス(Asopus)河は即ち宇佐川なり。

此地の宇佐都彦宇佐都姫宇佐河の上流に足一騰の宮を作りて大御饗献りき。「足一騰」とは宇佐即アソプス河の語原 *Asopos* (Asopus) に由てし名稱にして、足を一つ騰ることを意味せる語なり。故に此宮の宇佐即アソプス川の宮たるを知るなり。此河の上流にタナグラ(Tanagra)なる都市あり。是れ即ち其宮なり。何となればタナグラとは *Tana* と *gras* との合成名稱にして、「タナ」は「大」を意味せる語にして、大饗の「大」に當り、「アグラ」は「田野」を意味し、從つて其生産せる「食物」を意味し、「タナグラ」は大御饗の語に當ればなり。



岡の水門—チカ

安藝の埃ノ宮

埃ノ宮—ギゼー  
「ギゼー」の語原

且つ此地一帯をグライキ(Graiki)と稱す。是れ「キタロイ」族の別名にして神武天皇の出發地「モロ」の「アビラ」地方は「キタロイ」人種の國たるより従つて其人種に縁故あるより此に「グライキ」の名稱を留むるものゝ如し。是れ「希臘」と同語なり。此に留まり給ふこと一年。是れ「サロニクス」灣内なる「アイギナ」(Aegina)島の「ヲカ」(Oca)の港なり。留まれますこと一年。安藝の埃ノ宮「埃及ギゼー」——次に安藝の埃ノ宮に幸し給へり。此宮一名を多祁理宮と謂ふ。

前にも言へるが如く安藝とは埃及(Aegyptus)にして「Aegis」を以つて語幹と爲し其安藝たるを知るなり。埃ノ宮——とはギゼーなり。意ふに「ギゼー」(Gizeh)とは「Aegis」なる語の轉訛にして「化粧」を意味して「櫛けづり」美くし「若かくする」とを意味し、又た酒の力を意味して「奇しなる語」と同一語たるなり。化粧は美なり「可愛」なり。美の女神は「アフロデテー」にして別名可愛姫なり。酒又た「醜」なり、希臘語也。

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 五〇六

多祁理宮は埃宮  
の別名

宗像三女神

多紀理姫は半月  
の女神

「エー、ヨウ」の語之に當る。乃ち知る埃ノ宮は可愛宮にして、須佐之男命の章に安藝の可愛の河と謂へるは此地名に出でし河名たるなり。多祁理宮——古事記は埃ノ宮を多祁理宮と謂ひ、從來の解釋者は其同一なるか別名なるかを明かに爲し得ざりしなり。然りと雖、新研究を以つてする時は其同一地たるを知り得るなり。意ふに多祁理とは、宗像三女神の二たる多紀理姫の御名と同一にして、前きの埃ノ宮は宗像三女神中なる田寸津姫即ち「アフロデテー」女神にして、此に市寸鳥姫の御名は表はれ來らずと雖、三女神は殆ど三位一體的にして、同體不離と謂ふ可く、此女神も亦必ず共に此地附近に祭られ給へるなるべく、是等三女神を總稱して「エー」即ち「化粧」女神と爲し、之れを「ギゼー」と訛りて地名と爲せるものゝ如し。されば三女神は同體不離なりとせば可愛の宮と多祁理宮とは又た同一宮の別名なりと見て不可なき如し。多紀理姫は數々説ける如く希臘のアルテミス女神にして、半月を以つて記號と爲す。此「ギゼー」に「メン」ニスなる大都市ありて其の「メン」は月を意味

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 五〇七

アフロデテは  
満月の女神  
埃及的記標

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘーラクレース族の希臘歸來 五〇八

し可愛姫即ちアフロデテ—女神は鏡即ち満月を以つて記號となじ、又たゼ  
ウス神との關係上「牛」と化り給ひし事ありて、メンフィスの「トリス」は「ア  
(Ape)即ち牛を意味し「月」と牛とは、メンフィスの意味たるなり。故に埃及の記  
號は満月と半月とを併せたるもの<sup>☾</sup>を用ゆるなり。支那人亦埃及方  
面の歴史を傳へて極東支那の事なりと思ひ居れり。其帝舜が居りし媯汭  
とは埃及のギゼー(Gizeh)にして娥黃、女英とは前記二女神を謂ふものなり。  
故に娥黃とは月の女神嫦娥たり、女英とは「可愛」に冠するに「女」を以てして女  
英と謂ふと同一なるが如し(神道五部書の御鎮坐本記中の「桓娥」「昇女」參照)。  
ギゼーに三大三角塔あり、其第三なるはミケイリノス(Mycenae)の「ピラミッド」  
と言ふ。ミケイリノスとは神武天皇の御兄御毛入野命(又た御毛野)と同名  
にして吾國典は神武天皇即ち若御毛入野命此地に來給ひしと爲せるは、三角  
塔を介して、我に傳はる歴史と、彼れに傳はる歴史との一致を示めすものと  
謂ふべし。

ミケイリノスの  
三角塔  
ミケイリノスの  
若御毛入野命  
(神武)

「七年」と「六年」  
神話

古事記は神武天皇此地に七年坐しましきと爲す。ヘーラドトス等の歴  
史に據る時はミケイリノスは「六年間生存すべし」との神託ありしと爲す。  
「滞在」と「生存」との事は聊か異れりと雖、七年」と「六年」とは僅かに二年の差を以  
つて、又た何等か同一事件の別傳と見ざる可からざるが如し。  
比較研究複雑を極むと雖、又興味無限なり。然りと雖、今後の同志諸君の  
協力的大研究を樂しむと爲す。(御毛入野命に就ては尙ほ次章に論ず)  
吉備の高島宮(スエズ)—次に埃宮より遷り上幸して吉備の高島宮に八  
年坐しき。吉備とはケミ(Cami)の地にして、現在のスエズの地の西方海岸  
なるべしと雖、余は此地の局部詳細地圖を有せざるが故に其地點を明かに  
するを得ざるを悲しむ。されども其スエズ灣の小島なるは殆ど誤らざ  
るが如し。  
アピシニア日本—此遠征運動はスエズより出發して、海路アピシニア  
國に進入したるものゝ如し。余は此方面の詳細なる地圖を有せざるが故  
に明瞭に詳論することを得ずと雖、神武天皇が太后を立てんとして富登多

吉備の高島宮  
スエズ

大三輪の神の地

高佐士野

大久米の地

同人種の植民地

々良伊須を岐姫命(Anko-teridol-ko-kye)と得給ひ、此女神は大三輪の大物主神の女たり、又其始めて會見し給ひし地は高佐士野なるを考ふる時は、是れ決してテッサリア大和に非ずして、アビシニア地方たるを知るなり。何となれば前きに三大輪の大物主神はアビシニアに祭られあるは之を一言せるに由りて、此神の關係地は、又た専らアビシニアたり、又た高佐士野はテッサリアに之を發見せずと雖、アビシニア北部の西方に現地名タカ(Thak)古名タカクセ(Thokxuo)なる地あり、又た此女神を見出だし、大久米命の御名を負へるオ、クメの地は、Ankmeなるが如ければなり。

意ふに此一團の運動は神武天皇の御名を奉じて此地に同民族の日本國を建て、其希臘の地名を移し、神話を移し、宛もテッサリア大和の如く爲し、者の如し。然りと雖、前にも言へる如く、神話と歴史との境界、及び又た歴史と雖、其甚しき太古に至ては不明なるもの少なからざれば、尙ほ後日の研究に待つべしと雖、要するに是等の地理は決して極東日本に非ることは斷言して可なり。

神武天皇に關する新研究大要以上に説くが如し。其現日本の地理を以つてしては到底説明すべからざる事は、新研究を以つてする時は極めて明瞭たるなり。現日本に之れ無き地名は希臘方面には明瞭に存在し、現日本地理を以つてしては、矛盾不明なるものも、新研究の地理を以つてする時は、整然として明瞭なり。又神武天皇の天業恢弘の規模の堂々たる、決して舊研究の夢にだも知らざる所にして、新研究始めて之を發揮し得たりと謂ふべく、吾人の斷案の金鐵よりも堅固なるを知るべきなり。何者の侏儒輩ぞ、敢て此大天皇の皇圖を縮壓して、極東現日本の小大和に跼踏せしめんとするぞ。

- 吾平山……………アビラ(Abyla)
- 速吸之門……………マルタ海峡(Malta Strait)
- 珍 彦……………カリブヂン(Charvadis)
- 「艇」……………ガウルヌ(Gaulus)

- 難波……………アカルナラン(Aar-nan)
- 「流れ」……………アケローネス河(Acherons)
- 龍田……………ラヌチエ(Thesieis)
- 膽駒山……………アラキニエス(Aracyuthus)
- 孔舎衛坂……………ブレイネ(Pylone)
- 脛徑……………オレンヌス(Olenns)
- 戦争中止……………リシマキス(Lysimachis)
- 盾津……………スツラツツメ(Shtutis)
- 母木邑……………プロスキウツ(Proshim)
- 雄之水門……………エラウス(Elaus)
- 菴山……………カルキス(Chalcis)
- 名草……………ナウバクツメ(Naupactus)
- 佐野……………オエネオン(Oenon)
- 磐盾……………ヨウバリウツ(Muphium)

- 荒坂津……………ハニエス(Phaesus)
- 丹敷浦……………ロシグリスオゾーリス(Louis-Ozoris)
- 「神毒氣を吐く」……………オエナシニア(Oenthea)
- 「人物威く牽へぬ」……………ヘーラクンニス族(Heracles)
- 高倉下……………オラニウツ(Olnoun)
- 「劔を下す」……………「ブッチャー」(Butcher=Boxing)
- 師の盤……………「ドーリス」(Doris)
- 「劔を奉る」……………コラヌ山(Corax)
- 鳥山……………オタのヒギチ(Oeta, Aegitium)
- 菟田の寮邑……………エノス(Eunos=Evnos)
- 吉野……………パンアイトリウツ(Pan-Aitolium)
- 國見岳……………サトム(Therimum)
- 墨坂……………イウリタネス(Eitynes)
- 磐余……………

香山……………チヤム山(Tiyamus)  
 高尾張……………ヲハリヤ(Oehalia)  
 磯城の邑……………アハラシヤナ(Aperantia)  
 丹生川……………ダフヌス河(Daphnus)  
 伊那佐山……………イナヌ(Aeneas=Aenonia)  
 長髓邑……………ナルタキウヌ(Narthacius)  
 鳥見邑……………コロキネ(Corone)  
 甘美翼手……………メリテ(Melle=Malke)  
 葛城……………コロピナ(Dolopia)  
 檀原……………クラシノン(Cannon)  
 畝火……………エニピウメ(Enipens)  
 榛原……………ハルサロメ(Pharsalos)  
 掖上……………アタマニア(Athamania)  
 味間丘……………ドードーナのヤイルム山(Tomarus, Dodona)

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘリウカレ—ス族の希臘歸來 五一四

秋津洲……………アキツツメ(Aegyptus=Aegis)  
 宇佐……………アソプス(Asofus)  
 岡の水門……………ヲカ(Oae)  
 安藝……………埃及(Aegyptus)  
 埃ノ宮……………ギゼー(Gizah)  
 多耶理宮……………ターゲリエー(Thargelio)  
 吉備……………キヰ(Chomi)  
 南倭……………アビシニア(Abyssinia)

第一章 神武天皇の天業恢弘—ヘリウカレ—ス族の希臘歸來 五一五

(一)羅馬建國者イナイは  
稻氷命

國典の記載

## 第二章 羅馬建國者稻氷命。ピ

### ラミッド王御毛入野命

#### 一 羅馬建國者イナイ王は稻氷命

古事紀と日本書紀との記せる所は、多少異なるありと雖、神武天皇の皇兄稻氷命は、劔を拔て海原の國に入りて、勤持神と化り、三毛入野命、亦浪の穂を踏みて常世の郷に往てませりと。姓氏録は曰く、「稻氷命は新羅の祖なり」と。此皇兄兩人に對する國典の記事は、只是のみにして、何れの書も是れ以外又た何等の傳ふる所なし。人若し兄弟離散して其居所を知る事なく、吉凶之を慶吊せんとするも途なしとせば、あゝ是れ人生の一大不幸に非ずして何ぞや。而して吾れの歴史も、彼れの歴史も之を知らず、極東と西洋と、東西相分れて、こゝに幾百年、或は千幾百年、度せず吊せずして過ごし來れり。

『イナイ』傳

其概要

然りと雖、天は幸に日本の一書生に其恩惠を下し、再び東西兄弟の國を知らしめ給へり。羅馬オ、グスツス時代の詩人ギルギウス(Gilgius)の『イナイ傳』所謂『イニアッド』(Aenid)は、神武皇兄稻氷命の傳記を詩とせるものなるは、比較研究の吾人に啓示する所なるが如し。素よりこれ太古の神話的傳説を材料とせるものにして、必ずしも正確ならざるものあるべしと雖、亦日本國典に一致せるもの無きに非ざるなり。其大略を謂は、  
ホメーロスの『イリアス』中の大英雄イナイ(Aeneas=Aeneas)は、トロイ王族中の英傑にして、トロイ王家は美の女神の子なるイナイ王に由つて繼續せらるべき運命を有し、トロイ没落後、此イナイは、高齢にして歩むこと能はざる老父を肩に載せ、父をして其家の寶物たる神器を抱かしめ、君笏を有せる幼兒イウンツス(Iulus)の手を携え、妻は戦争の混亂中に生き別れ、同族の一團と共に、海に陸に備さに艱難辛苦を経て、遂に伊太利に着し、其地の有力者となり、こゝに帝國の基礎を置き、是れ後代羅馬大帝國として發達するもの

イナイ王と稻水命

にして羅馬人は此イナイを以つて建國の祖なりと傳ふ。(挿畫のイナイ王の肩に載せたる老父の抱けるはトロヤ王家の神器にして、吾神鏡容器に如何に相似れるかを見よ。)

イナイと稻水——こゝに吾人は「イナイ」と「稻水」との發音の同一なるに導かれて、果して其人物上の關係あらざるかの疑問を起さざるを得ざる者なり。素より單に發音のみより比較して其實人物の異同を謂ふは其早計なるべきは之を知る。然りと雖亦是れ比較の着眼と想起とを生せしむる嚮導者と爲すことは決して何等の誤れることなく、之に加ふるに若し其他の材料を考量して、好良なる結果を得べしとせば、是れ大に利得せるものと謂ふべし。然りと雖、先づ兩人名の發音を比較せんか。



ナイイ王(稻水命) 肩に載せたるはイナイ王の父。父の抱けるはトロヤ王家の神器にして女神の像の容器なり。幼き人はイウレウスにして吾磐余彦、神武天皇に當る——羅馬古畫

第二章 羅馬建國者稻水命。ピラミッド王御毛入野命 五一八

(二)磐余彦命とイウレ彦

父子と、兄弟との差異

「イウレ」と「イウレ」

彼れに在つてはイナイは Aeneas (Aeneas) と發音し、我れ亦「イナイ」と「稻水」と發音し、發音一點の差異あることなく、彼れの「イナイ」の語尾「は、エ」と發音し、「イ」と發音し、或は「ヒ」と發音して「イナヒ」と爲すも不可あるなく、又吾が「イナヒ」の語尾「ヒ」は「イ」と發音するを得べく、「イナイ」は「イナヒ」と同一たるなり。

二 磐余彦命とイウレ彦

イナイ傳に在つてはイウレウスはイナイの子なりと傳へ、我に在つては稻水命と磐余彦命とは兄弟たるの差異は之れありと雖、其長と幼との順序は之を同うせり。又其發音の異同を比較せんに、——

彼のイウレウスは之を Iulus と綴れりと雖、ウスは人物語尾の「ス」にして、日本の「氏」に當り、又「彦」に當れる語なるが故に、イウレウスは之を「イウレ彦」なりと謂ふべく、吾神武天皇の磐余は發音に従つて假名もて表はす時は「イワレ彦」にして「彼我」ワ」と「ウ」と一音の差異あるのみ。されども此くの如きは音韻上同一なりと認めて誤あるなし。

第二章 羅馬建國者稻水命。ピラミッド王御毛入野命 五一九

磐石

語原の他のもの  
との異同

國典の不完全

且つ彼のイウレ彦命の「イウレ」はトロヤの別名 *Ilium* と同一語にして「磐」を意味し、イウレ彦命に對して磐余なる支那字を當てあるは偶然ならざる一致なるが如し。前章兄磯城征伐の段なる磐余は希臘語「延長」を意味せる *Peraktes* なる語にして、其の「イウリ」なる發音に由りて之を「磐余」と爲せるもの。如しと雖、其磐余の語幹 *oulys* と今ま此磐余彦命の「イウレ」或は「イウレヌ (*Anteus, Iulus*)」とは「r」と「l」の相違ありと雖、其相違は訛りにして「r」と「l」と轉通する音たり、其語原は同一なるにはあらざるか。尙ほ後日の研究に待たん。若し *Peraktes* と *Iulus (Iuleus)* と關係なき語なりとせば、兄磯を誅し給ひし時の御歌中の「辭」なる語は磐余彦天皇を謂へるに非ずして、兄磯城を謂へるものとなるべし。

古來の解釋者等神武天皇を磐余彦命と稱する理由を解せず、本居の如きも兄磯城の土地なる磐余の地名に出でしものかと爲すと雖、尙ほ之を疑問と爲し置けり。然り、磐余彦天皇の御名の理由及び起原に就ては、國典何等傳ふる所なく、何等徴すべきなく、只だ希臘方面の所傳を以つて補ひ、始めて

(三)熊野海の難船とクマノ海の難船

熊野とクマノ

之を解し得るものゝ如し。

主要するに稻氷とイナイと一致し、磐余彦とイウレ彦と一致し、兩者最も親近なる血族にして、長幼亦其序を同うせるに考ふる時は、是れ彼我同一史傳の別傳を見証可なるが如し。

### 三 熊野海の難船とクマノ海の難船

尙ほ面白き兩史傳の一致は彼のイナイ及びイウレウスにも海上に難船の記事あることにして、其地點は伊太利のクマノ海 (*Cumano*) にして、神武天皇紀なる稻氷命及び磐余彦命の難船は希臘の熊野海たり、一は伊太利なる他は希臘なるとの相違ありと雖、其クマノなるや兩者一たるなり。是れ神武天皇熊野海上の難船史傳が希臘(即ち吾れ)と伊太利とに傳はりて各其同一人種の分脈的植民が同一神話を別々に傳へたるを示めすものにして、其クマノ(熊野海)の名稱上の一致は決して偶然に非ずして、延てイナイは稻氷たり、イウレ彦は、イウレ彦と同一たるを示めすものとなるべし。



(四) 鋤持神  
とサビムシ  
人種  
サビムシの語原

「海原」はウツ  
リヤ

### 四 鋤持神とサビ主人種

稻水命は劍を抜きて海原の國に入りて、鋤持の神と成り給へり。鋤とは劍にして、西班、獨逸、瑞典語等が「軍刀」を *Sabel*、*Sabel* 或は *Sabel* と謂ふは鋤と語原を同ふせるものにして、其人種名と成れるものは *Sabians* と謂ふ。「サビムシ」は鋤主にして鋤持と同意義なり。此人種又たサーベリアン即ちサーベル人種とも稱す。

此人種の國はイナイの入り込みし羅馬附近の地にして、其地方をウツプリア (*Umbria*) と謂ふ。是れ *umbrius maris* 等の「海なる語にして、又た所謂、稻水命の入りませる海原なる國名に當れるなり。此國に隣接してサムニウム (*Samnium*) の國あり、人種を「サムナイト」と稱す。此人種は武勇を尙び尙に劍を帶ぶサムナイトは日本語「士」サムライたるなり、故に常に尙劍し、刀劍は武士の魂なりとし、櫓の音にも目覺むの「覺む」の語は「サムニウム」即ち「醒」の語と同一語を以つて國名と成れるなり。尙此ウツプリアは「海なり」「サムニウム」

(五) 新羅の祖  
即ち羅馬の祖

新羅の語原、伊  
太利

イウリウス・ケ  
ザルは日本同  
人種

我皇家の後裔

は醒むなりとの事は、神功皇后の章に論すべきなり。  
要するに鋤とはサーベルの語原なり、其人種はサビムシ (*Sabians*, *sabini*, *sabellian*) として、イナイの入りし地名として存し、以つて吾稻水命の鋤持神たる事の同一なるを證明せるなり。

### 五 新羅の祖即ち羅馬の祖

姓氏録は稻水命を以つて新羅の祖と爲す。新羅とは勿論極東朝鮮に非ず。伊太利南部を *Syria* と謂ふ、是れシラキ (新羅) なり。後に論すべしと雖、神功皇后の討ち給ひし新羅は羅馬なりしに據つて見る時は、新羅の祖と謂ふは羅馬の祖にして、イナイが羅馬の建國者なりと傳へらるるに一致せるなり。

イウリウス・ケザルは日本同人種——稻水命はイナイたり、羅馬神話に在つては、イウレ彦は其子にして、後代羅馬隨一の英傑たるイウリウス・ケザルは、イウレ彦即ちイウレウスの後裔にして、イウリウス・オクタビウス・ケ

イナイの年代  
 (六)ピラミッド  
 建立者ミケイリノス  
 命は三毛入野  
 國典の記事

ザル亦姻戚たりとせば、彼等は我皇家の後裔にして、系統を稻氷命に引ける者、と謂ふべし。西洋現在の諸王國は皆盡くイウリウスケルザル及びオートグスツク、イナイの帝國の分裂に成れりとせば、我皇室本枝の全世界史に於ける位置たるや、あつ實に堂々たるものなるかな。

イナイの年代——西洋史家はイナイを以つて神話時代の人物となし、其年代等は得て之を詳にすべからずと爲せりと雖、羅馬建國の年代は耶穌紀元前七百五十三年にして、神武紀元は六百六十年、其差九十三年なりとす。

六 ピラミッド建立者ミケイリノス  
 王は三毛入野命

稻氷命此くの如く夫れ英傑なり。吾人は尙ほ神武皇兄に他方面の大王あるを發見する者なり。三毛入野命是れなり。然りと雖國典中何等此命に就て記せる事なし。然りと雖西洋方面に於ては、尙ほ多少此命に就て知り得る事なきに非ざるなり。

第二章 羅馬建國者稻氷命。ピラミッド王御毛入野命 五二四

常世國—埃及  
 常世の語原  
 埃及  
 三毛入野命

常世國(埃及)——三毛入野命は浪の穂を踏みて常世國に入りませり。埃及にミケイリノスなる王あり。三毛入野命と其名を同うす。或は是れ同人にはあらざるか。何となれば其ミケイリノス(Mycerinus)はミケイリノ(三毛入野)たればなり。

常世とは何れを謂ふものなるぞ。第十章四節に述べし如く、常世の語原は *Thog* 即ち弓矢の國を意味す。弓矢の神はアポロニにして、埃及はアポロンの國たるなり。アポロニは「ミーズ」にして、其轉訛は猶太教のモーゼとなり、埃及はモーゼの國として傳へらるゝは、是れアポロニ即ち之を弓矢の神の國たるを示めすものなり。

されば三毛入野命の入りましゝなる常世國とは、其埃及を謂へるものなるを知り、又た其研究法を逆にして、埃及にミケイリノス王あるに考へ、其聲音の全然同一なるに基づき、此王は三毛入野命なるをしの假定より出立して、常世國は或は埃及を謂へるものにあらずやと推測すること、一概に否定すべからざる事となす。

第二章 羅馬建國者稻氷命。ピラミッド王御毛入野命 五二五

七ギゼー三角塔と三毛入野命

赤色ピラミッド  
ミケイリノス王

神武天皇のギゼ  
一帝在

### 七 ギゼー三角塔と三毛入野命

埃及ギゼー(Gizeh)支那史娚<sup>ギゼ</sup>と書すに最大三角塔三個ありて、其第三なるは大きに於て他の二者に劣ると雖、琢磨せる花崗石を以つて其外面を蔽ひたれば、其美に於ては他の二者に優れり。之を赤色ピラミッドと爲す。此三角塔は埃及古帝國第四朝のミケイリノス(Mykeros)王の建築せる所にして、ミケイリノスは希臘名なりと雖、埃及名にてはメンケラ、或はメンケレ、或はメンカラと謂ふ(Menkara, Menkare Menkara)。

今若し吾三毛入野命は前に謂へるが如く、彼のミケイリノスなりせば、此三角塔は吾三毛入野命の建築に係るものにして、又た是れ此命の墳墓たるなり。

國典に據れば三毛入野命は又た三毛野命と謂ふ。是れ「ミケイリノ」より例の「音」を落せしものなるべし。神武天皇亦た稚三毛野命と謂ふ。これ亦稚三毛入野命にして、ピラミッド王と同名たるなり。單に其名稱を同うせ

ミケイリノス王  
は三毛入野命

八三毛入野命の御骨は  
今現に英  
國博物館に  
あり

### 八 三毛野命の御骨は今現に英

るのみに止まらず、又前章に論せし如く、神武天皇——蓋其御名を負へる一團——(或は三毛入野命にあらざる)——は埃及宮、或は多祁理宮に留まり給ふこと七年にして、埃及宮、或は多祁理宮に此ギゼーの地なるに考ふる時は、埃及史上のミケイリノス王は、稚三毛入野命の方面よりするも、常世國に入りまじしと傳ふる所の皇兄三毛入野命の方面よりするも、第三ピラミッド王ミケイリノスは、吾三毛入野命に縁あり、否其同一人物なるは、蓋否む可からざる。断案なるが如く、吾國典が何等傳ふる所なく、教ふる所なき神武皇兄三毛入野命は、明かに埃及第四朝の第三代ミケイリノス大王たるを知り得たるものと謂ふ可し。若し夫れ然りとせば、吾人は尙ほ此命に就ては、彼地のヘーロド、ス及びデオドロス等の歴史及び埃及の發掘物等に由りて、大に知る所あるべきなり——然り、最も重大なる事は、明瞭以上の明瞭を以つて吾人に知られ來るなり。

今、この石像の  
六、三、二、一、入、野、命、の、石、像、

ホリド・バイ  
ス將軍の發見  
三毛入野命の石  
像

碑文

### 國博物館に在り

近時埃及研究盛にして種々の遺跡は種々の人に由て發掘せられたり。英國の Howard Vissio 將軍は此第三ピラミッドを研究して其内部の室なる最奥部にミケイリノス王の木之伊を收めたる石像あるを發見せり。石像は青色玄武石より成り、形象文字もて之れに左の碑文あり。

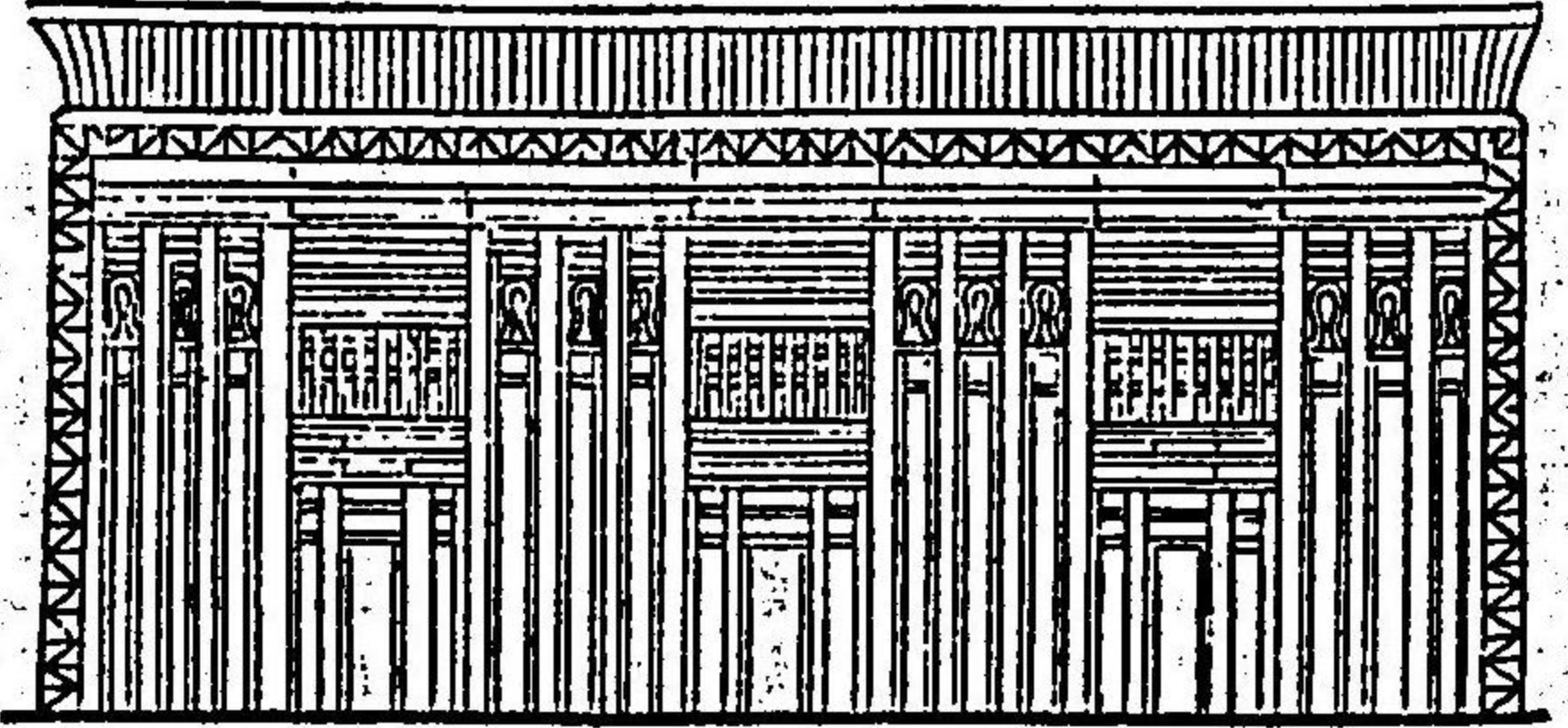
『オシリス (Osiris) の神、永生不死のメンカラ (Menkara) は天より生れて、オシリスの母、オシリスの懐に抱かれ、セプ (Sopdet) の夫の神の後裔となり。爾の母、オシリスは爾の身の上を蔽ひ、上天神秘の其女神の名に由りて、女神は爾を神と爲し、爾の敵を滅ぼし給ふ。永生不死なるメンカラ王。』

此石像は之を英國へ輸送中海上に失ひたり。惜しむべきなり。然りと雖、最も貴重なる物は尙ほ遺れり。バイス將軍が此ミケイリノス王の木之伊なる遺物、御遺骸——是れなり。バイス將軍が此ミケイリノス王の木之伊なる遺

英國博物館

骸を發見したるは、該ピラミッド上部の室にして、御遺骸は床上に散亂しあり、尙ほ其他に纏卷用の毛布及び空虚なる棺の棺等ありき。御遺骸は片々となれるものにして、肋骨、背椎、足骨、脚骨、及び腿部の乾肉等は、完全に保存せらる。其年代に關しては、甚だ不明瞭なり。雖、紀元前四千年頃ならんがと言ふ然りと雖、埃及太古の年代は一定せるものなく、學者の説二三千年の差あるなり。

凡そ是等御遺骸は、盡く英國に輸び去り、之を英國博物館に藏せり。實にミケイリノスの木之伊は人間の知れる限りの人間の骸骨の最も古きものにして、學術上より言ふ時は最も貴重なるものなり。



ミケイリノス王(三毛入野命)の石像  
埃及ギゼーの三角塔より出でしもの  
なるが英國に輸送中海上に失ひた